

仙台市文化財調査報告書第112集

東光寺遺跡

第1・2次発掘調査報告書

1988年3月

仙台市教育委員会

東光寺遺跡（第112集）正誤表

誤りがありましたのでお詫びして下記のように訂正いたします。

頁	内 容	誤	正
P 1	2. 調査指導・助言	庄子貞夫 村山斌 多賀城跡調査研究所 多賀城教育委員会 東北歴史史料館	庄子貞雄 村山斌夫 宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城市教育委員会 東北歴史資料館

仙台市文化財調査報告書第112集

東光寺遺跡

第1・2次発掘調査報告書

1988年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市岩切地区周辺には、史跡岩切城跡をはじめ、中世の城館、磨崖佛群、板碑群など、他の市域では見られぬ中世の遺跡が数多く所在する地域であります。

仙台市域の都市基盤の整備構想に伴い、交通網の整備拡充が希求されてきており、この度の岩切地区における県道泉・塩電線の拡幅・整備工事もその一翼を担うものであります。

開発と文化保全の対峙は、いつも担当する我々の悩みではあります。しかしながら、未知なる文化遺産に調査のメスを入れることによって歴史を解明し、調査成果を市民の皆様に公開し、可能な限り遺跡保全の措置をとっていくことが当教育委員会の務めだとすれば、全力をあげて、ことに当たっていかなければなりません。

今回の東光寺遺跡の発掘調査の結果、これまで文献上でしか想定できなかった「中世東光寺」の姿が、大量の瓦とともに浮かび上がってまいりました。また、近世の絵画史料『奥州名所図絵』に描かれた東光寺周辺の歴史的な景観を旁観とさせる石窟、石段、竪穴構造などの調査や、河川跡からは近世陶磁器など大量の遺物も出土し、これまで知りえなかった遺跡の性格をも解明することができました。

また、当初、工事で削平する予定であった石窟群に対し、担当部局と協議の結果、復元可能な精度の写真実測を行い、6号石窟奥院「地蔵菩薩座像」については切り取り移設工事を実施することができました。これは、地域の皆様、中世史研究者の方々、宮城県土木部、宮城県仙台東道路事務所のご理解、ご協力の賜ものと深く感謝いたしております。

この調査に参加された皆様方、本書の作成にあたりご助言、ご協力下さいました各位に御礼申し上げるとともに、本書が市民の文化財理解の一助となることを念じつつ、序とさせていただきます。

1988年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

例　　言

1. 本書は、主要県道泉・塩竈線改良工事に伴う宮城県仙台市所在・東光寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 東光寺遺跡は、本調査開始以前においては「東光寺城跡・東光寺横穴群・東光寺磨崖仏群・東光寺板碑群」と個別の遺構毎に呼称されていたが、昭和61年12月、複合遺跡であるとの観点から、「東光寺遺跡」と改称している。
3. 本報告書の土色は、「新版標準土色帳」(小山・佐原：1970)に基づいている。
4. 本報告書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。
5. 本報告書の座標は全て国道座標を用いており、真北を基準としている。
6. 本文の執筆・編集は、金森安孝が担当した。
陶磁器の観察については、佐藤洋氏の協力を得ている。
付編については、石黒伸一朗、矢島義則、土生進、松木吉信の各氏に執筆をお願いした。
7. 本報告書は、次の通り分担して作成した。

遺物実測・トレース・拓影…古川一明、小野寺雄、大友義信、山田太、庄子信哉、鈴木正道、佐藤浩道、佐藤均、渡辺久幸、勝又洋行、相沢円、
齊藤昭子、宅岐裕子、佐藤勢子、遠藤すけ子、佐藤齊
遺物写真………勝又洋行、文屋茂、鈴木正道
図面整理・図表作成………小林充、佐藤浩道、佐藤勢子
遺構トレース………小林充、佐藤浩道

8. 本調査で検出された遺構については、次の遺構略号を使用した。
SA：柱列　SB：建物　SD：溝跡　SE：井戸　SI：竪穴遺構
SK：土坑　SM：石窟　SR：河川　SS：段階　SX：性格不明遺構
遺構略号で、SD-1は1号溝跡を示している。
9. 本調査において出土した遺物については、下表の通りの略号を付して登録した。
- | | | | | | |
|---|----------------------------------|---|---------|---|--------|
| B | 弥生土器 | C | 上器（非クロ） | D | ロクロ土器 |
| E | 須恵器 | F | 丸瓦・軒丸瓦 | G | 平瓦・軒平瓦 |
| H | 鬼瓦・その他の瓦 | | | | |
| I | 陶器（I a：無釉陶器／土器・陶器以外を含む　I b：施釉陶器） | | | | |
| J | 磁器 | K | 石製品 | L | 木製品 |
| N | 金属製品 | O | 自然遺物 | P | 土製品 |
10. 本調査の成果については、調査期間中に2度開催した現地説明会の資料に一部掲載されているが、本書の記載内容がこれに優先するものである。
11. 本調査に係る各種実測図・写真及び出土遺物は、仙台市教育委員会が一括保存している。

目 次

序文

例言

目次

I 調査に至る経緯と調査要項	
1 調査に至る経緯	1
2 調査要項	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	4
III 調査の方法と経過	
1 調査方法	5
1) 調査区の範囲	5
2) 測量の基準と方法	7
2 調査経過	7
IV 検出遺構と出土遺物	
1 検出遺構	11
2 出土遺物	39
登録遺物目録	91
V まとめ	105
引用・参考文献	107
VI 付録	
1 仙台市東光寺出土の板碑と七北田川下流の板碑概観	石黒伸一朗 110
2 東光寺遺跡 6・10号石窟写真測量	アジア航測㈱ 矢島 義則 138
3 東光寺遺跡 6号石窟切り取り保存工事概要	宮城県仙台東土木事務所 土生 進 147 佛根本建設 松木 吉信
写真図版	159
付図 1 6号石窟「地蔵菩薩坐像」実測図	
2 10号石窟実測図	

I. 調査に至る経緯と調査要項

1. 調査に至る経緯

県道泉・塩竈線の改良工事に伴って、昭和61年1月17日付けで仙東土第195号の遺跡発掘通知が仙台市教育委員会に提出され、東光寺城跡・磨崖仏群の一部が道路改良工事によって削平されることになり、昭和61年8月、仙台市教育委員会は宮城県教育委員会を交え、工事担当の宮城県仙台東土木事務所と協議の結果、記録保存を前提とした事前調査を実施することとなった。

2. 調査要項

遺跡名：東光寺遺跡（從来は東光寺城跡であったが、横穴、磨崖仏群、板碑群などの複合遺跡であるため、昭和61年12月、遺跡名称を変更している。）

所在地：仙台市岩切字入山・台屋敷

調査目的：県道泉・塩竈線改良工事に伴う発掘調査

調査期間：第1次調査＝昭和61年10月23日～昭和62年2月9日

第2次調査＝昭和62年4月21日～昭和62年6月27日

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査係

宮城県教育委員会文化財保護課調査第二係

調査員：金森安孝、松本清一、工藤哲司（以上 仙台市）

古川一明、伊藤裕（以上 宮城県）

調査指導・助言：伊藤清郎、伊東信雄、入間田宣夫、上原真人、大石直正、大三輪龍彦、岡田清一、加藤道雄、工藤雅樹、桑原滋郎、小井川和夫、斎藤利男、佐川正敏、佐々木慶市、佐々木光雄、佐藤正人、沢田正昭、庄子貞夫、新庄屋元晴、新藤秋輝、千葉孝弘、千々利到、丹羽茂、藤沼邦彦、藤本正行、村山城、齋田慶信、森剛男、山田一郎、渡辺泰伸、多賀城跡調査研究所、多賀城教育委員会、東北歴史史料館、宮城いしづみ会

調査協力：宮城県土木部道路建設課、宮城県仙台東土木事務所、東光寺、東光幼稚園、岩切公民館、鶴沢はる、赤間精作、佐々木孝雄、佐々木政雄、赤間東吉、三浦丈大、赤間きよ、アジア航測㈱、㈱東北地形社、㈱日成リース、㈱丸重大友工務店、㈱近畿ウレタン工業、㈱根本建設、芝玄㈱

調査対象面積：880m²

調査面積：第1次調査＝約350m²

第2次調査=約750m²

調査参加者：小林充、大友義信、小野寺雄、山田敏雄、山寺槙子、眞中雅子、齊藤昭子、赤間尚子、山田太、庄子信哉、鈴木正道、佐藤浩道、佐藤均、渡辺久幸、勝又洋行、小山羊右、赤間たゑ子、赤間初五郎、遠藤長治、佐藤良子、鈴木あきえ、中川初枝（下線を引いた者は整理作業にも従事）

整理参加者：相沢円、壱岐裕子、佐藤勢子、遠藤すげ子、佐藤卉、文屋茂

II. 遺跡の位置と地理的環境

1. 地理的環境

東光寺遺跡は、仙台駅の北東約7kmの仙台市岩切入山・台屋敷に位置する遺跡である。

泉ヶ岳に源を発し、遺跡の南面を流れる七北田川は、奥羽山系から東に延びる富谷・七北田丘陵を東流しながら開析し、東光寺遺跡付近で松島丘陵から伸びた標高100m以下の低い丘陵に最も近付いた後、次第に南流し、仙台湾に注いでいる。

七北田川流域の地質は、凝灰岩、礫岩、砂岩、シルト岩よりなる中新統七北田層・白沢層・鮮新統の亀岡層からなり、いずれの層も凝灰岩・シルト岩が主体である。

七北田川の河谷幅は、流域面積に比して大きく、しかも上流から下流までは一様の谷底平野が広がっている。流域には、4段の段丘が発達し、とりわけ国道4号線より上流側には発達が著しい。七北田川はこれらの段丘面の間を蛇行を繰り返して流下し、谷底平野には比高3m程の自然堤防を発達させており、国道4号線沿いの七北田川より下流側には比高4mに達するところもある。

現河床沿いの堤外間に、比高3mにも達するシルト質の細砂の堆積が認められる。堤内ならびに旧河道沿いに見られるものは、比高1m前後の小規模なものである。

七北田川は、このように上流から下流まで殆ど同一幅の谷底平野を有し、自然堤防を発達させている。

自然堤防と自然堤防の間に挟まれた後背湿地はあまり顕著ではない。

旧河道の数も少なく、あまり大きな乱流を繰り返さず、土砂の供給量の少ない河川であることと一致する。

東光寺遺跡の位置する仙台市岩切付近は、上流側の自然堤防と、それより下流の海潮性低地、ならびに浜堤との境界部分に当たっている。

東光寺遺跡付近は、主に凝灰質砂岩からなっており、石窟や横穴を造り易い地質構造になっている。



第1図 遺跡分布図 (『仙台東北部』 1:25,000、国土地理院)

番号	遺跡名	所在地	立派	類別	時代	14	岩切字源ノ墓	岩切字源ノ墓	自然施設	集落跡	開発・中世
1	東光寺遺跡	岩切字李入山	丘陵斜面	墓	古墳・古墳	15	浦ノ墓道跡	岩切字源ノ墓	自然施設	集落跡	古代・小字
2	国史跡 岩切城跡	岩切字入山	丘	城	古	16	松森城跡	松森下町	丘	城	中・古
3	地藏堂古跡	岩切字谷尻	丘陵斜面	板	新	17	越後道跡	松舟下町	自然施設	古含溝	古代
4	若宮前遺跡	岩切字若宮前	丘陵斜面	破	新	18	嘉瀬沢丘陵跡	鶴子字嘉瀬沢	丘	堆	開発・古代
5	河ノ口遺跡	岩切字洞ノ口	自然地形	包	含	19	黒沢遺跡	黒沢東三丁目	丘陵斜面	古含溝	?
6	洞ノ口古跡	岩切字洞ノ口	自然地形	破	新	20	千人塚古墳	岩切字山崎西	丘陵斜面	円溝	古墳
7	古墓羣 穴	岩切字里堅	丘	陵	横穴	21	山崎圓墳跡	岩切字山崎東	丘	堆	古含溝
8	人生天 模六	岩切字人生沢	丘	陵	横穴	22	北側遺跡	鶴子字北側	丘	堆	古含溝
9	人生火薙跡	岩切字人生沢	冲積平野	包	含	23	使森城跡	鶴子字水山	丘	陵	中・古
10	新田園遺跡	岩切字子刈田	自然地形	包	含	24	西府利旁谷字堀	丘	陵	横穴	古墳
11	今志遺跡	岩切字三所北	自然地形	包	含	25	菅谷墓跡	菅谷引添代、下段ノ河	丘	陵	古含溝
12	大正遺跡	岩切字大正	自然地形	包	含	26	大原塚石塚	菅谷字馬頭崎	丘陵墓	石室	古山
13	稚	岩切字稻荷	自然地形	破	破	27	新田遺跡	多賀根市新田山王	自然施設	古含溝	古墳・中世

2. 歴史的環境

東光寺遺跡周辺の遺跡を見ると、七北田川両岸の丘陵面と自然堤防上に集中している。弥生時代以前の遺跡は現在のところ確認されておらず、不明な点が多く、古墳時代以降の遺跡、遺物について概観する。

高塚を有する古墳では、千人塚古墳が一基のみ確認されており、原型は留めていないが円墳と推定される。また、岩切小学校所蔵の円筒埴輪は、同校の隣接地より出土しており、更に、本遺跡の東南1.5kmの多賀城市新川遺跡でも円筒埴輪が出土しており、共に高塚古墳のあった可能性を示唆している。

集落としては、鴻ノ巣遺跡から古墳時代前期（塩竈式期）の遺物や、中期（南小泉式期）の住居跡や周溝墓などを発見している。新田遺跡からは中期（南小泉式期）の遺物を出土している。

この他、台ノ原・小田原丘陵の東部、大蓮寺窯跡は初期須恵器生産窯として名高い。

古墳時代終末から奈良時代にかけては、丘陵の麓に善応寺・東光寺・入生沢・台屋敷・菅谷の横穴墓群が形成され始める。善応寺横穴群は推定で100基を超えるといわれ、このうち2、3基がこれまでに調査されている。また、入生沢、台屋敷横穴群は、総数70基ほどで、中には蒲鉾形や家形の玄室が残っているものもある。

奈良時代には、本遺跡の東約4kmの位置に陸奥国府である多賀城が造営され、南西約7kmの陸奥国分寺・同尼寺などと共に、東北の一大中心地として栄えた。これらに供給される瓦・土器などの生産が台ノ原・小田原丘陵上で開始され、一大窯跡群が形成されていた。

平安時代の遺跡には、漆紙文書や瓦を出土し、官衙風建物が建っていたと考えられる南西丘陵上の燕沢遺跡、鴻ノ巣遺跡、岩切畑中遺跡等の他、多くの遺跡で中世に至るまでの遺物を出土し、集落としての発達を窺うことができる。

源頼朝の平泉征伐の後、陸奥国留守職に任命された伊沢氏の居住の地として多賀城と共に栄えた岩切・利府周辺には、岩切城跡、東光寺城跡、松森城跡、笠森城跡、化粧坂城跡、竹林城跡、利府城跡等の中世の城館跡が多く見られる。また、東光寺境内には、嘉暦2年（1327）銘の板碑をはじめとする多数の板碑が分布しており、地蔵堂・洞ノ口等周辺の板碑群と共に極めて多くの板碑が集中する地区である。中世の作と推定される石窟仏も東光寺・菅谷に残っている。

留守家文書には、鎌倉時代後半に、冠屋市場、河原宿五日市場等の記載が見られ、七北田川沿いに活発な商業活動が営まれていたことが窺える。更に、紙屋別所が形成される等、生産活動も活発に行なわれていたと推測される。また、東光寺をはじめ留守氏の菩提寺である加瀬寺

や神宮寺、熊野堂等、数多くの寺社が立ち並び、国府の官人達の往来によってもたらされた高い文化を背景に、地方にあって政治・経済の中心的な都市を形成していた。

岩切地区は、昭和16年に仙台市に合併されたが、それ以前は宮城郡岩切村と称し、今市・余目・洞ノ口・若宮・台屋敷の集落からなっていた。特に今市の集落は、街道に沿った町並みが形成されており、江戸時代は足軽町として、宿場町として栄えた利府と共に交通の要路であった。

III. 調査の方法と経過

1. 調査方法

1) 調査区の範囲

調査区は、生活道路や崖面が含まれていることから、工事で掘削を受ける部分全体を対象にすることが不可能であったため、第2図のような調査区の設定となった。

調査は、1～3号石窟前に第1トレーニチ、4～8号石窟前に第2トレーニチ、崖上の平場西側に第3トレーニチ、南側と中心部、東側縁辺部に第4トレーニチ、南東先端部に第5トレーニチを設置した。

その後の第2次調査で、西側の崖下、第9・10号石窟前に第6トレーニチ、調査事務所設置場所にも第7トレーニチを設置し、更に第1トレーニチを極力東側に拡張するようにした。

第1トレーニチは、表土を重機を用いて除去し、外部に搬出した後、精査を実施し、次いで第1～3号石窟の精査にかかった。

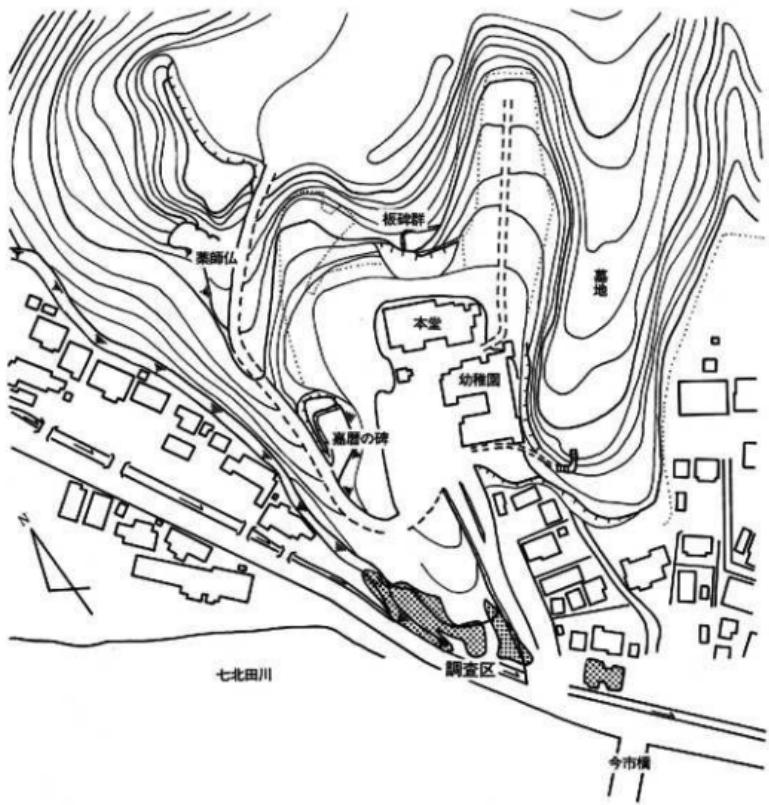
第2トレーニチは、第4～8号石窟を調査の後、表土排除を調査区西側（後の第6トレーニチ）に行い、精査に入った。

第3トレーニチは、土壌状の高まりのある崖ぎわ部分のみ手作業で行い、内側の平坦部は重機で表土を排除し、精査を実施した。

第4トレーニチは、第3トレーニチの調査で、土壌状の高まりが搅乱を受けた際の段差であることが判明したため、 $2 \times 2 m$ ・4本、 $1 \times 5 m$ 、 $2 \times 7 m$ の大きさの試掘孔を開けて搅乱が岩盤まで及んでいることを確認した。

第5トレーニチは、崖の先端部に位置し、搅乱が及んでいないことが分かったため、崖の縁辺までトレーニチを広げた。

第2次調査で行った第6トレーニチの調査は、第3トレーニチの西側の崖面の土砂を足場に組んで剥がして被覆土に含まれている遺物を採集し、土砂を外部に搬出してから開始した。まず、第9号石窟の被覆土をはずして精査し、その後、崖の基部の表土を除去し、精査を加えた。



第2図 調査区周辺位置図

第7トレンチは、重機を用い1.5m程の表土を除去した後、精査を行ったが、河川・溝跡の為、土量が多く、且つ地表面よりも5m余り低くなった為、ベルトコンベアで土砂を搬出した。

第1トレンチでは、一部を検出した遺構のプラン確認をするために調査区を拡張した。

2) 測量の基準と方法

調査区は数カ所に分かれ、且つ見通しが利かなかった為、調査前に実施した地形測量の測点を基準とする任意の座標系を用いて実測した。

平面図・断面図は原則として縮尺1/20で実測し、遺構堆積土のセクションについては一部を1/10で実測した。

調査終了後に、調査区南側県道泉・塩竈線の路上に仙台道路部が設置した測点の国道座標を引いて調査区の座標系を換算した。

2. 調査経過

昭和61年10月から実施した調査は、城跡の遺構とみられていた凝灰岩崖上部の土壘状高まりの測量実測図を発掘調査によって検証することから着手した。

その結果、崖上部の平場の殆どが昭和51年頃に行われた東光寺幼稚園の園庭造成工事によつて削平されており、土壘状の高まりは削平を受けずに残っている崖の縁部であることが判明した。

崖の東側先端部と西側では、岩盤を削って造り出した堅穴造構、階段造構、礎石、「井戸」状造構、ピット等を検出した。それらの遺構の被覆土からは中世陶器と共に軒瓦や鬼瓦等各種の中世瓦を出土し、発掘調査による県内初の出土例となった。

続いて行った凝灰岩側面の8基の石窟の調査では、6号石窟奥壁に半肉彫りされた「地蔵菩薩坐像」と内部施設を確認、ステレオ写真を用いた立体図化を行なった。

石窟外の調査では、東光寺山門西側1~3石窟の前の第1トレンチ(1T)で、方形に巡る溝跡や土坑、ピットを検出し、仏像の一部とみられる土人形を出土し、文化・文政年間(19世纪前半)に描かれた「奥羽名所図絵」にみえる「十王堂」跡に関わる遺構と推定した。

4~8号石窟の2Tでは、岩盤を削り出した「階段」状造構、礎や土砂を積み上げた階段、土坑を検出した。

発掘調査の進行に伴い、新たな知見が上がり、考古学に留まらず、文献、板碑、保存科学等、各界の研究者からのご教示、指摘もあって、東光寺遺跡発掘調査成果の検討会を昭和62年1月24日、調査事務所において開催した。

その場の意見交換、問題提議を受け、東北学院大学教授大石直正氏を代表とする東北在住の

中世史研究者が、宮城県教育委員会文化財保護課および仙台市教育委員会文化財課に対し、遺跡の保護および調査の続行について要望書を提出した。両委員会では、直ちに検討に入り、仙台東土木事務所の了解を得て、未調査部分の記録調査の続行を決定し、6号石窟の保存についても検討を加えることとなった。

第1次調査もほぼ終了した昭和62年2月8日、現地説明会を実施、200名を越す市民、文化財愛好家が参加した。その折、近隣に住む三浦丈夫氏が、昭和59年秋の大雨によって崖面からの崩落土から表面採取したというほぼ完形の鬼瓦H-2が寄贈された。

昭和62年4月、第2次調査を再開し、第1次調査に使用した調査事務所の設置場所の調査を行った。その結果、19世紀の河川跡と杭列、「洗い場」跡を発見、堆積土から焼土と共に大量の遺物を出土した。この河川跡は七北田川本流もしくは、『奥州名所図絵』にみえる「途絶川」と推定できる。

この河川に切られ、東光寺方向から流れる18世紀の溝と杭列、橋脚を発見、堆積土の中からは種子のある板碑4点も出土した。

更に、これらの河川・溝に切られる、井戸・溝・ピット等の中世の遺構面を検出し、陶器・古鏡・板碑を出土した。

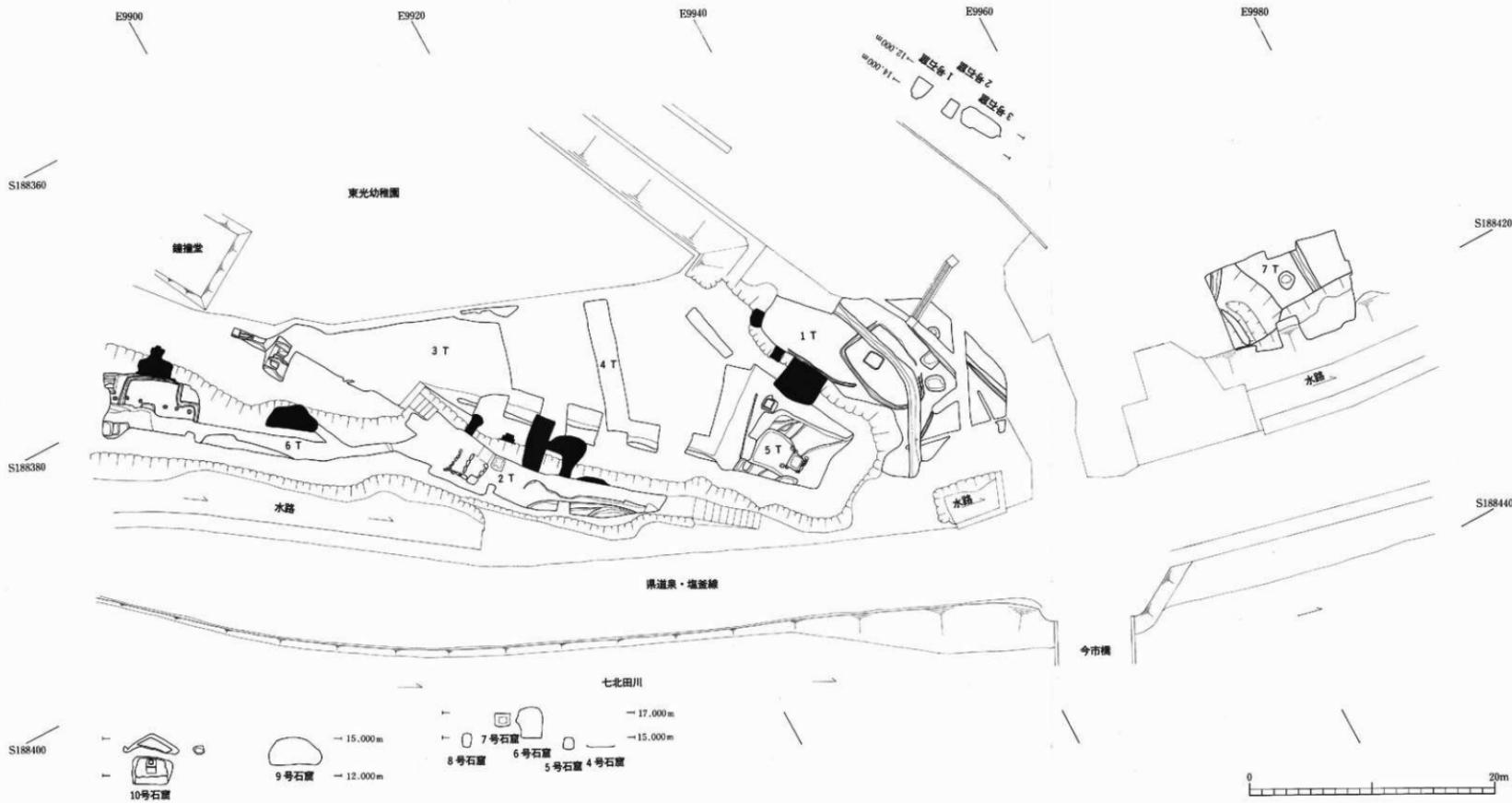
次いで、西側の崖面で確認された9号石窟及び西側に位置する10号石窟の調査に着手した。崖面の土砂にも大量の瓦類が含まれていたため、足場を組んで被覆土を除去し、岩盤を露出させた。その後、9号石窟内の堆積土を除去、実測を行い、2T西側で検出した階段遺構の積み土の範囲を確認した。西側の崖下部分には6Tを設定し、10号石窟前庭部分の調査を行なった。方形に巡る溝跡、ピット列を検出、屋根形の彫り込みに対応するとみられる建物跡の存在を裏付けた。

1Tについても、極力記録保存を行なうという観点から、最低限の生活道路部分を確保した上で、東側に調査区を拡張した。その結果、近・現代の暗渠、土坑を検出した。

6月14日には、再度、現地説明会を実施し、出土した遺物の一部を復元し、市民に公開することができた。

調査終了後、6号石窟の保存については協議が重ねられ、技術・費用面の制約から、奥壁部分のみ、切り取り・移設を行ない、工事終了後に覆屋を建設、東光寺山門西側に安置した上で、昭和63年度には薬品により保存処分を施すこととなった。

10号石窟については、当初削平が及ばない予定であったが、工事内容が変更されたため、ステレオ写真測量を用い、復元できる記録を残した。



第3図 調査区配置図・石室正面図

IV. 検出遺物と出土遺物

1. 検出遺物

1 T

東光寺参道脇に3基の石窟が開口している。その全面の平場に調査区を設定し、表土を重機によって排土し、凝灰岩岩盤上面で遺構を検出した。表土は5~20cm程で、現代の搅乱土である。参道西脇には、凝灰岩切り石で覆われた調溝があり、それに並行する溝跡、板碑を礎石に敷いた土坑を検出した。

これらに切られ、調査区中央で方形に巡るSD-1溝跡、その内側にSK-1土坑、1・2号石窟の前方で凝灰岩の崖基部を巡るSD-2溝跡、調査区南側でSD-3溝跡を、3号石窟前方で柱穴とみられるSA-1ピット列を検出した。

1号石窟：3基の石窟の北側に位置し、南向きに開口する石窟である。立体形はドーム形を呈し、平面形は正角形を呈するが、コンクリートによる台座があり、供物台も削りだされている。近年の掘鑿である。

2号石窟：3基の石窟の中央に位置し、東向きに開口する石窟である。立体形は長方形を呈し、平面形は $1 \times 1.2m$ の方形で、天井部が浅く、床面の半分ほどしか張り出さない。床面の3/4にコンクリートが打たれ、観音開きの鉄の門扉が施設されており、調査直前まで仏像が安置されていた。近年の掘鑿である。

3号石窟：3基の石窟の南側に位置し、東向きに開口する石窟である。立体形は長楕円形を呈し、平面形はほぼ方形を呈す。幅2.8~3.3m、奥行き3.3m、高さ1.4~1.7mで、天井部の底状張り出しがいくぶん床面よりも浅めである。奥壁右基部の床面には20cm程一段高い「台床」や、炭化物の詰まったピットが認められる。右側壁には彫像らしき壁面の盛り上がりが認められたが、削落がひどく影像である確認はできなかった。床面と石窟前面の平坦面とは数cmの段差を有する。近年まで浮浪者が生活していたため、天井部や壁はほぼ全面が煮炊きにより煤けて、ゴミが散乱していた。出土遺物はない。

SA-1柱列：ヒットNo.9・No.15・No.17は、間隔約1.7mで直径(35~40cm)、深さ4~17cmで堆積土が類似しており、柱列であるとみられる。出土遺物はない。

SD-1溝跡：3号石窟のやや南側、調査区中央で検出された。東西4m、南北約8mの規模で、南東角がいくぶん内側に丸く入り込み、東辺が削平されではいるが、方形に巡る溝跡である。上端幅15~55cm、下端幅10~25cm、深さ7~20cm程で断面形は舟底形を呈し、堆積土は黒褐色ないし暗褐色の砂質シルトである。出土遺物には土人形P-33がある。

SD-2 溝跡：調査区を囲む崖面基部で検出された。逆L字形を呈し、北側で幅が広く、南端で消失する。上端幅25~70cm、下端幅15~40cm、深さ5~18cm程を計り、断面形はくずれた舟底形を呈する。堆積土は暗褐色の砂質シルトで、出土遺物はない。

SD-3 溝跡：調査区南側を東西方向に延びる溝跡で、調査区内で4.7m分を検出した。上端幅8~27cm、下端幅7~20cm、深さ3~10cmを計る。断面形は逆台形を呈し、堆積土はにふい橙色砂質シルトで、出土遺物はない。

SD-4 溝跡：調査区中央を南北方向から南西に延びる溝跡で、調査区内で15.7m分を検出した。上端幅45~90cm、下端幅25~66cm、深さ7~36cmを計る。断面形は逆台形を呈し、堆積土は上層が黒褐色粘土質シルトで下層は暗オリーブ色砂質シルトである。出土遺物には陶器窓Ia-27がある。

SD-5 溝跡：調査区東側を南北方向に延びる溝跡で、調査区内で8.7m分を検出した。SK-3土坑に切られる。上端幅6~30cm、下端幅16~40cm、深さ20~30cmを計る。残存の良好な部分は一辺が30~50cm大の凝灰岩切り石で蓋をされ、暗渠となっている。断面形は逆台形を呈し、堆積土は暗オリーブ褐色粘土質シルトで下層がグライ化している。出土遺物はない。

SD-6 溝跡：調査区東端を南北方向に延びる溝跡で、調査区内で4.4m分を検出した。上端幅21~45cm、下端幅15~30cm、深さ11~17cmを計る。断面形は逆台形を呈し、堆積土は暗オリーブ褐色粘土質シルトで、出土遺物はない。

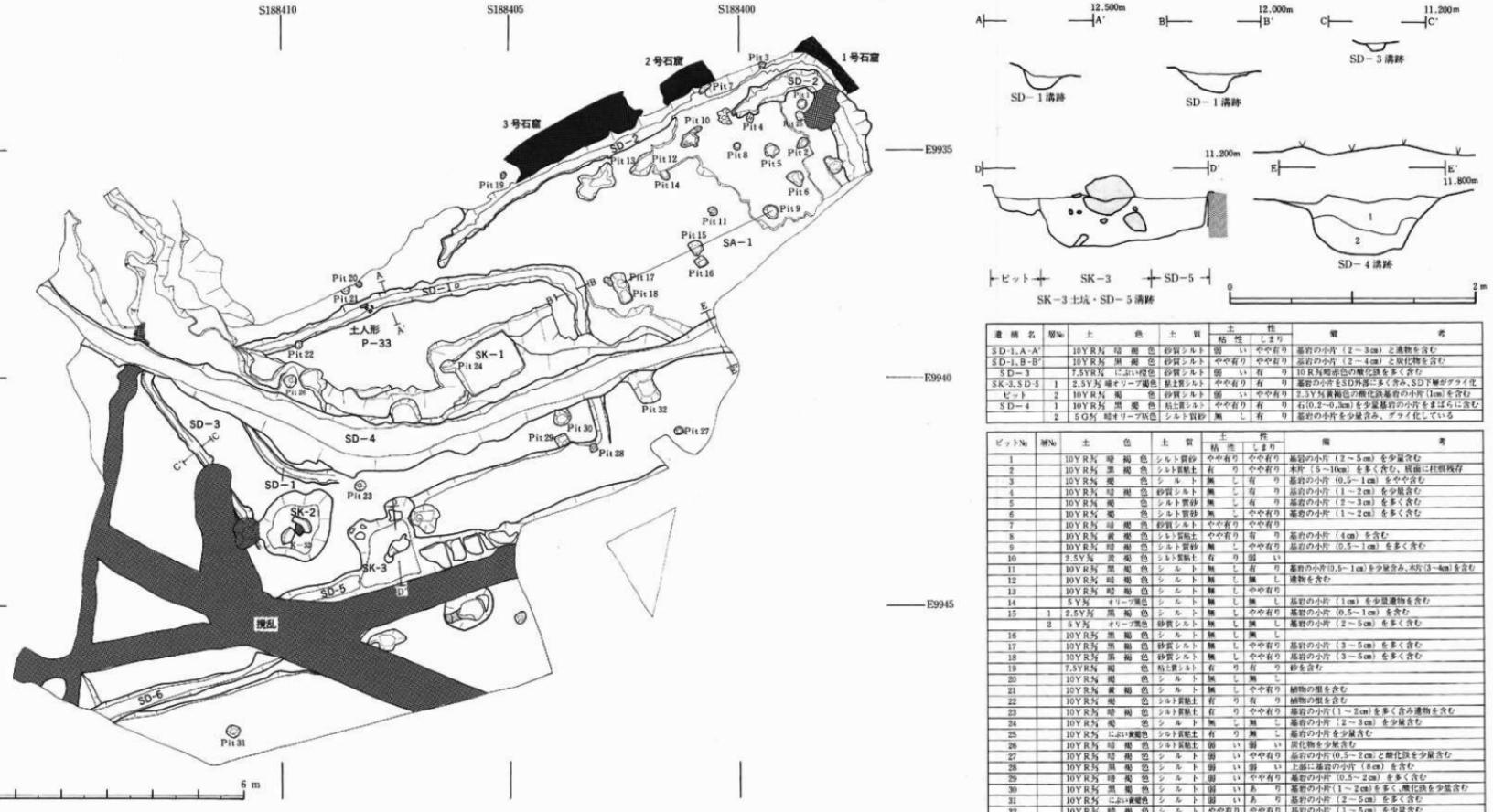
SK-1 土坑：SD-1溝跡の内側、凝灰岩岩盤上面で検出した。平面形は方形で、南西角にSA-1ピット列の延長線上にあたる直径30cmのピットNo24を伴う。一辺の長さは南北1.2×東西1.9m、深さは24~36cm、断面は方形を呈し、堆積土は暗褐色のグライ化した粘土で、板材を出土している。

SK-2 土坑：直径1.5mの擾乱土坑であるが、門前の「三界万靈塔」を固定する白石として、K-37(5号碑)、その根固め石としてK-18(8号碑)、K-32(10号碑)、底面には礎盤としてK-31(9号碑)の板碑がそれぞれ埋設されていた。

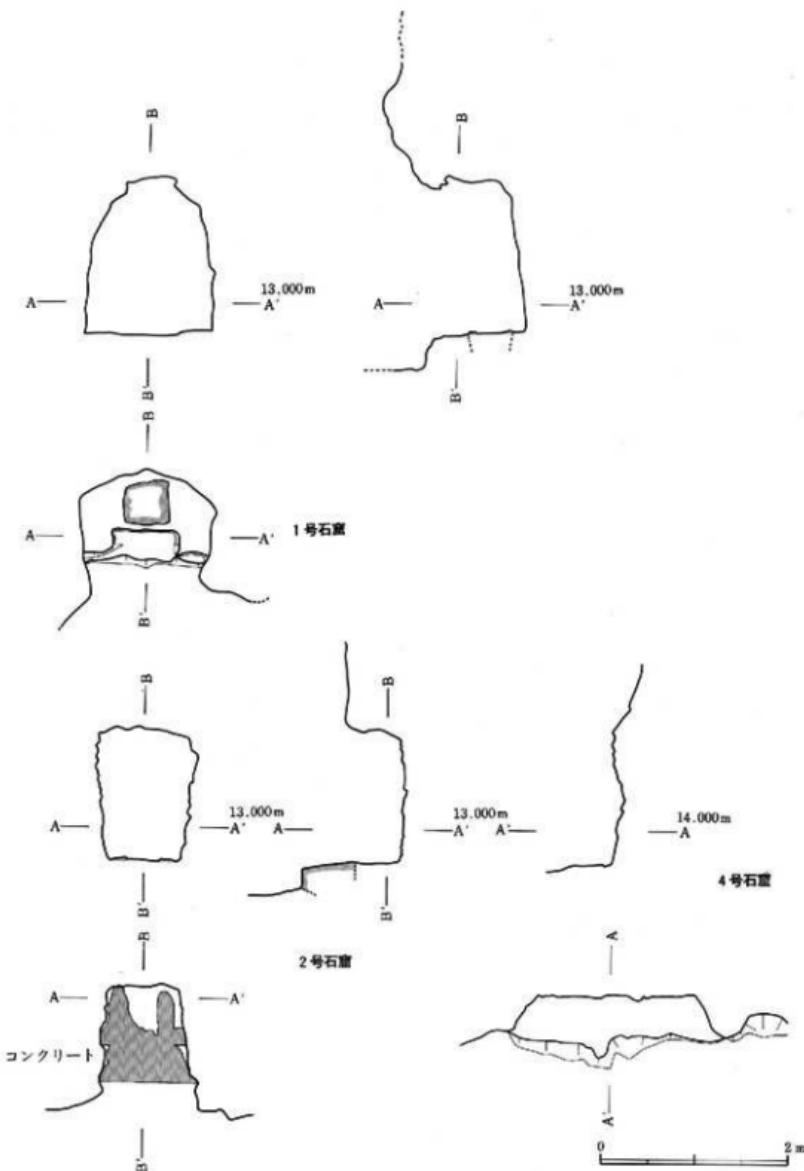
SK-3 土坑：SD-5溝跡と堆積土では分かちがたく、検出された土坑である。一辺が1.6~1.8mのほぼ方形の平面形で、深さは43cm程である。溝跡の堆積土が下層でグライ化しているのに比べ、基岩の小片を多く含む。出土遺物はない。

2 T

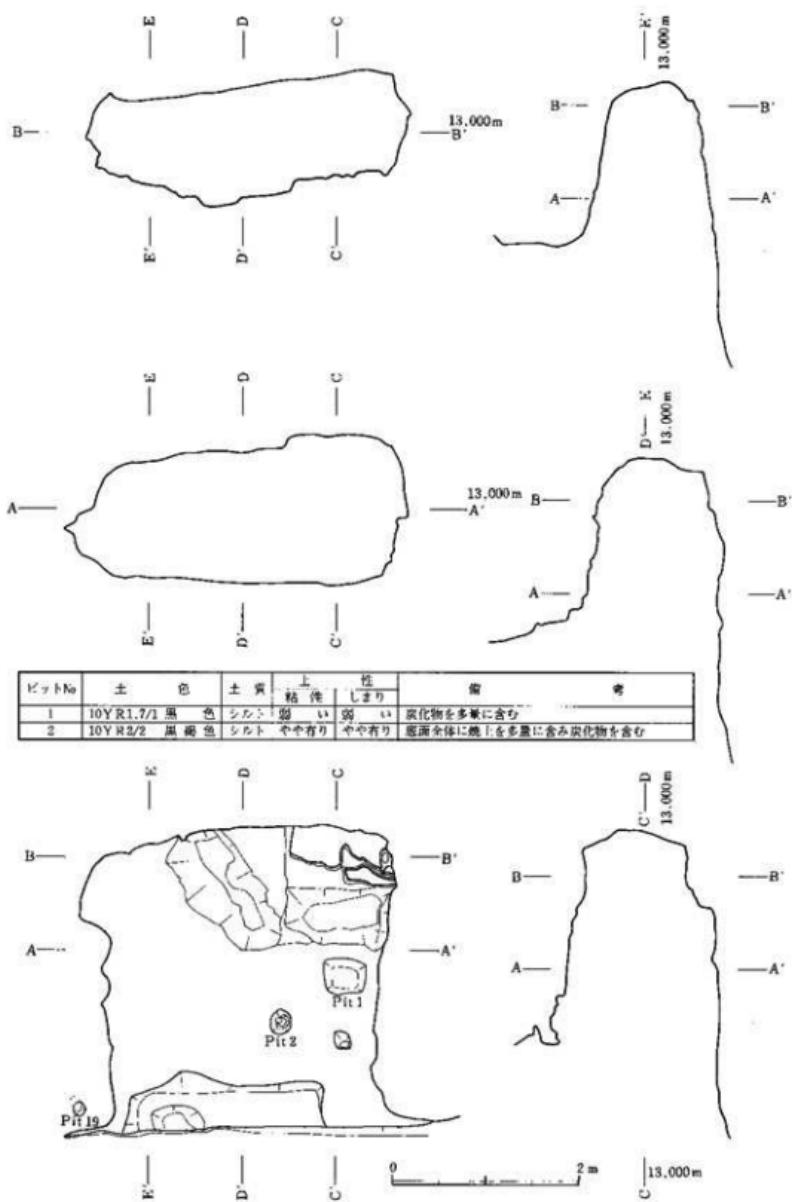
4号石窟から8号石窟の前面の参道部分である。浅い表土を剥がし、岩盤上面で遺構を検出した。



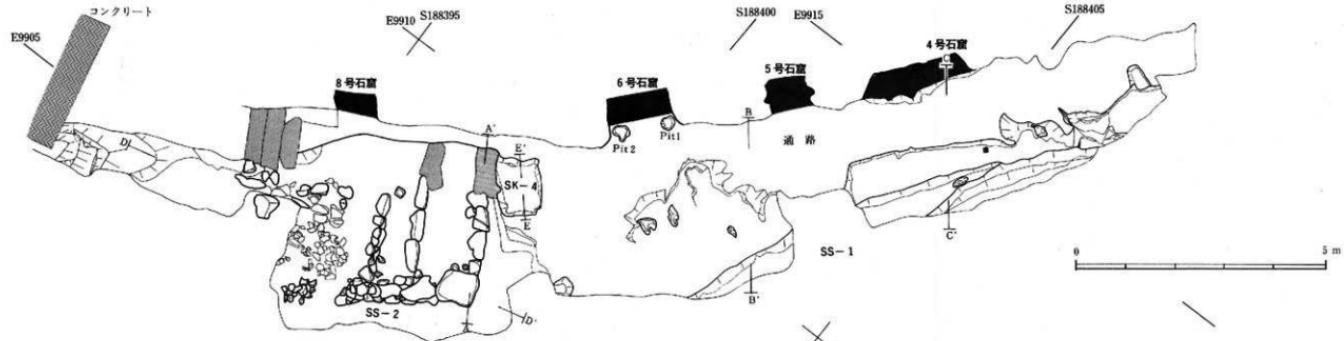
第4図 1T平面図・断面図



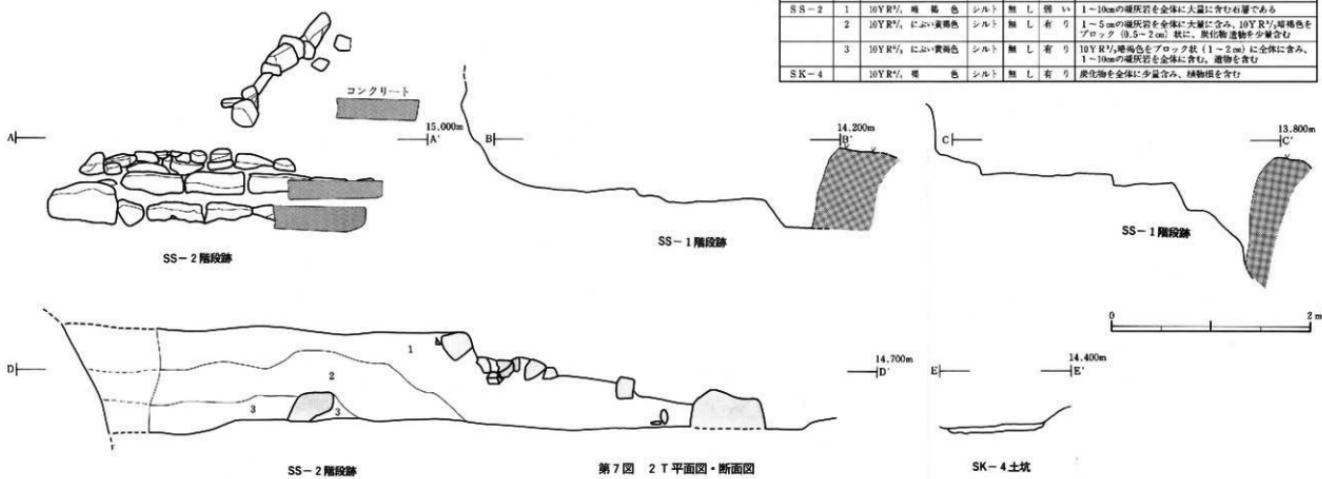
第5図 1・2・4号石室平面図・断面図



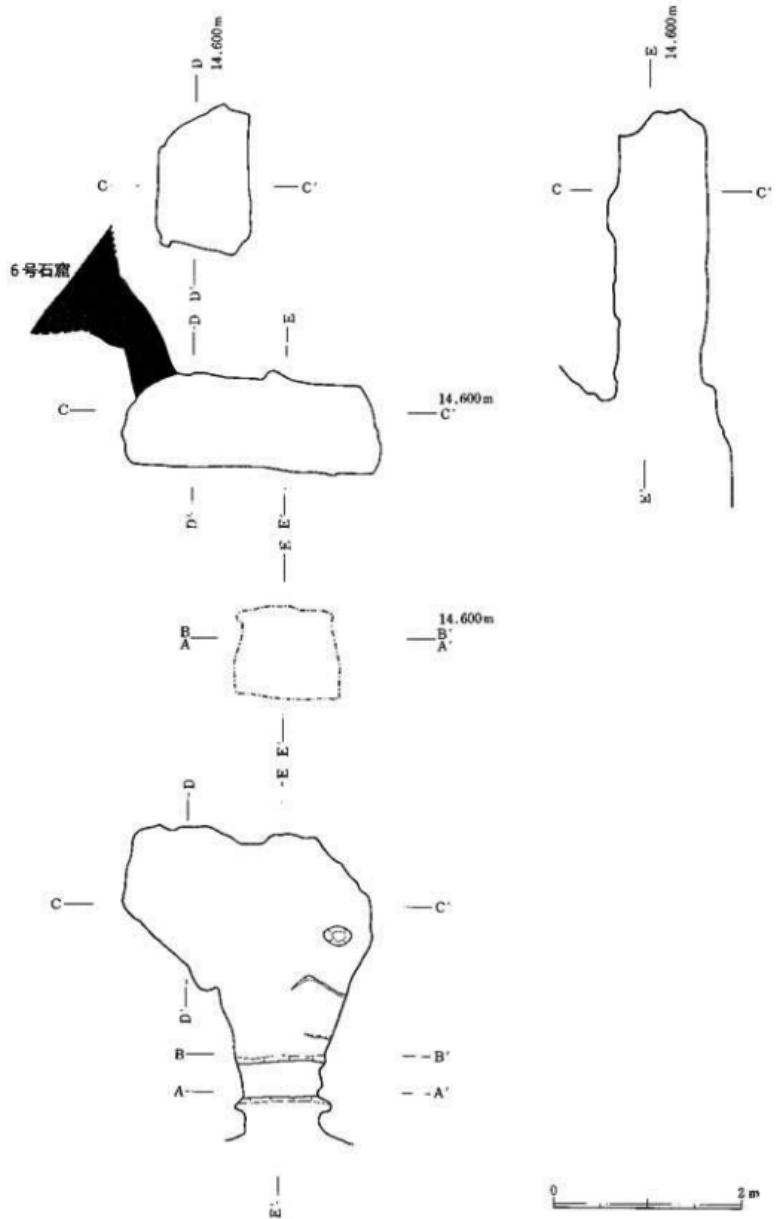
第6図 3号石室平面図・断面図



通称名	層No	土色	土質	土性 特徴
SS-2	1	10YR 5/1, 黄褐色	シルト	無し 有り 1-10mmの礫状岩を全体に大量に含む
	2	10YR 5/1, にふい黄褐色	シルト	無し 有り 1-5mmの礫状岩を全体に多く含み、10YR 5/1, 黄褐色をブロック (0.5-2.0m)。或に、無粒状・塊状を分離含む
	3	10YR 5/1, にふい黄褐色	シルト	無し 有り 10YR 5/1, 黄褐色をブロック状 (1-2m) に全体に含み、1-10mmの礫状岩を全体に含む。遺物を含む
SK-4		10YR 5/1, 黄褐色	シルト	無し 有り 地物を全体に少量含み、無粒状を含む



第7図 2 T 平面図・断面図



第8図 5号石窟平面図・断面図

4号石窟：5基の石窟でもっとも南に位置する石窟で、天井部や側壁は崩れて確認できなかったが、奥壁と床面の整形で石窟と認定した。平面形は台形で奥にすばまる。幅2.3m、奥行き0.6mを測る。通路部分と段差を有する。すでに床面も完全に露呈しており、出土遺物はない。

5号石窟：開口部が幅1.2m、高さ1.0mの方形を呈し、1.6m程の「玄門」状の通路を経て奥室に通ずる。通路の中程で5cmほど帯状に小高い部分がある。奥室の平面形は不整形を呈し、左側壁天井部から6号石窟とトンネルでつながっている。規模は2.2×1.7mで、天井高はほぼ0.9mと一定で、ノミ痕が壁面全体に残る。3号石窟と同様に浮浪者が生活していたとのことで、壁面に煮炊きによる煤が付着し、ゴミが散乱していた。出土遺物はない。防空壕として掘られた可能性が強い。

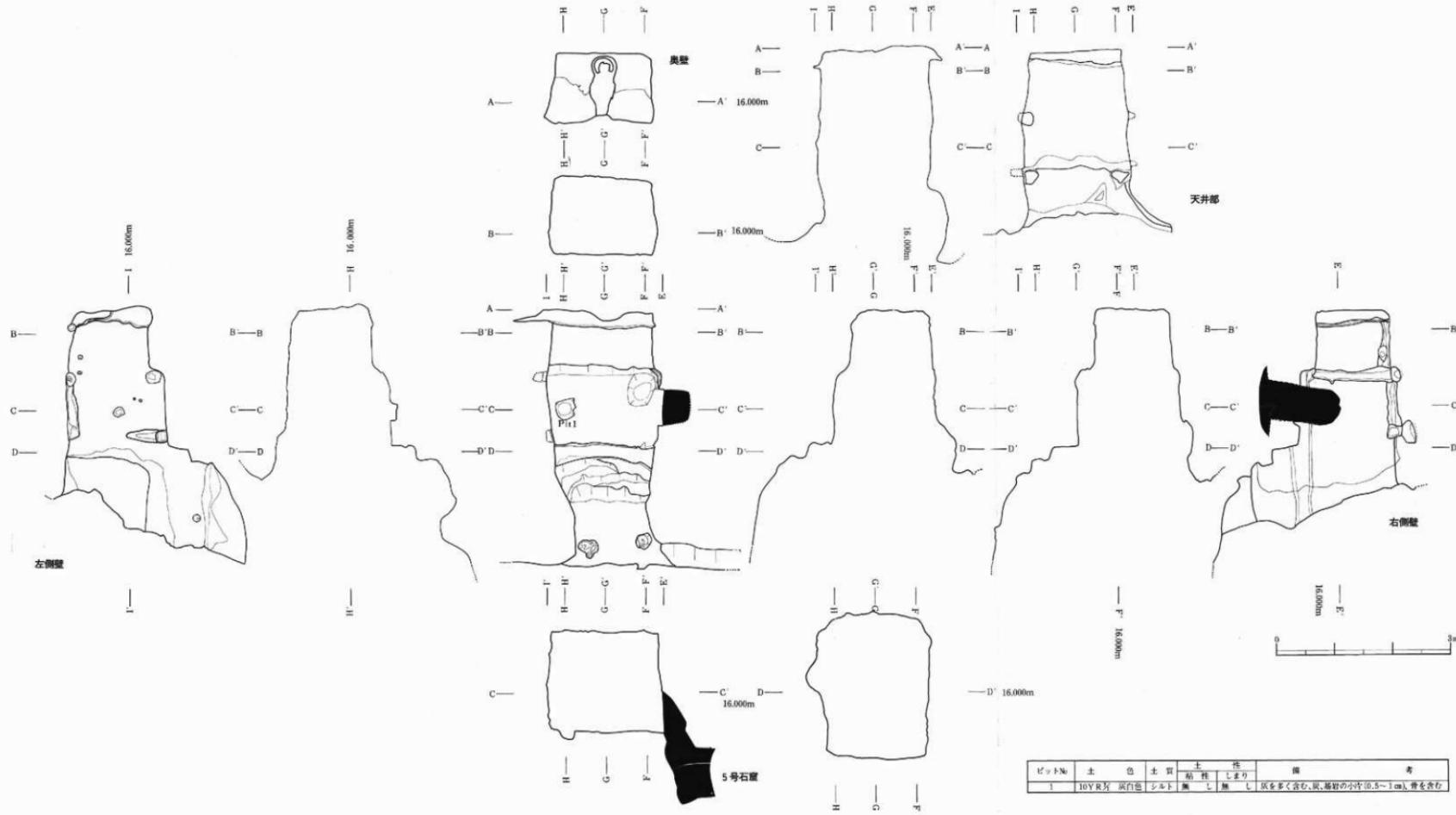
6号石窟：今回の調査対象となった石窟の中で最も良好な遺存状態の石窟で、奥壁に「あかぎれ地蔵」と呼称される彫像が半肉彫りされており、内部施設や削り出した段階を有する。開口部分手前には3段の階段が岩盤から削り出され、開口部には木組みの格子戸が組み込まれ、内部に賽銭箱が設置され、礼拝堂の体裁であった。

立体形は開口部で幅がいくぶん狭く、1.7~2.0m、奥壁で1.8mを測る。高さは奥室前面で1.7m、奥室奥半で1.3mとなり、20cmほどの段差をもつ奥行き65cmの「壇」を形成している。さらに奥壁手前には幅20cmの低い溝を有する。開口部と奥室段差の側壁部分には、築材を差し込むための一辺15~20cmほどの方形の穿孔や、柱をはめ込む溝が穿たれている。壁面は、奥壁は彫像以外の部分では平滑で、側壁・天井部にはノミ状の工具痕が残る。床面には2基のビットが認められ、ビットNo.1からは土師質の骨並破片(Ia-28)が出土している。石窟の外側にも2基の柱穴が確認され、崖面にかかる覆屋が存在したものであろう。右側壁基部からは、直径50~60cmの方形のトンネルで、1.2m程低い5号石窟へとつながっている。6号石窟も壁面に煤が付着し、側壁と天井部に数本の釘が打ち込まれていた。

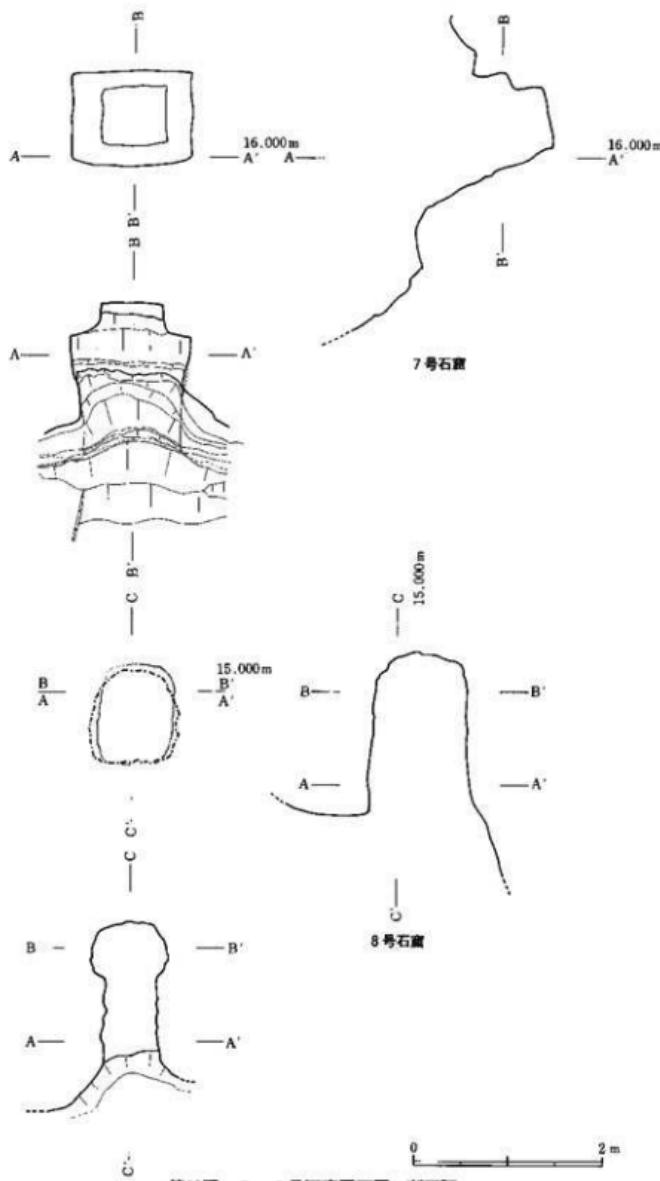
「地蔵菩薩坐像」：6号石窟の奥壁中央に認められる半肉彫りの仏像で、地元の信仰者から「あかぎれ地蔵」と呼称され、祭日は4月8日である。

顔面や体部などは表面が欠損しており、細部は不明であるが、円形の光背部分と輪郭だけは確認できた。全長は65cm、頭光は幅4~5cm、直径36~38cm程度で、輪郭から結跏趺坐し、膝前で定印を結ぶ「地蔵菩薩坐像」と推定されるが詳細は不明である。像の表面には灰白色の物質が付着しており、鎌倉に多くみられる「やぐら」に認められる「膝喰」の塗布の可能性も検討したが、クラックにも同様の物質がみられ、東北歴史資料館村山城氏のご教示もあって、凝灰岩基盤の石灰質物質が滲出したものと判断した。

調査前に写真測量による図化を実施し、1/2縮尺の2cm等高線入り実測図を作成している



第9図 6号石室平面図・断面図



第10図 7・8号石窟平面図・断面図

(付図1)。さらに、調査後の協議の結果、奥壁部分を切り取り、東光寺門前の新設の覆い屋に移設し、薬品による保存処理を行っている(付図3参照)。

7号石窟: 崖面中腹に2段に彫り込まれた方形の龕である。通路部分より約1.5m程高く、幅1.3m、高さ1.0mで50cmほど1段目が彫り込まれ、2段面はその中央に幅0.7m、高さ0.6mで40cmほど彫り込まれている。奥壁・側壁とも平滑で、彫像などが彫られた痕跡は認められない。出土遺物はない。

8号石窟: 2Tで最も奥に位置する石窟で、幅60cm、高さ1.0mで開口部はドーム形を呈し、最奥部でいくぶん膨らむ。奥行きは1.7m程で、床面は平坦である。出土遺物はない。

SS-1階段: 4号石窟から6号石窟の前面で、通路を挟んで2段分の検出をした。岩盤を削り出した石段である。検出された幅は4.5m、下段の段差は30cm、上段は15cmで平坦面は20~40cm程である。南西県道幅は削平されていて不明であるが、石窟の前で検出された階段の存在から、旧来の参詣道は石窟とともに県道の新設などにより削平され、今市橋から七北田川へ続く道から、4号石窟の前に直接階段で上っていた可能性も考えられる。

SS-2石段: 7号石窟から8号石窟の前面で、通路を挟んで4段分を検出した。凝灰岩を方形に切り出して積み上げ、間際に土砂や岩屑を充填している。検出された幅は最大3.9m、段差5~50cmで、平坦面は1段目が最大で25~50cm程である。4段目は積み石が崩れて不明瞭である。4段目から上部には階段に直交する方向に切石が1.2mほど上方に広がる。1段目の隅石には80×60cm大の切石を置いている。検出面から若干の陶磁器と鉄製品を出土している。

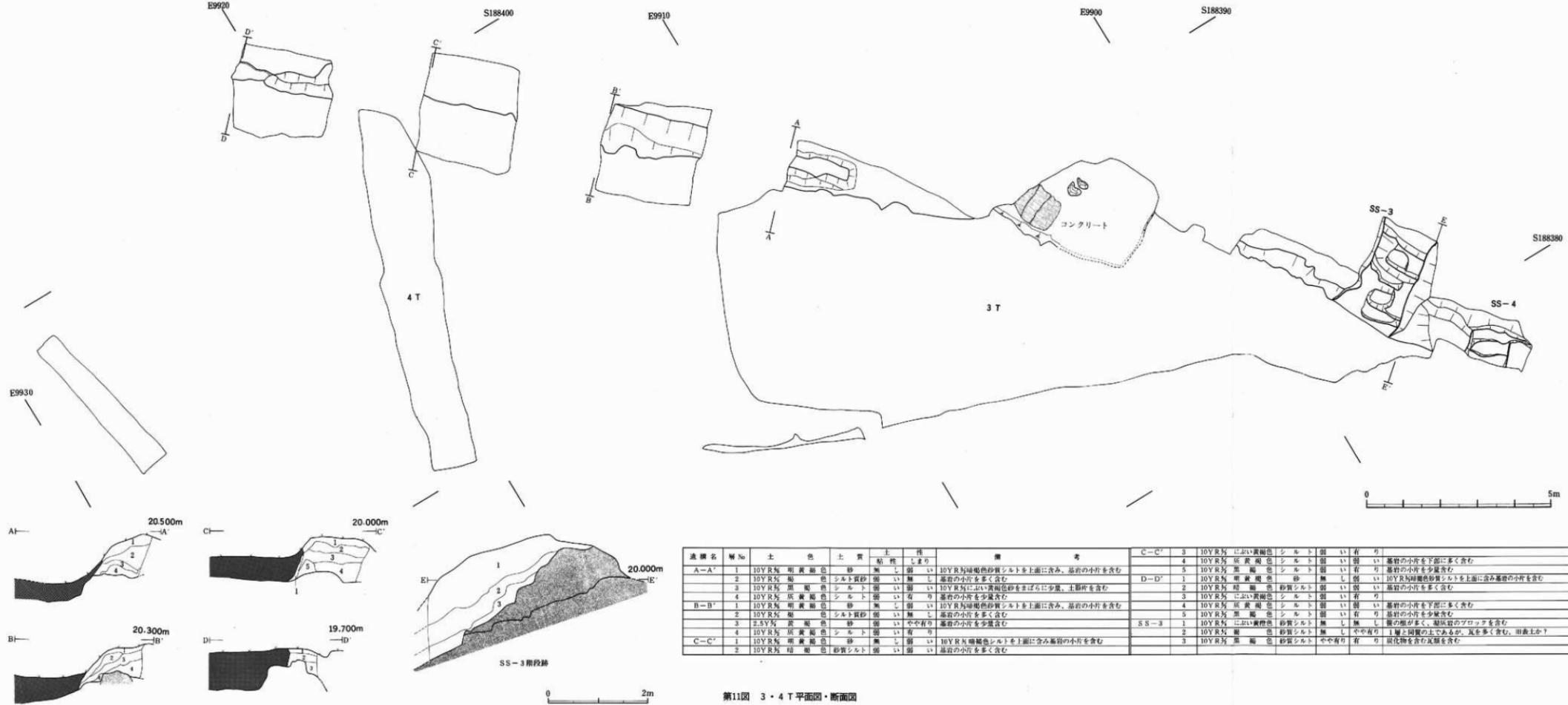
SK-4土坑: SS-2石段の基部で検出した土坑で、一辺が1.4~1.7mの方形で、深さは10cmと浅い。出土遺物はない。

この他、6号石窟前面の平場の表土を除去している際、SK-4土壙脇で横臥したほぼ完全な人骨一体分を出土した。

あまりにも、浅くかつ埋葬の遺構プランも確認できなかったために、宮城県警察に連絡、鑑識課の鑑定を経て、寺内に埋葬した。

3T・4T

調査に先行して地形の現況測量が行なわれ、馬蹄形をなす尾根の西側先端部の縁部を巡る土壘状の高まりを同化した後、発掘によって確認することから着手した。その結果、もっとも注目された崖上部の平場のはほとんどが70年代後半の東光寺幼稚園の園庭・車道造成工事によって削平されていることが確認された。また、土壘状の高まりもその際に押し出された土砂であることが判明した。崖際の部分を除いては、遺構の検出は出来なかったが、崖面、及び崖下部の表土中からは今回の調査で出土した大量の瓦の大半と、若干の中世陶器を出土した。これらは、



廃棄されたものとみられ、軒瓦や鬼瓦など各種の瓦がある。

西側崖際の部分で、岩盤を削って造り出した階段状の遺構を 2 基検出した。

SS-3 階段状遺構：角の崩れた 5 段ほどの階段状の遺構を検出したが、崖の途中で途切れ、性格は不明である。幅は 1.2~1.8m ほどで、1 段ごとの段差は異なる。両側よりも低く削り出されている。覆土からは、大量の瓦を出土したが、足場を組んで下方に土砂を崩しながらの調査であったため、層位は不明である。全て 3 T 出土の遺物として扱っている。

SS-4 階段状遺構：SS-3 階段状遺構の西側 2 m で検出した 3 段の階段状の遺構で、幅 1 m、段の奥行き 10~20cm で、両側からはいくぶん低く削り出されている。

5 T

E9932

辛うじて削平を免れた崖先端部からは、凝灰岩の岩盤を削って造り出した豊穴遺構、階段、礎石、「井戸」状遺構、柱穴などを検出した。遺構に伴う出土ではないが、崖際と崖面の覆土からは瓦類を出土している。

豊穴遺構・井戸状遺構・礎石：

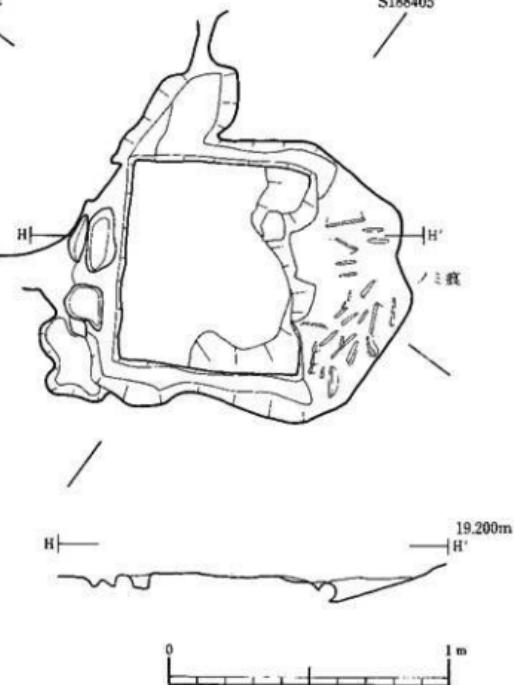
崖先端部からは東西5m、南北7.5mの方形で、1.2~1.4m程の深さに凝灰岩の岩盤を削って造り出したSI-1豊穴遺構を検出した。遺構の堆積土は、最下層のⅢ層を除き、上層に人頭大以上の大きさの岩盤ブロックを大量に含み、幼稚園の造成工事の際に重機で埋め戻されたものと思われる。

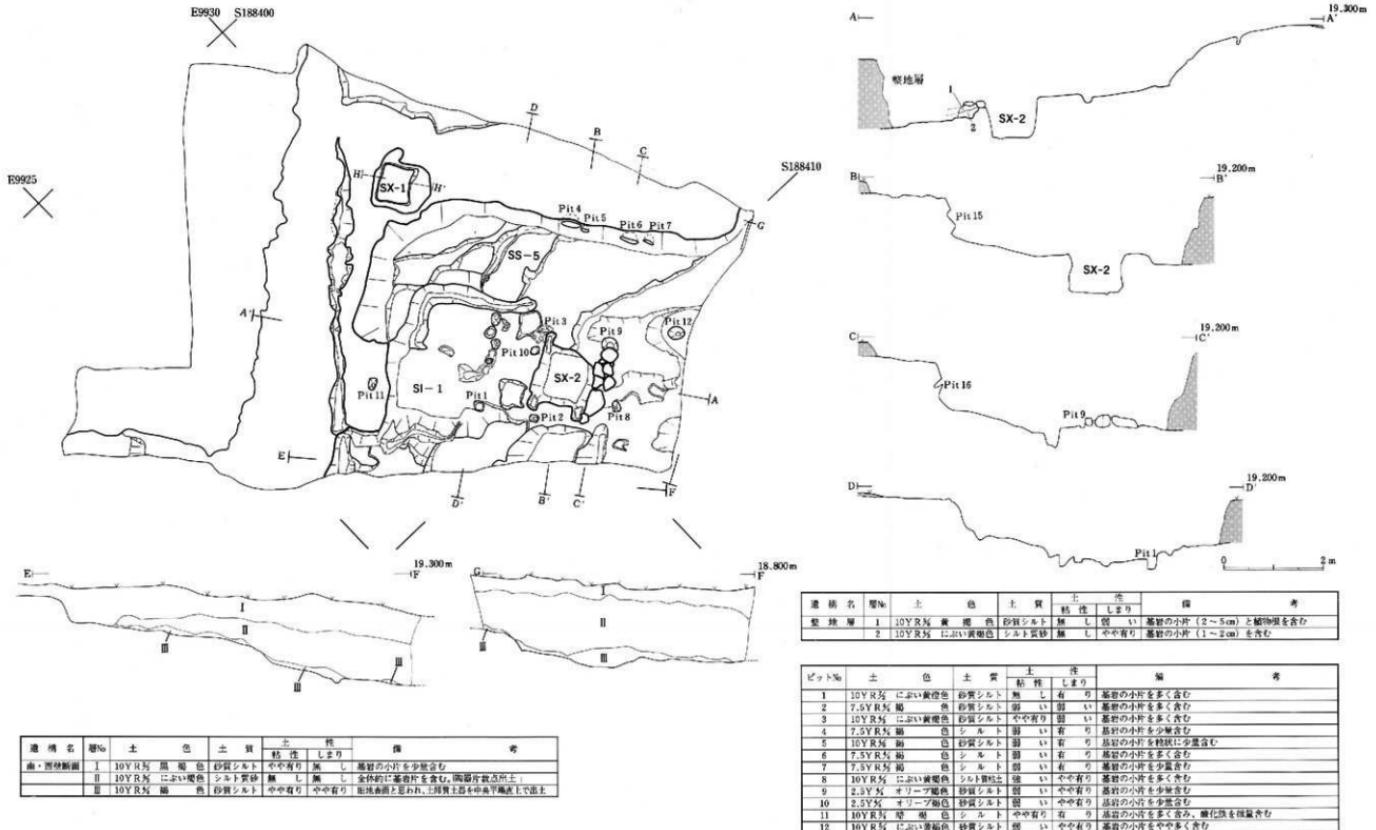
この中央には、岩盤を削り貰いた一辺が約1.1m、深さ90cmのSX-2「井戸」状遺構が位置し、四隅

には枠材を組み込むとみられる一辺が20~25cmの方形の「削り貰き」3基と、基岩の凝灰岩を切り出して整形した粗石による同様の「据え方」がみられた。SX-2の堆積土は岩盤ブロックを大量に含み、山土遺物はない。この周囲には直径15cm程の柱穴6基と、三方に雨落ち溝とみられる溝状の窪みが確認され、この遺構の覆屋となる掘立柱建物跡の存在が推定できた。SX-2前面は黄褐色系の砂質土で整地され、平坦面を形成している。

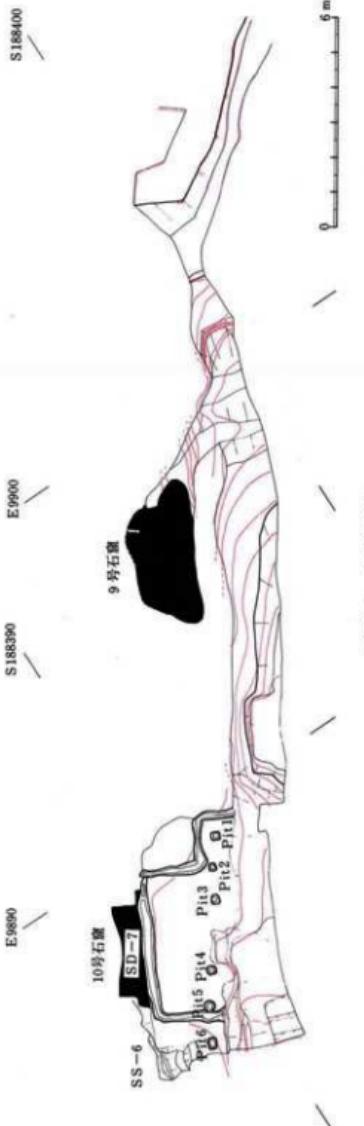
SX-2東側には、岩盤を削り出して緩やかに外傾する、幅1.6m程の4段からなるSS-5石段があり、この上部には、一辺70×60cmの方形のSX-1「礎石」状遺構が削り出されていた。この中央部分には、一辺が20cm程の方形の擦痕があって、建物跡の礎石となる可能性もあるが、対をなす遺構を検出しておらず、板碑や右塔など単独の石造物の礎石とみなしたい。SI-1豊穴遺構の堆積土には、瓦片と常滑産陶器、摩耗した県内産中世陶器が含まれていた。

本来は、現在の崖面よりももっと豊穴遺構の平坦部が張り出していたものとみられるが、1





第12図 5 T 平面図・断面図



第14図 6 T 平面図

T崖下の石窟の底の張り出し具合などからみても、崖面の崩落や、後世の削平によって後退したものであろう。

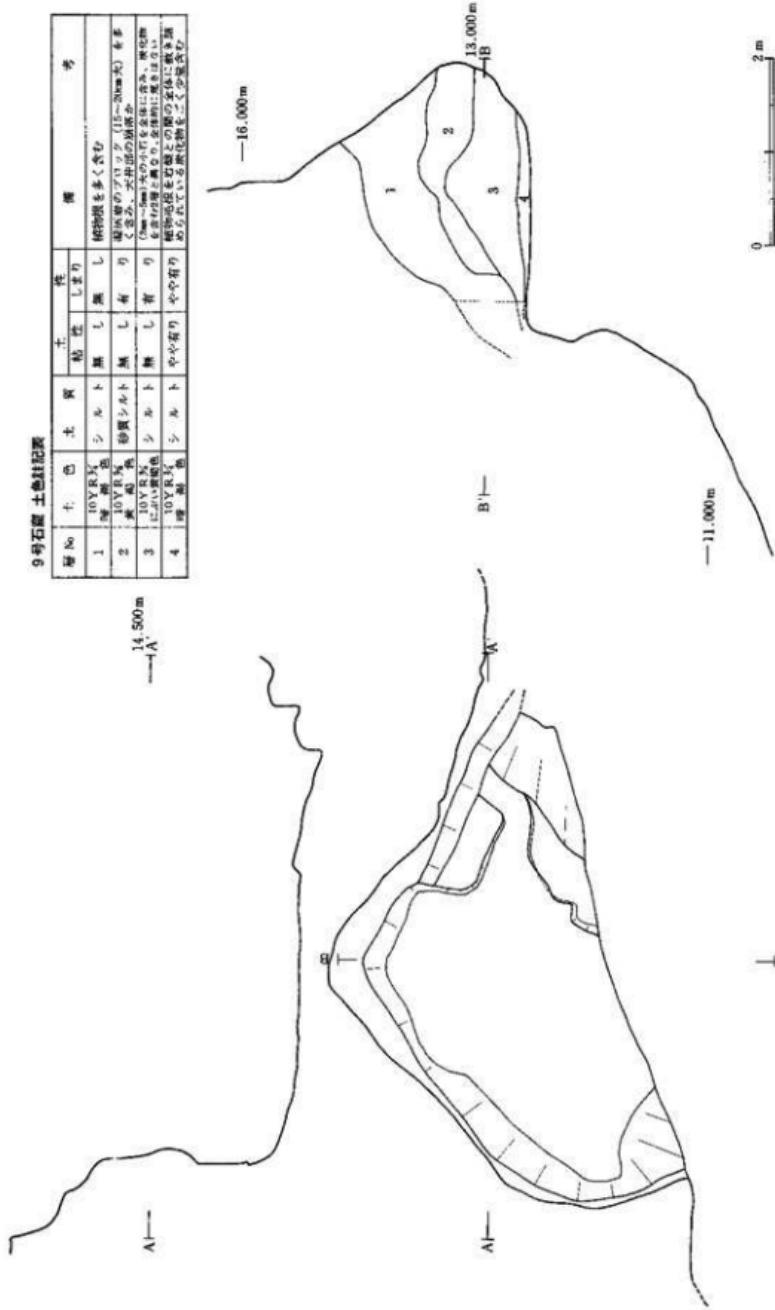
6 T

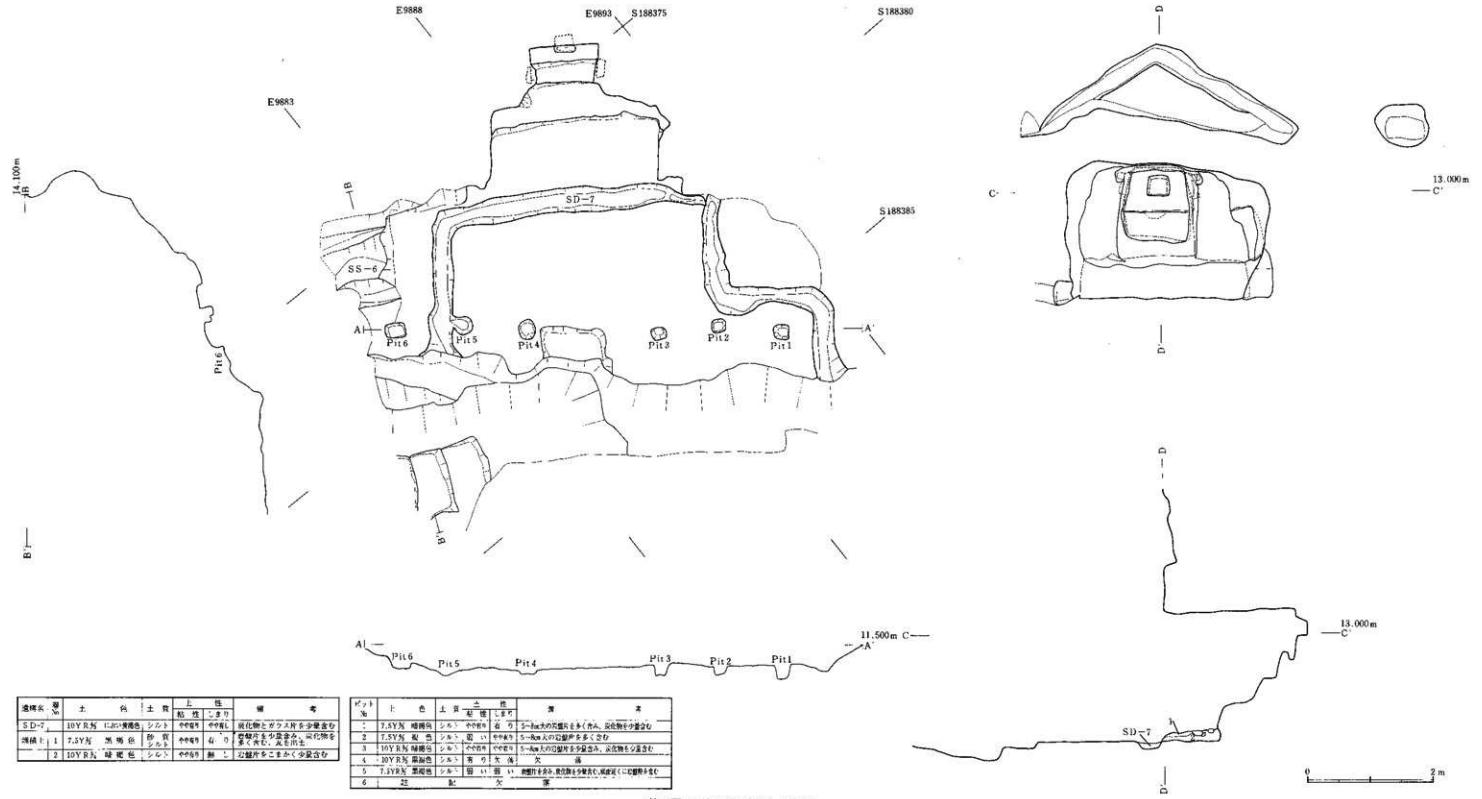
出土した瓦は、その大半が崖の縁辺部から出土しており、資料収集のため崖面と西側基部平場の調査を実施した。足場を組んで精査を行い、斜面の覆土を除去したところ、天井の崩落した9号石窟を新たに検出した。

9号石窟：2Tの排土捨て場としていた崖の斜面で検出された。天井部が崩落し底面の平坦な石窟で、幅は5.0m、奥行き2.3~2.8mを測る。高さは残存する壁の状況から2.6m程度とみられ、かなり大規模な石窟である。覆土には多くの瓦を含んでいた。石窟の前面部と上り口がなく、急激に水路へ落ち込むことから、水路開削の工事などで削平されたものであろう。

10号石窟：3Tよりもさらに七北田川上流側に位置し、崖面に開口していた石窟である。凝灰岩の壁面を2段に掘り窪め、奥壁上部にはさらに窓を設けているが、祭壇として最近設けたという地権者の話もあり、年代的な決め手を欠く。開口部は幅2.7m、高さ2.0mを測り、1mほど奥まった部分で30cmほど1段高まり、20~50cmの幅で段を呈する。その奥壁にはさらに幅70cm、高さ110cm、2段の窓が掘り込まれた。

第15図 9号石壁平面図・断面図





第16図 10号石室平面図・断面図

れている。石窟上部の壁面に穿たれた屋根形の掘り込みは、底辺4.4m、高さ1.5mの二等辺三角形を呈し、20~30cmの太さの柱材が組み込まれていたことが推定できる。また、石窟の開口部直前の平坦部には、鐘形に巡るSD-7溝が巡る。上幅20~50cmで断面形は舟底形を呈し、瓦を出土している。直径20~30cmの円形のピットが石窟の中央線から左右対称に3基ずつ、一列に並び、「覆堂」の存在が推定される。このピット列から前方には、幅1mの階段が西に向かって下っていく。さらに石窟の左手崖面には、SS-6階段状遺構が上方へ続いており、通路であったものであろう。(付図2)

7 T

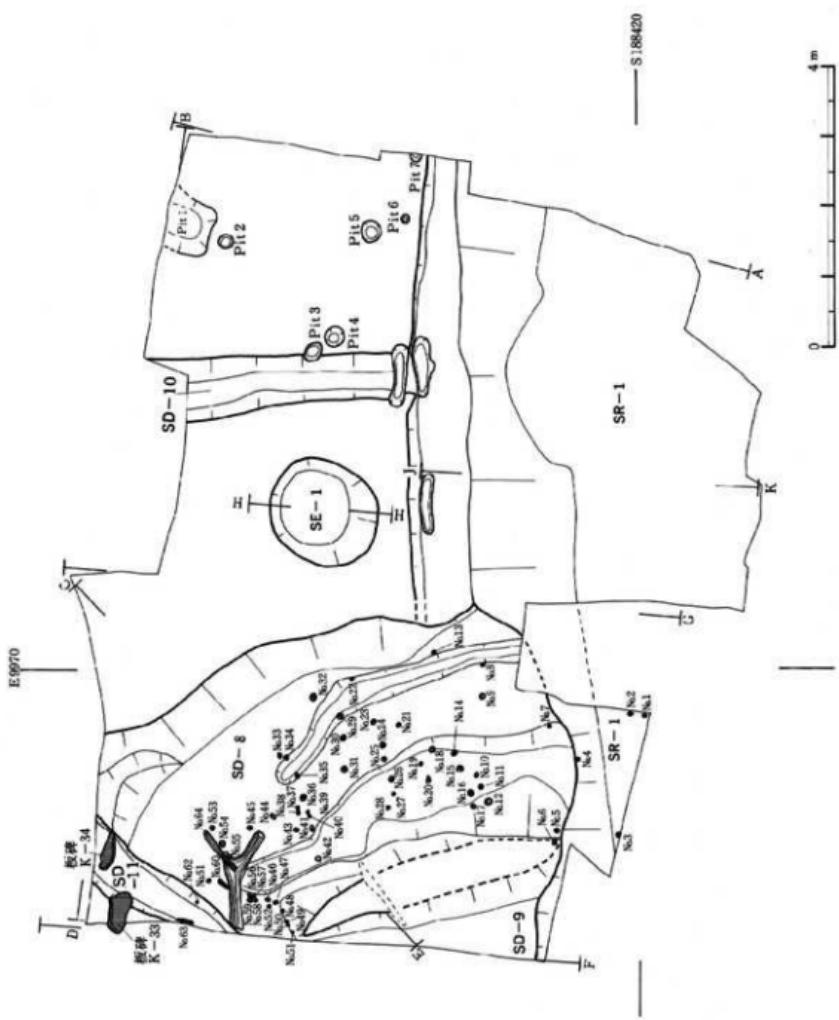
1987年4月、第2次調査を再開し、門前東側の調査を行ない、七北田川に並流する河川跡と東光寺から流れこむ溝跡を検出した。溝跡からは橋脚の痕跡・柵、河川跡からは「洗い場」跡・杭列を検出し、堆積土から大量の焼土とともに陶磁器や板碑などを出土した。さらに60cm程の厚さの整地層(II層)の下から井戸・溝・ピットなどの遺構をIIIa~d層の上面で検出した。また、壁面のみの観察ではあるが、火山灰を均質に含むVb層の存在も確認しており、この火山灰が近隣の遺跡で発見されている平安時代に降下したものだとすれば、古代の遺構の存在も濃厚である。

SR-1河川跡: 狹少な調査区のため規模は不明であるが、近年の1mの盛り土(I層)の下のII層上面で上幅5m以上、長さ13m分を検出した。深さは調査を行った最深部で約2.5mであったが、まだ底面は下がるものとみられたが、漏水のために調査区壁の崩落の恐れがあり、中途で完掘を断念した。3層上面では、断面図ポイントK~Jラインで、直径5~10cmの木杭が40~50cm間隔で8本ほど打ち込まれている。また、断面図ポイントJ付近には、凝灰岩の切石組みが設置され、「洗い場」(実測図:略)であったものと推定できた。出土遺物は、大量の焼土や炭化物を含む3~4層に集中し、焼け焦げのある陶磁器や木製品が多くみられる。

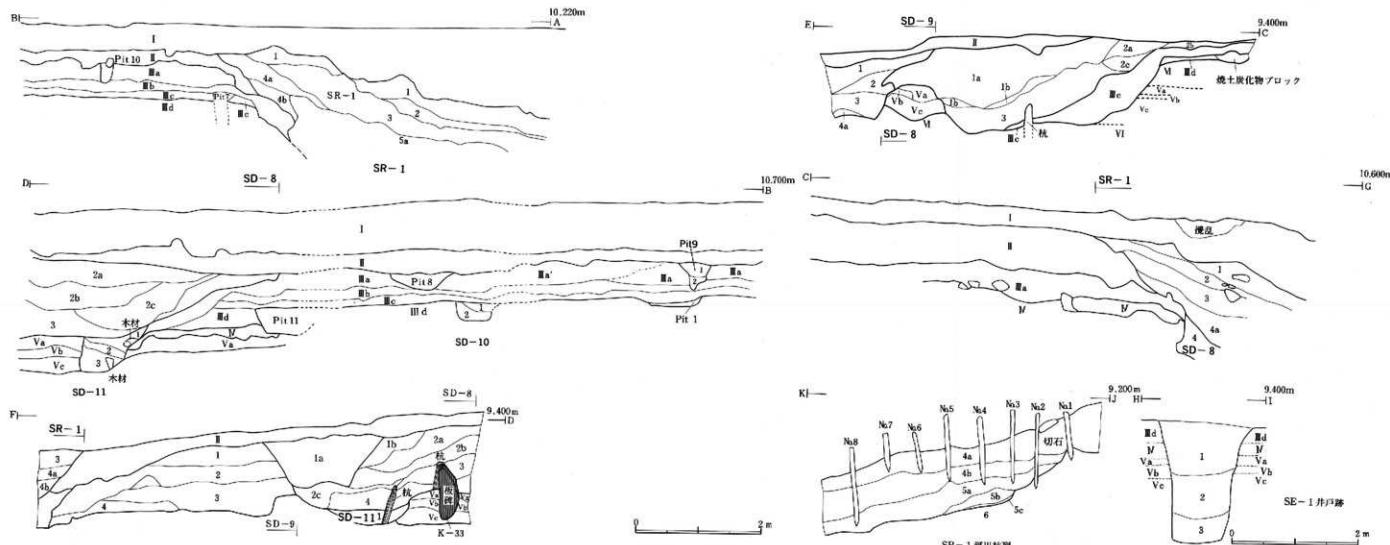
SD-8溝跡: 東光寺方向から七北田川方向に流れ出してくる溝で、SR-1河川跡に切られる。上幅は3.6m、深さは1.4m程度で、断面形は舟底形を呈する。大量に打ち込まれた木杭がみられ(No.1~64)、橋脚と柵とみられる5列の杭列が入り交じって検出された。出土遺物は、2~4層にわたっており、板碑4基(K-33~36 付図1 参照)が2層中から出土している。

SD-9溝跡: 東光寺方向から七北田川方向に流れ出してくる溝で、SR-1河川跡に切られる。SD-8溝跡との切り合いは、調査区壁際で明瞭でなく、不明である。上幅は1.3m以上、深さは1.3m程度で、断面形は逆台形を呈する。少量の出土遺物がある。

SE-1井戸跡: SR-1河川跡とSD-8溝跡に挟まれた調査区東半部のIII d層上面で検出した素掘りの井戸で、直径は1.4~1.5m、平面形はほぼ円形で、深さ1.9mを測る。堆積土2



第17回 7T平面圖



第18図 7 T 断面図

基本原題	主	土	言	性	種	
					類	名
I 10YR 4M 地上 青緑色	暗	灰白	無	無	褐色	褐色(5cm以上)をもつ地質
II 10YR 4M 暗色	土	土	無	有	褐色	褐色をもつ地質(5cm以上)
III 10YR 4M 褐色	沙	沙	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
IV 10YR 4M 黄褐色	沙	沙	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
V 10YR 4M 黄褐色	沙	沙	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
VI 10YR 4M 黄褐色	沙	沙	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
VI' 10YR 4M 黄褐色	沙	沙	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
VII 10YR 4M 黄褐色	沙	沙	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
VIII 10YR 4M 黄褐色	沙	沙	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
IX 7.5YR 4M 黄褐色	土	土	中等	中等	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
X 7.5YR 4M オリーブ色	土	土	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
XI 2.5YR 4M 灰色	土	土	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
XII 10YR 4M 茶色	山灰	山灰	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
XIII 5YR 4M 墓場色	土	土	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
XIV 10YR 4M 黄褐色	沙	沙	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)
XV 10YR 4M 黄褐色	沙	沙	無	無	褐色	褐色をもつ地質(S-1の範囲)

SD - 9		SD - 10		SD - 11	
題番	上 色	下 色	主 色	副 色	補 色
1	DYK 黄 橙	(D)	加 灰	中性灰	一トーン(150%灰)を含む。
2					二トーン(濃淡の差がある)で、150%灰(20%)を含む。
3	SGN 鮮紅 桃	砂	中性灰	有 灰	SG-D-9と同様に2トーン(20%)を含む。
4	TSV 鮮綠 深绿	土	有 灰	無	濃度(150%)と明度(10%)を含む。
5	TSV 鮮綠 深绿	土	有 灰	無	濃度(150%)と明度(10%)を含む。

層から、焼け焦げた板磚K-30を出土している。

SD-10溝跡：S E-1井戸跡の0.8m東側で検出した南北方向の溝跡で、上幅60~80cm、深さ40cm、断面形は逆台形を呈する。3.8m分を検出した。出土遺物はない。

この他、6基のピットを検出したが、柱穴となるものはない。

2. 出土遺物

調査で出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、陶器、瓦器、土師質土器、石製品、木製品、金属製品、土製品、自然遺物がある。

遺物は、1T・2Tでは若干の陶磁器、金属製品、土師質土器がある。3T・4Tでは平坦面では全く出土せず、平場の縁辺部から崖面にかけての覆土から、遺物収納コンテナ23箱分の大量の瓦と少量の土師質土器、中世陶器を出土している。6Tでは、9・10号石窟の覆土から瓦と土師質土器を出土している。7Tでは、SR-1河川跡とSD-8溝跡から遺物収納コンテナ50箱分の陶磁器、石製品、木製品、金属製品、土製品、自然遺物を出土している。

ここでは、大量に出土した瓦、陶磁器について記す。

1) 瓦

小型の軒丸瓦は、瓦当文様は左巻きの三つ巴文で、全体に細身で尾尻が長く、接続して圓線状を呈する。瓦当面は直径90mm前後で全長は253mm（1点のみ）、瓦当面は厚く25~30mmで、周縁帶は8~12mmで、範は深い。丸瓦部と瓦当部との接合部分は指でしっかりとナデつけられている。胎土は緻密である。F-8・9の2点は瓦当面が40~42mmと特に厚く、瓦当内面が大きく抉れられている。玉縁長は43mmで、玉縁部に釘穴を有する。筒部の反りが強く、製作技法などの特徴は、丸瓦と同様である。12点出土している。

大型の軒丸瓦は7点出土しており、中房の三ツ巴文は左巻き6点と右巻き1点があり、巴は小型のものよりはやや太めではあるが、全体に細身で尾尻が長く、圓線状を呈する。外区を構成する珠文帯は30個（推定）の珠文で形成され、瓦当面の直径は125mm、瓦当の厚さ20~35mm、周縁帶の幅12~18mmを測り、全長は343mm（1点のみ）、玉縁長は56mm程である。釘穴がある。

丸瓦にも大小2種あり、ともに玉縁の有無で2タイプある。製作技法は同じで、凸面はナデ整形によって繩叩き目をほとんど磨り消しているが、わずかに筒部先端に残存する。凹面には細い布目痕をそのまま残し、2列の「離れ繩」（吊り紐）の強い圧痕が付いている。側縁部は深く内削ぎされ、ナデ調整され、特に先端部は70mm程度も深く内削ぎされている。凹面に粘土板切り痕（コビキ痕）が残るものがあり、粘土板一枚造りとみなされる。釘穴がある。玉縁と丸瓦との接合部に「○」の圧痕が付いた丸瓦が1点ある。

小型の丸瓦は、全長230~244mm、幅104~108mm、高さ46~55mm、玉縁長36~44mm、厚さ4~6.5mmを測る。出土数が大型に比べ少ない。

大型の丸瓦は、全長315~343mm（行基瓦1点は小振りで310mm）、幅128~135mm（行基瓦は124mm）、高さ52~73mm、厚さ8~14mm（行基瓦は8mm）を測る。

軒半瓦には、完形の瓦はなく、小型のものは8点出土している。瓦当文様は蓮華唐草文で、瓦当面中央に蓮華文を配し、蕨手文が4個ずつ左右対称に配置される。段頭で15mm程の厚さである。瓦当面の上弦幅173~175mm、下弦幅180~185mm、厚さ15~24mmを測る。

大型のものは8点出土している。小型の蓮華文と比して菊花状にみえる唐草文で、界線は設けられず、外区・脇区に34個（推定）の珠文を配す。内区の唐草文は、小型のそれと比して巻き方が単調である。段頭で20~30mm程の厚さである。上弦幅259mm（推定）、下弦幅269mm（推定）、厚さ27.5~34mmを測る。

平瓦には、完形となる瓦が大小各1点ずつある。凸面に斜格子目の叩き痕を残し、一枚造りである。四辺に「バリ」を残しており、離れ砂が凸面に付着し、整形台を使用している。凹面は布面を擦り消し、四辺を内削ぎし、ナデ調整を施す。特に狭端部の調整幅が広い。凹面部に斜格子目状叩き日の圧痕が残るものがあり、乾燥時における積み重ねの結果と理解できる。叩き日整形具の幅は4cm程である。

小型の平瓦は、広端部幅16.75×狭端部15.75×長さ19.3×厚さ1.8cmを測る。

大型の平瓦は、同様に26.0×23.2×25.7×2.1cmを測る。

また、『奥州名所図鑑』には、東光寺と同種の「斜格子」叩き目の圧痕のついた「松島寺」の「径1尺2寸」の平瓦が掲載されている。

鬼瓦は、突出した丸い眼で、鼻孔を前に大きく開いた獅子鼻で、隆起した眉で、角や瘤、顎には牙を表現する突起をもち、顔面には刺突・条線痕が全面に施されている。板状の周縁部には珠文が刺突して巡らしてあるものと無文のものとがある。眉間に釘穴をもつ。全貌が解る資料は3点で、他に部分破片が25点あり、形状から鬼瓦の個対数は3タイプ、8個体以上と推定される。

出土瓦の年代観については、上原真人氏に多くのご教示を頂いたが、小型の巴文軒丸瓦は、12世紀後半の京都出土例が初見であり、東光寺出土瓦は、筒部凹面の有目が細かい点、～状の縄圧痕を明瞭に残す点など京大構内（13世紀前半）、大覺寺・慈光寺（13世紀後半）の出土例にみえるように、13世紀以降の特徴を有するが、瓦当が厚手な点は15・16世紀までは降らない特徴である。平瓦凸面の斜格子目状叩きについては、京都三十三間堂では、永享年間（15世紀前半）まで降らないし、鎌倉鶴岡八幡宮では、14世紀前半～15世紀前半に初めて出現し、15世紀中頃～16世紀初頭にかけて主体をなす。

巴が全体に細身で尾尻が長く、圓線状を呈する軒丸瓦、瓦当面中央に蓮華文を配し、蕨手文が4個づつ左右対称に配置される軒平瓦、「般若」の形相とは異なる「鬼面」の鬼瓦なども上記の年代観を支持する。

遺構外の出土で、共伴資料による年代観に乏しいが、出土している常滑窯・県内産陶器の年代観からも、14世紀代の瓦とみなしたい。

2) 陶磁器

そのほとんどが、7T・SR-1河川跡の2層～5層、SD-8溝跡の2層～5層からの出土である。

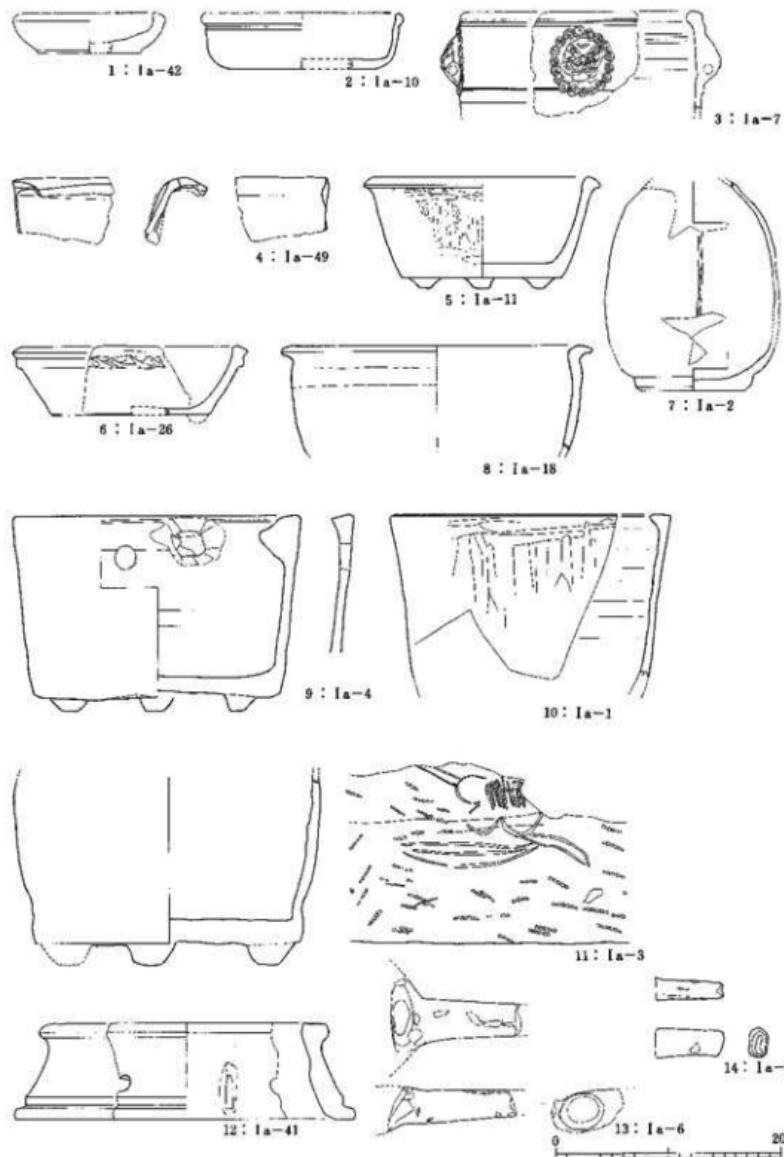
SD-1河川跡の2層から5層の陶磁器には、江戸時代後期（18世紀後半～19世紀中頃）から幕末から明治前期（19世紀後半以降）の特徴をもつ肥前磁器や堺や相馬など地方窯产品がみられ、江戸時代後半以降の堆積と考えられる。この層位からの遺物は、炎熱を受けて赤黒化ないしは褐色変化しているものが多く、火災による破損什器を河川に投棄したものと考えられる。

この江戸時代の河川は、七北田川本流または『奥州名所図絵』に見える途絶川と推定できよう。

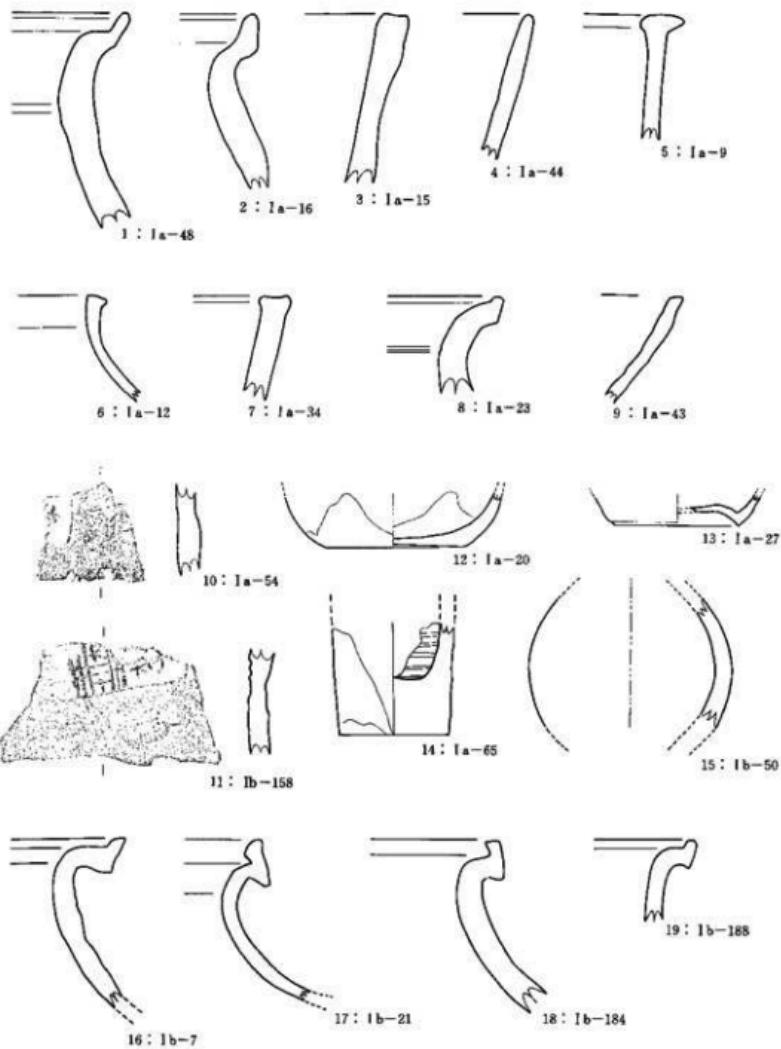
SD-8溝跡の2層～5層から出土した陶磁器は江戸時代中期（17世紀中頃～18世紀中頃）に比定できる特徴を有す肥前磁器を含んでいる。上流の東光寺からの流出遺物であろう。

また、どちらの出土遺物にも、近世初頭の片津や美濃、瀬戸の产品を含んでいて、寺の伝世品や近辺の遺構からの流出の可能性も強い。

7Tの整地層（II層）の下層（III層）からは、常滑窯の甕・中国青磁・宋錢を出土しており、14世紀頃の生活面といえる。

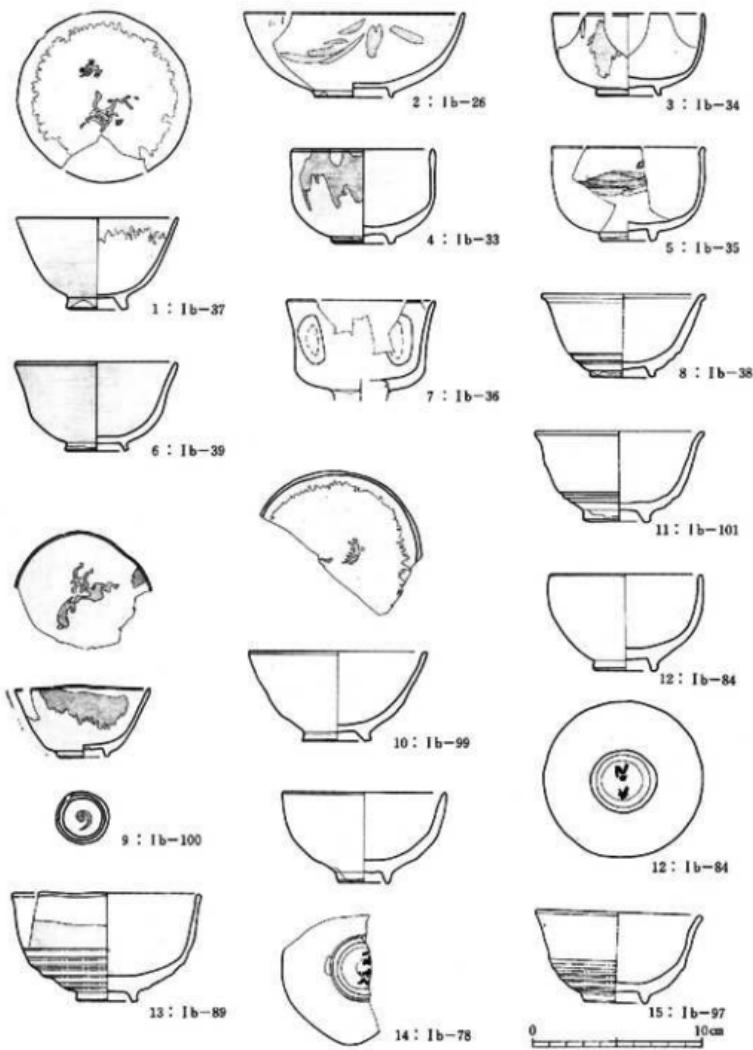


第19図 陶 器

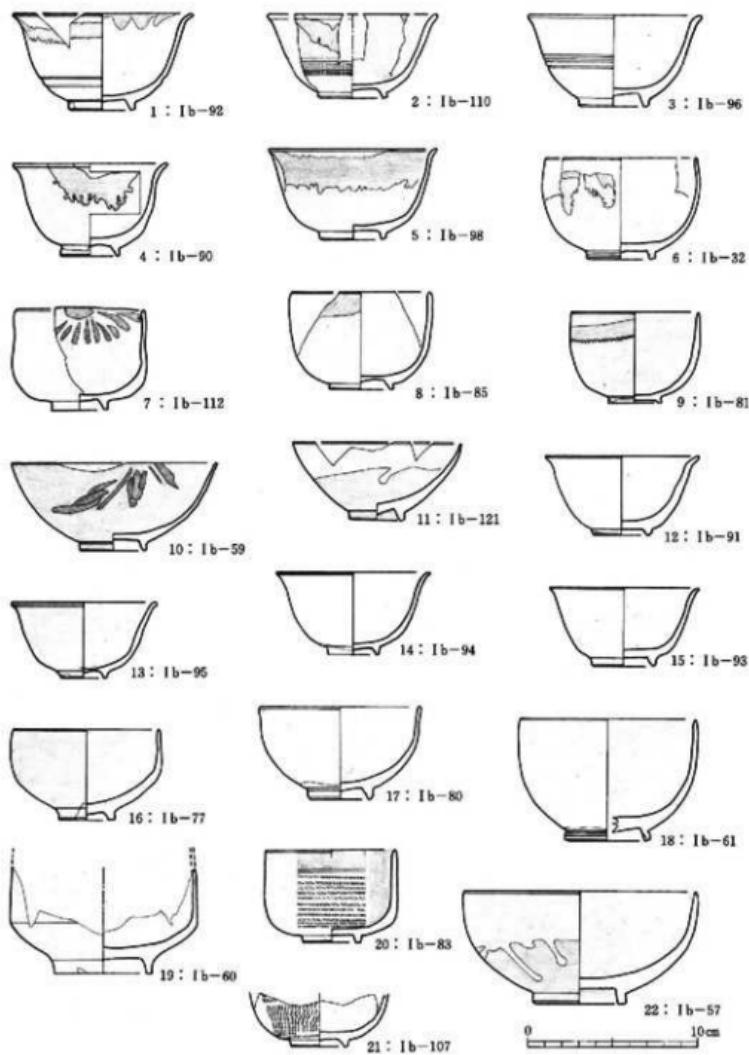


0 10cm

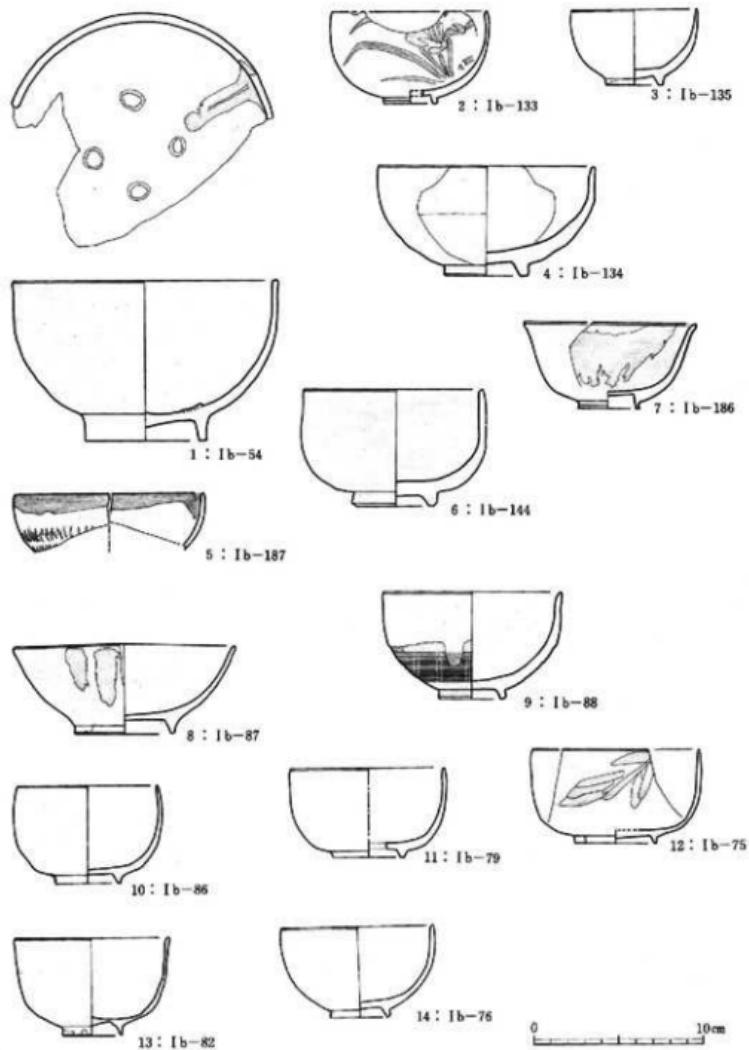
第20図 陶 器



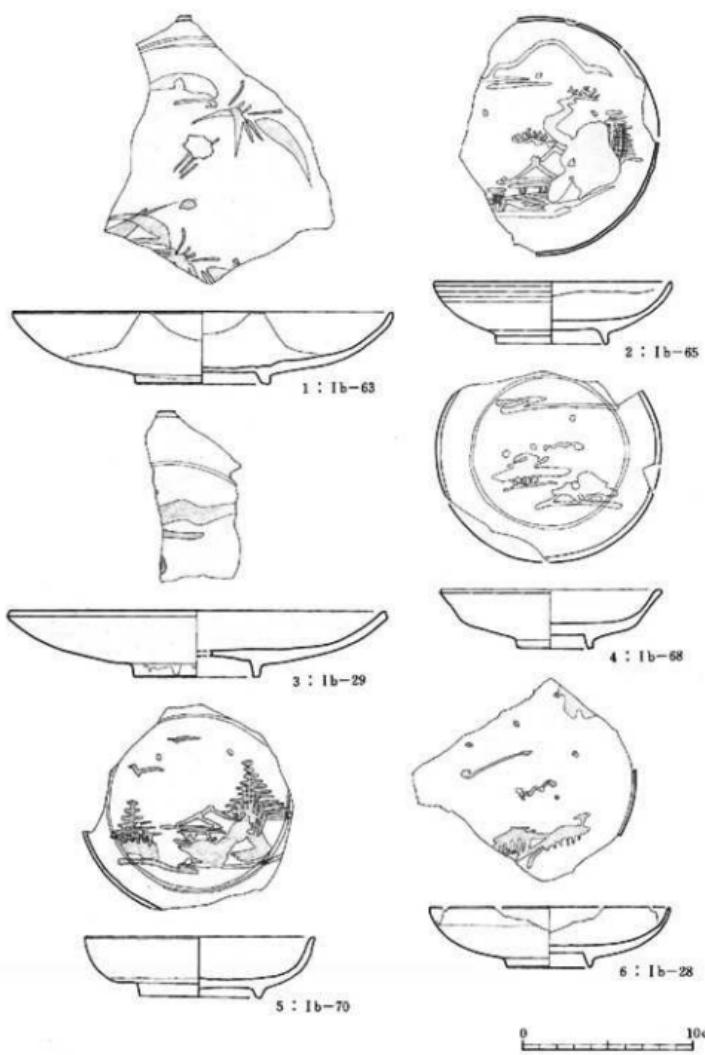
第21図 陶 器



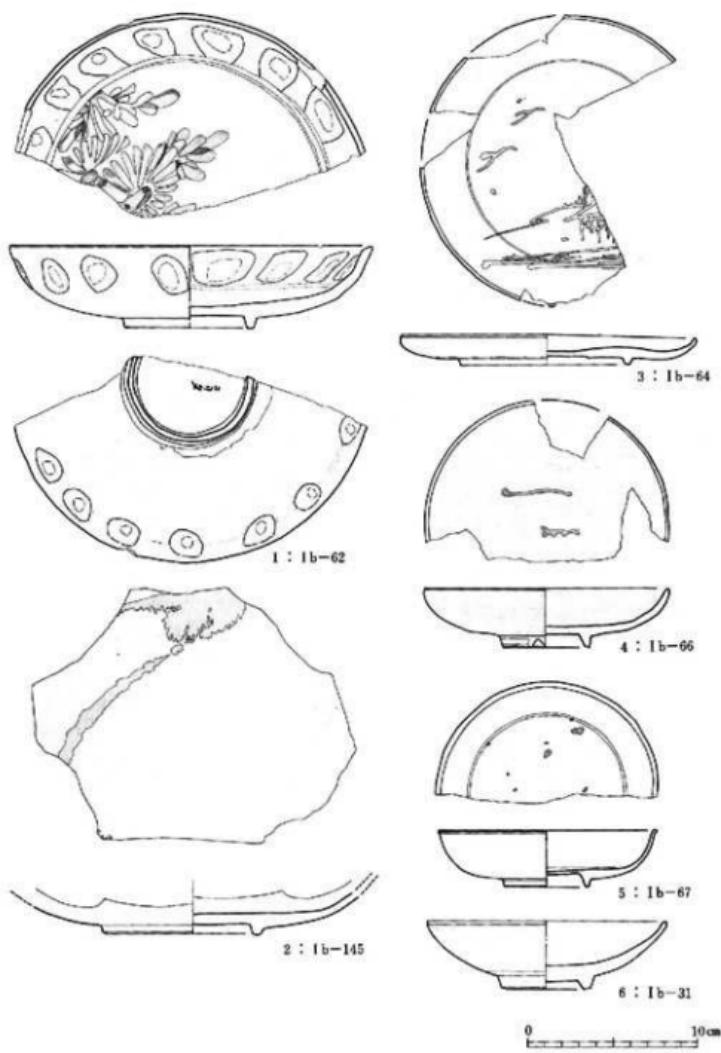
第22図 陶 器



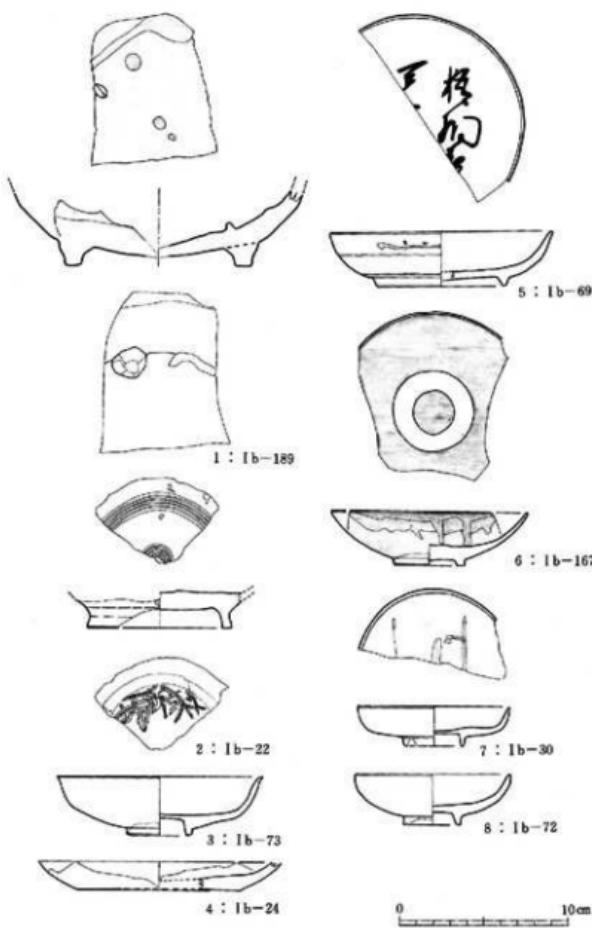
第23図 陶 器



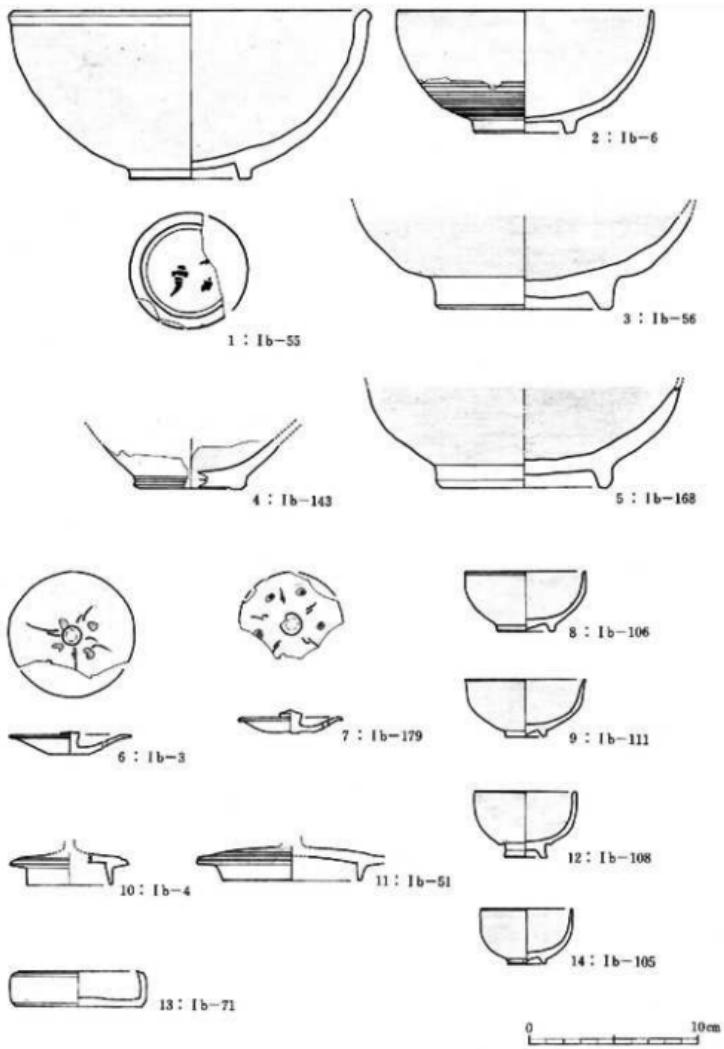
第24図 陶 器



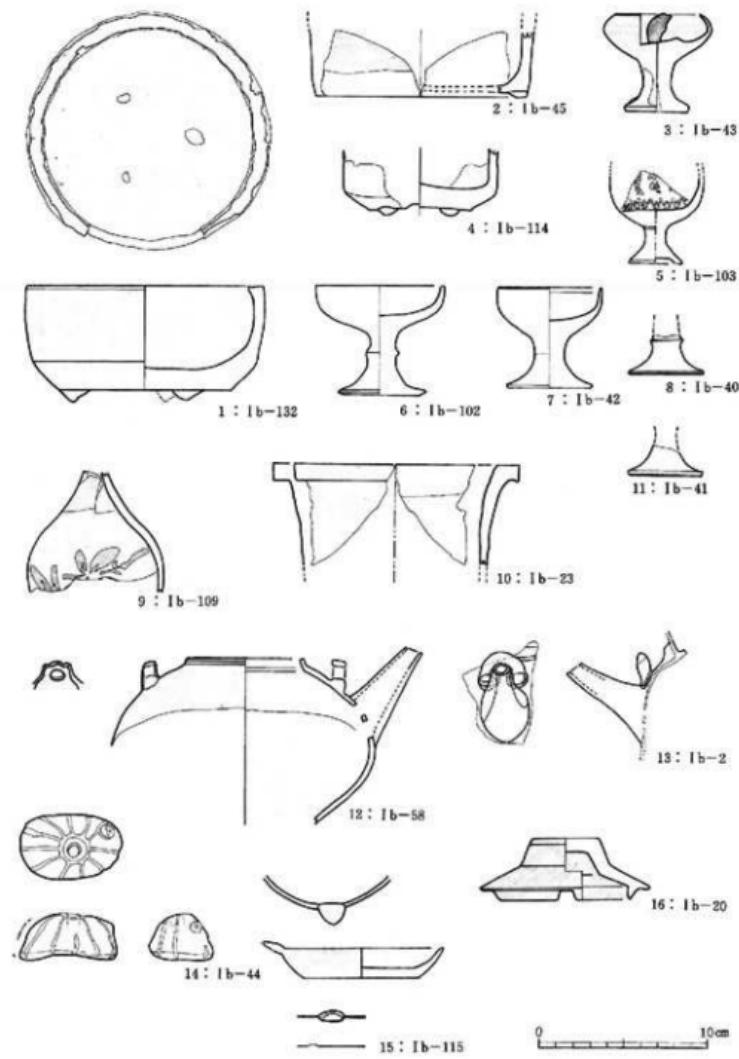
第25図 陶 器



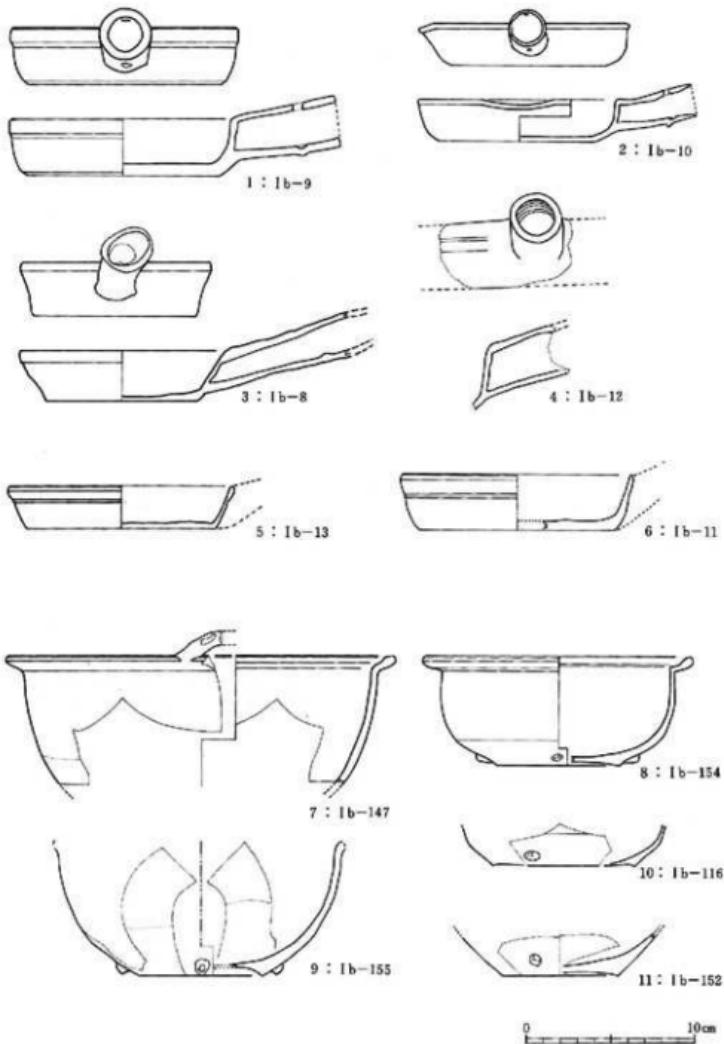
第26図 陶 器



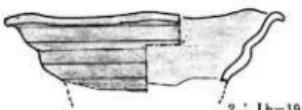
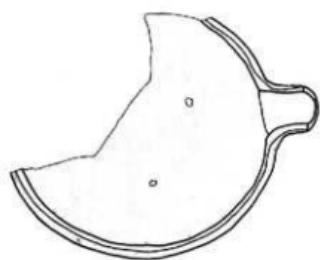
第27図 陶 器



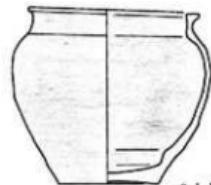
第28図 陶 器



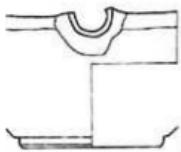
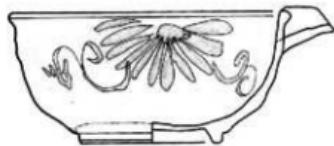
第29図 陶 器



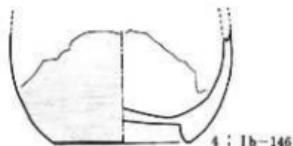
2 : 1b-19



3 : 1b-52



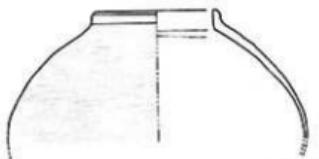
1 : 1b-53



4 : 1b-146



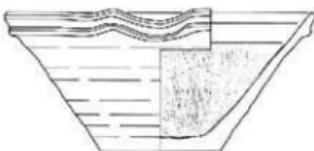
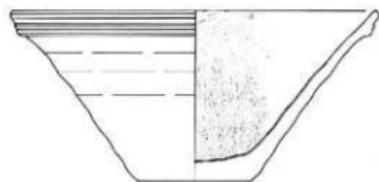
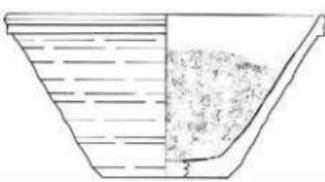
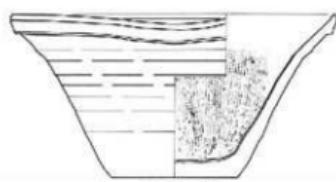
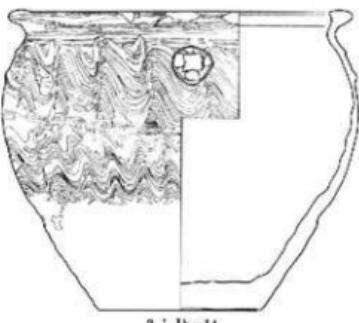
5 : 1b-131



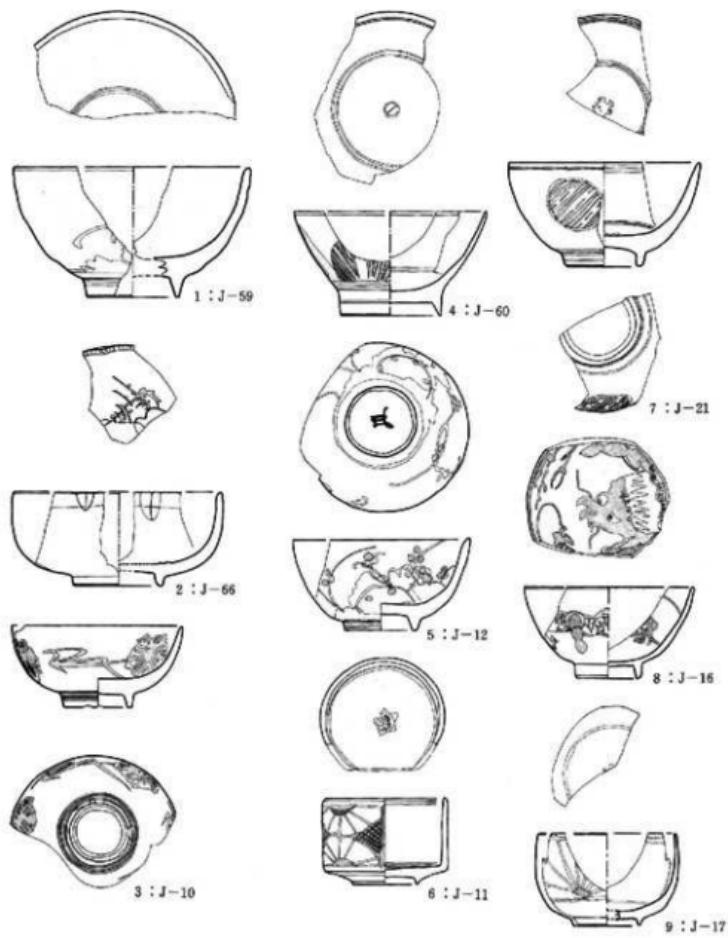
6 : 1b-150



第30図 陶 器

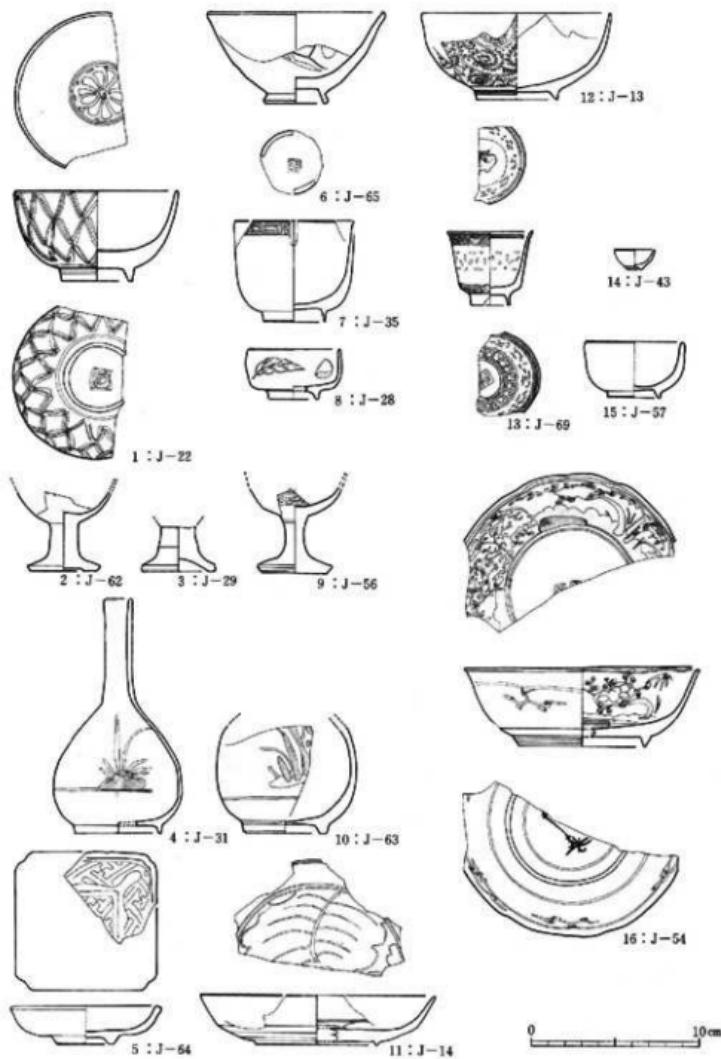


第31図 陶 器

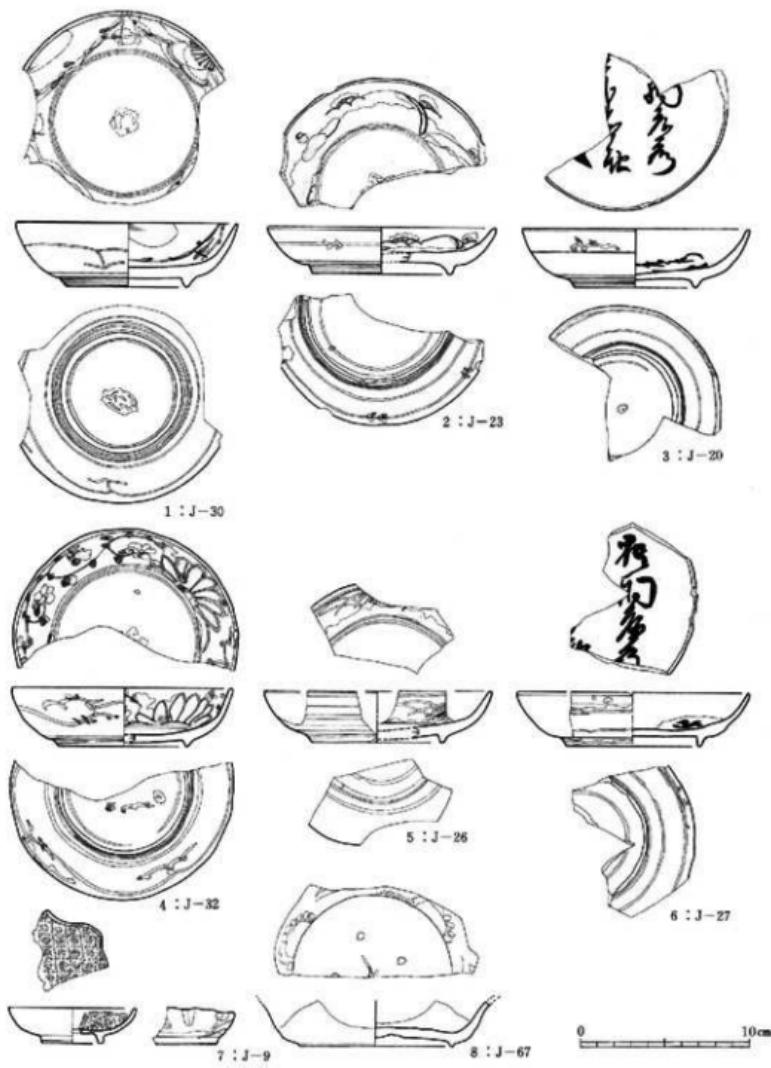


0 10cm

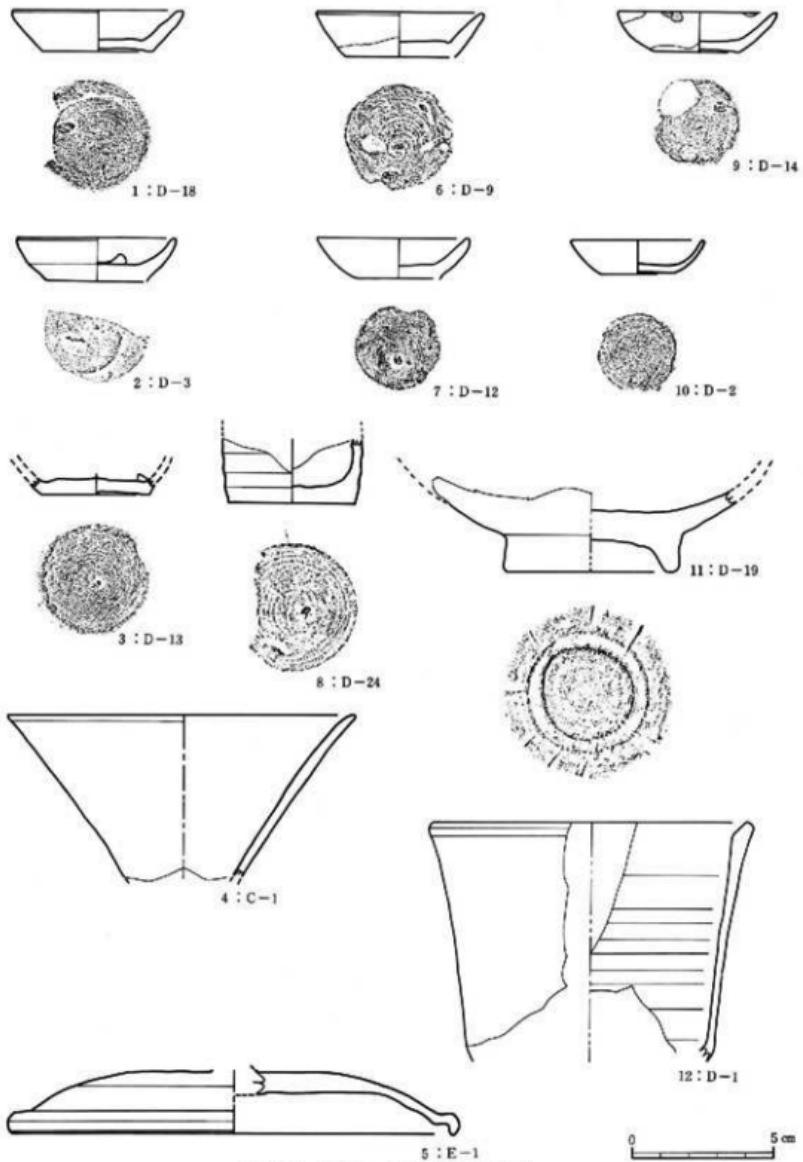
第32図 磁 器



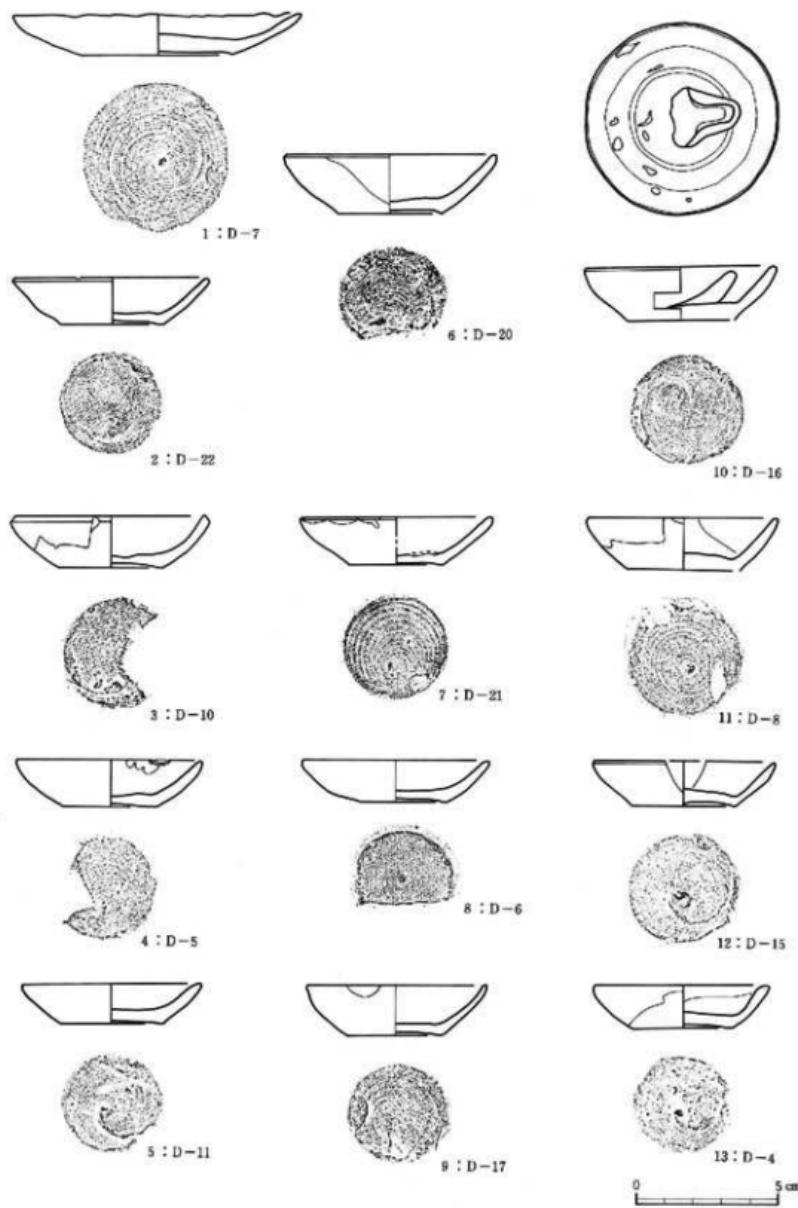
第33図 磁 器



第34図 磁 器



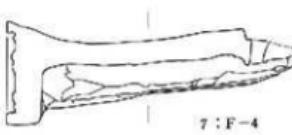
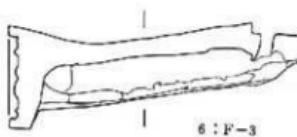
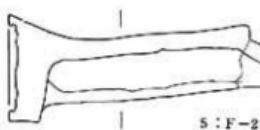
第35図 土師器・土師質土器・須恵器



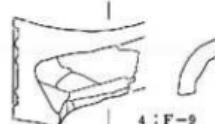
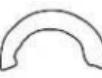
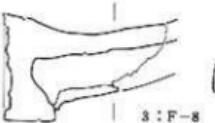
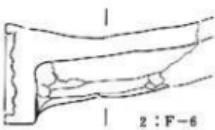
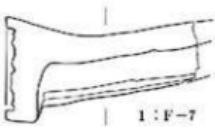
第36図 土師質土器



4 : F-14

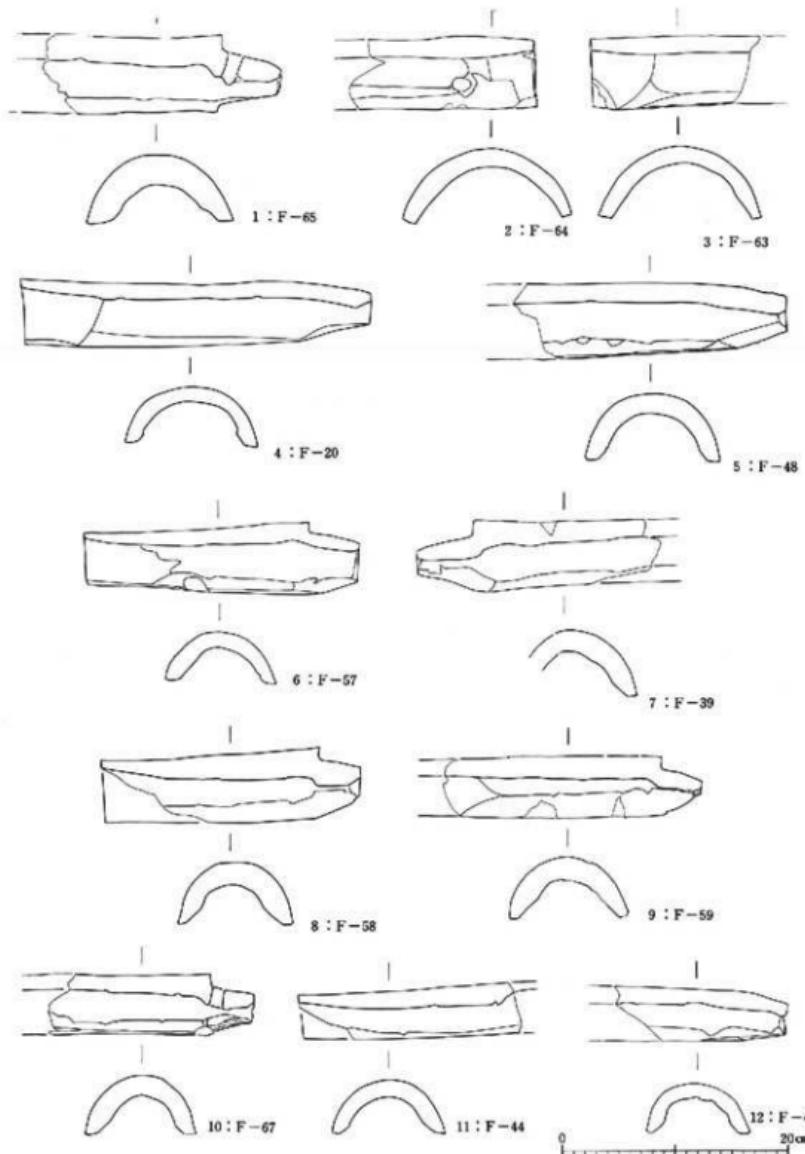


第37図 軒丸瓦

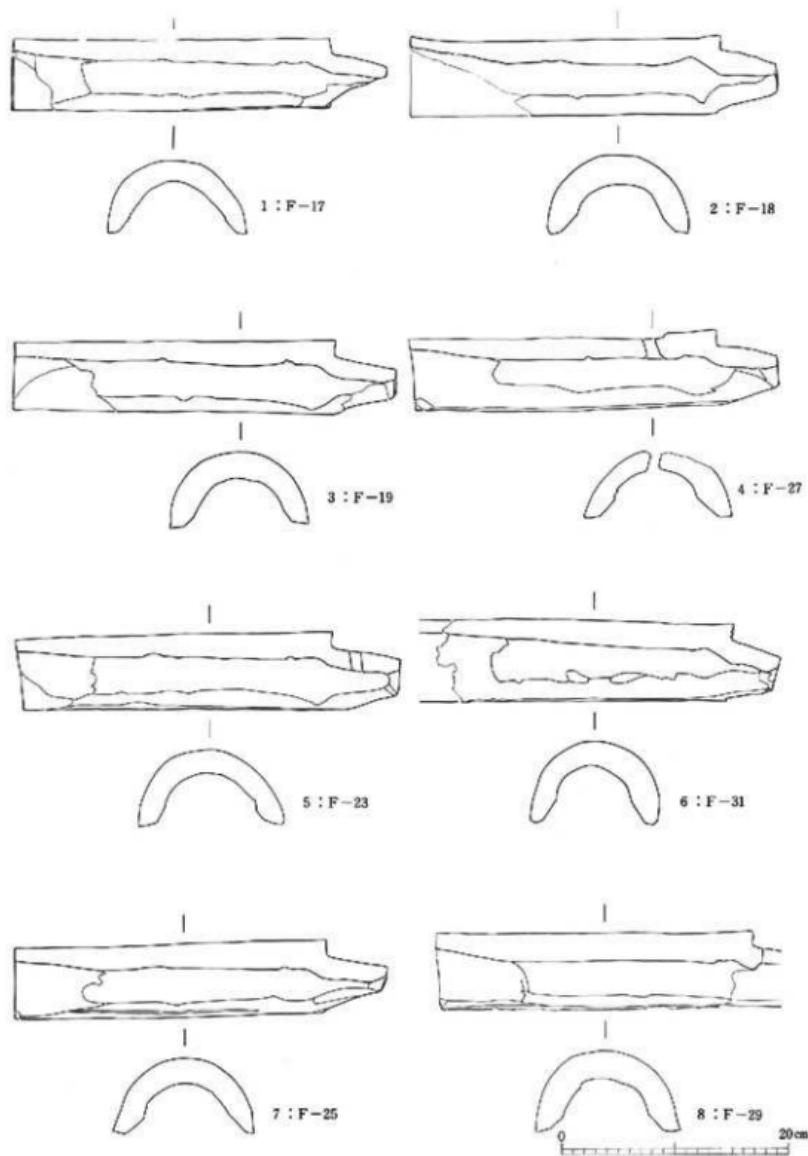


0 10cm

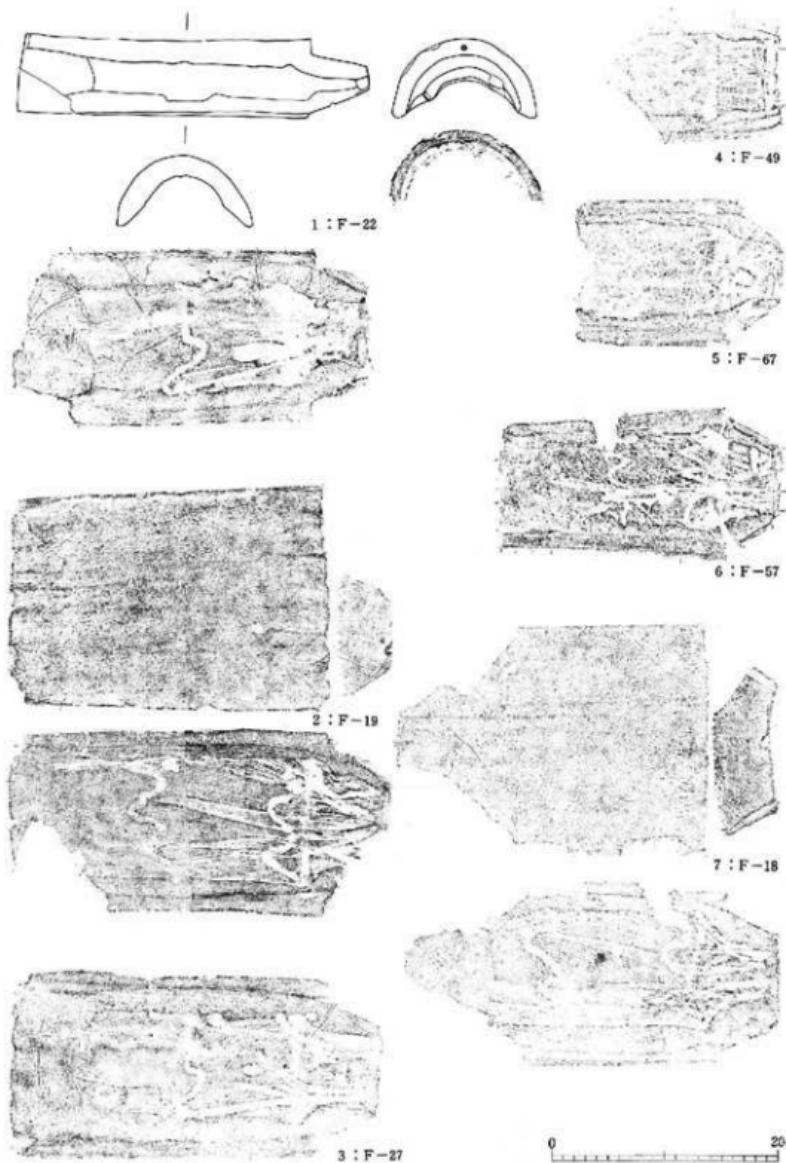
第38図 軒丸瓦



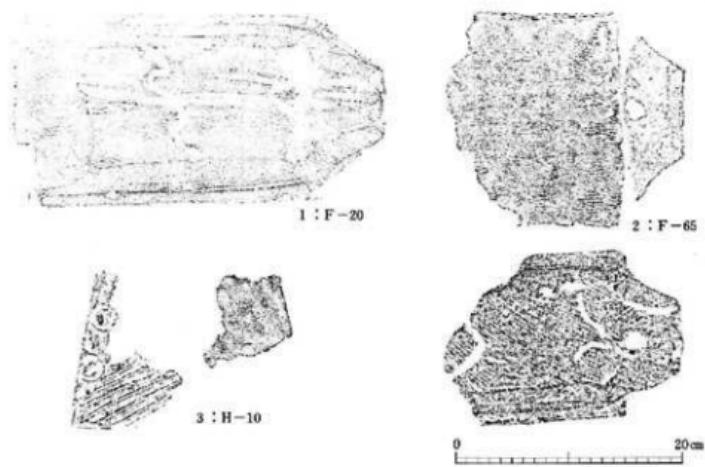
第39図 丸 瓦



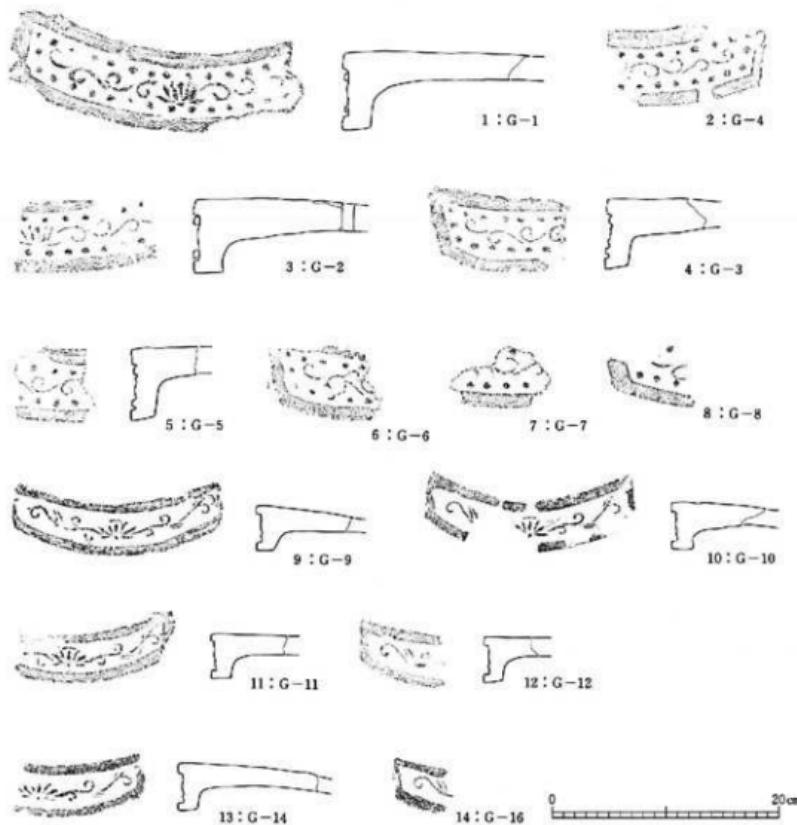
第40図 九 瓦



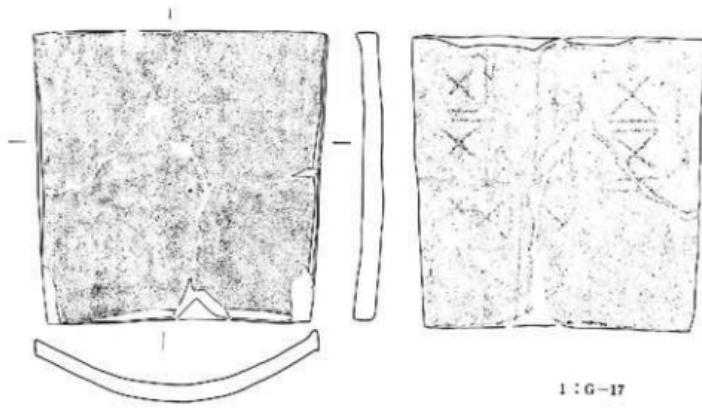
第41図 丸瓦拓影



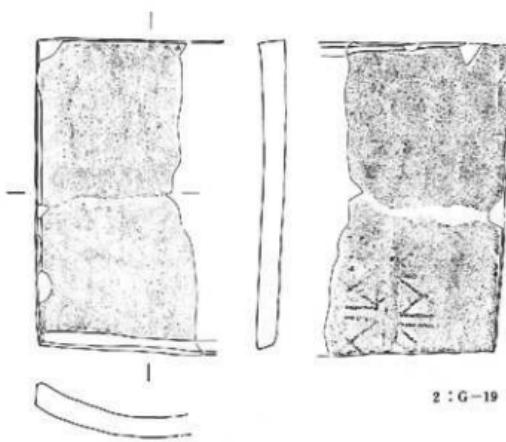
第42図 丸瓦、鬼瓦拓影



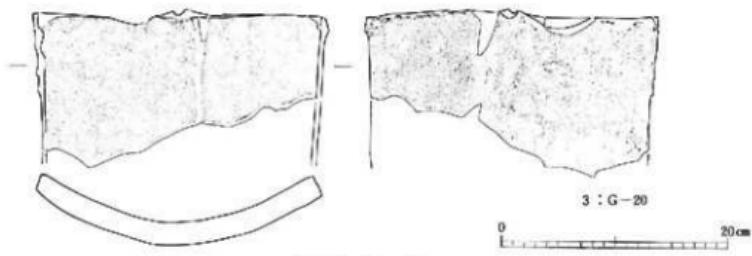
第43図 軒平瓦



1 : G-17



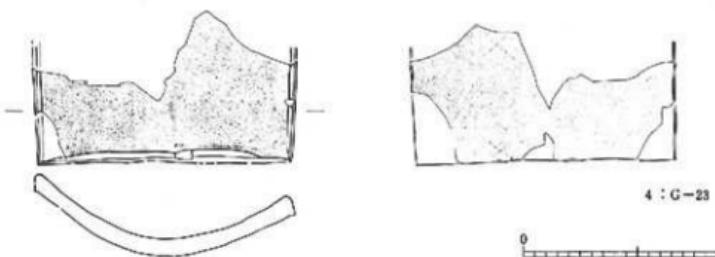
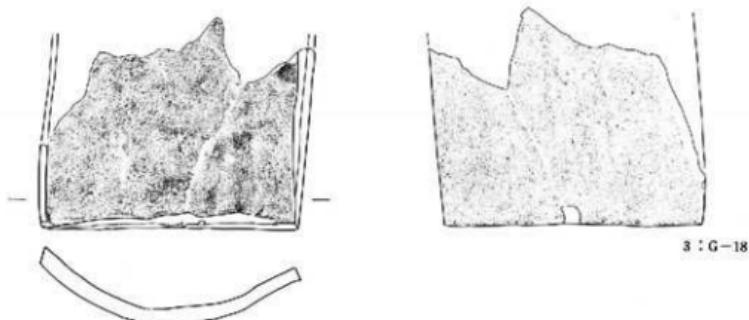
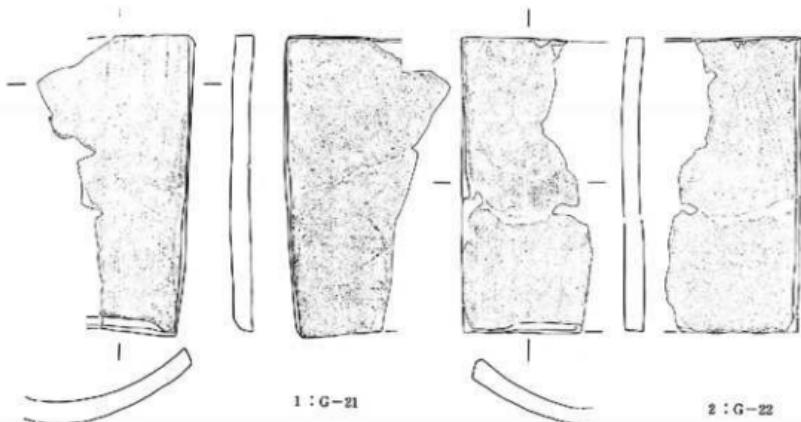
2 : G-19



3 : G-20

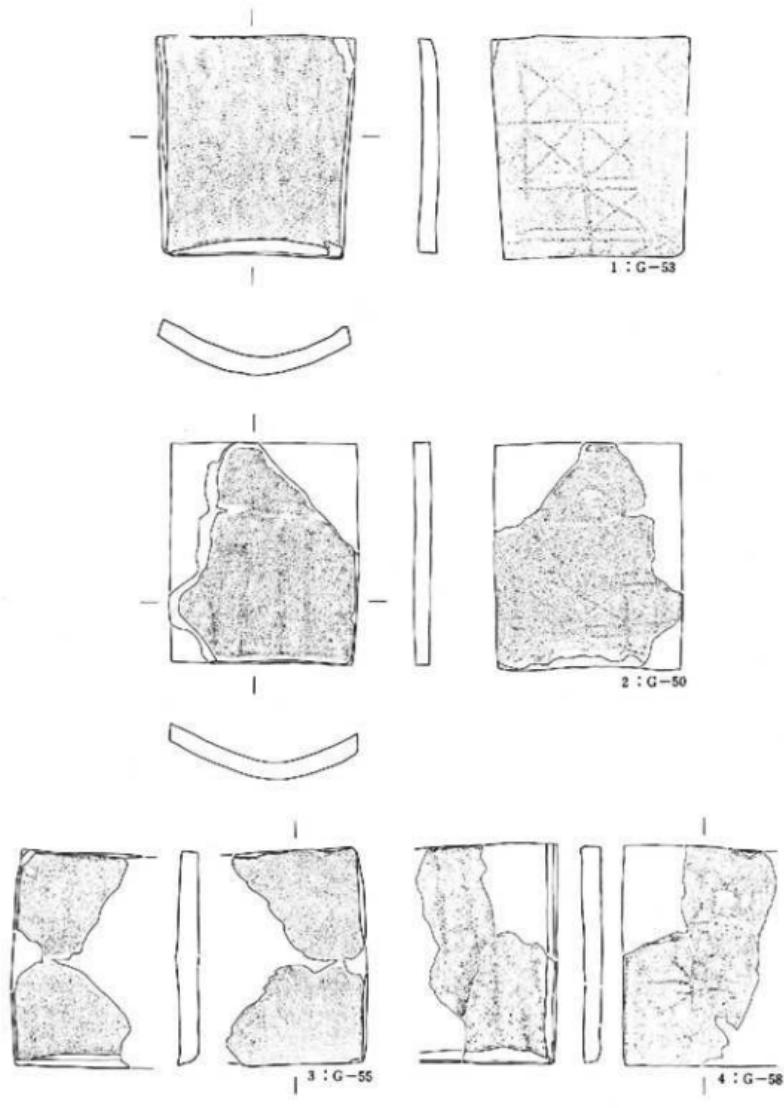
0 20cm

第44図 平 瓦

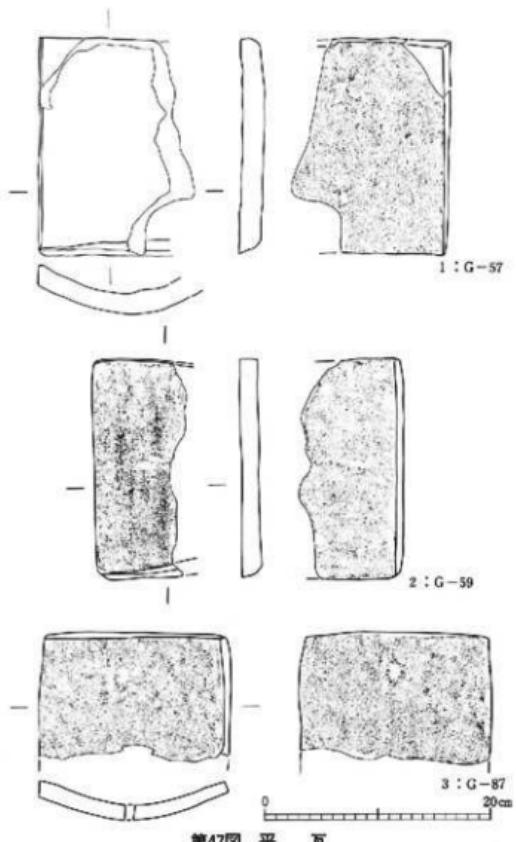


0 1 20 cm

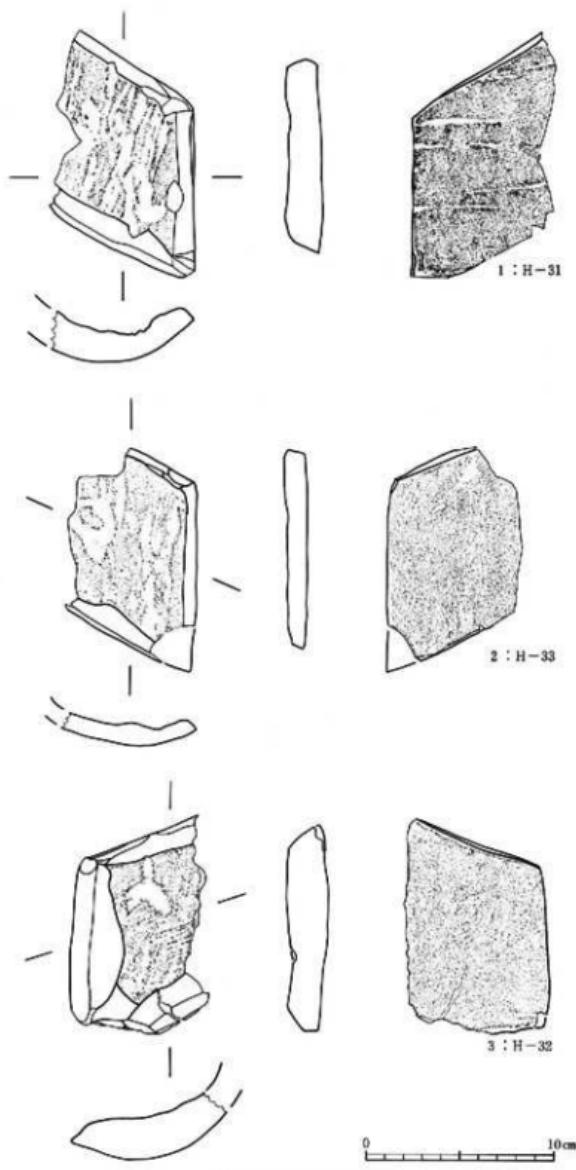
第45図 平 瓦



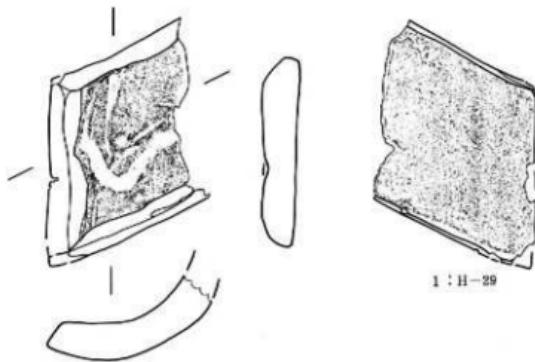
第46図 平 瓦



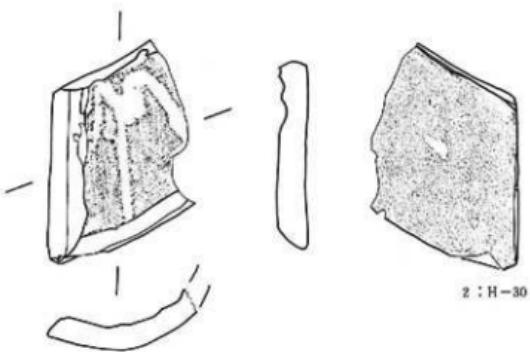
第47図 平 瓦



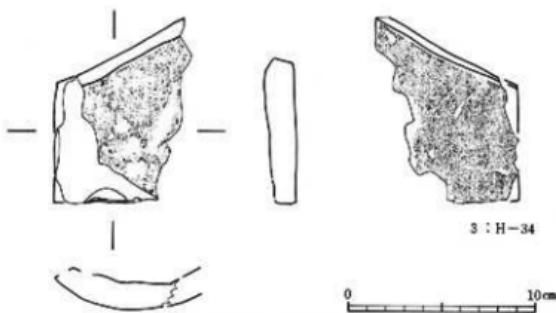
第48図 面戸瓦



1 : H - 29



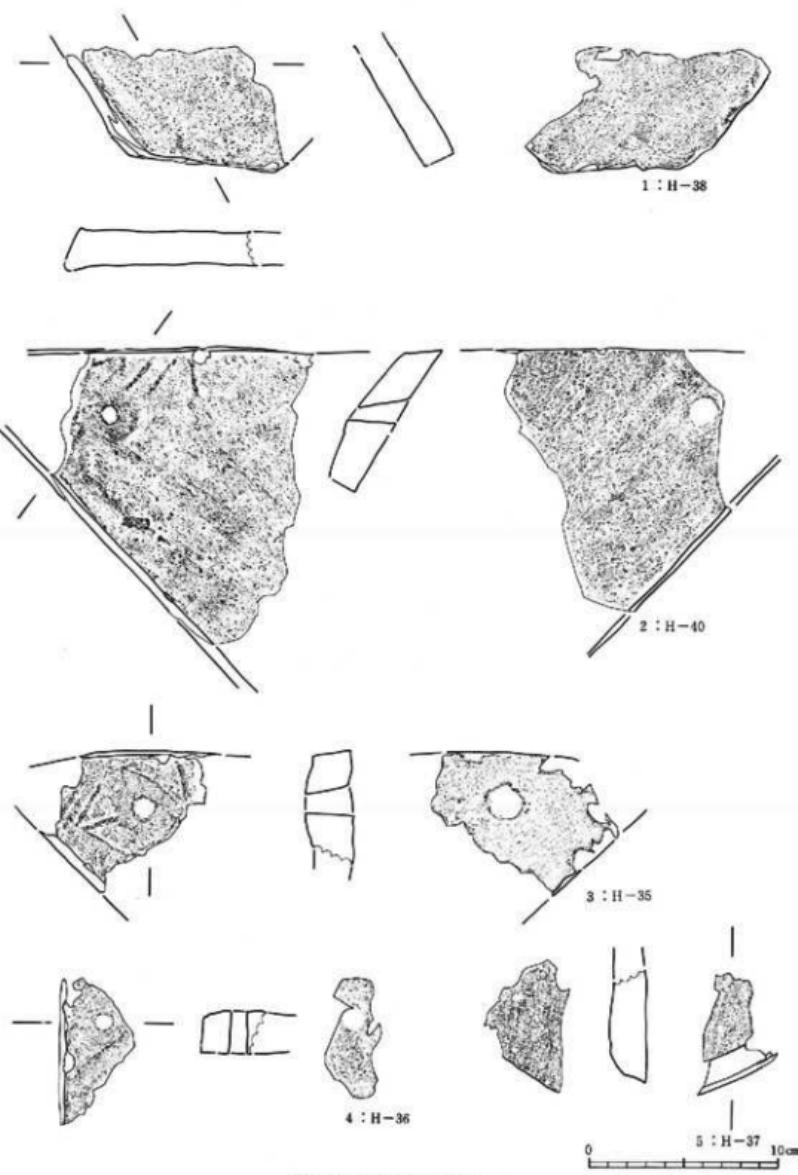
2 : H - 30



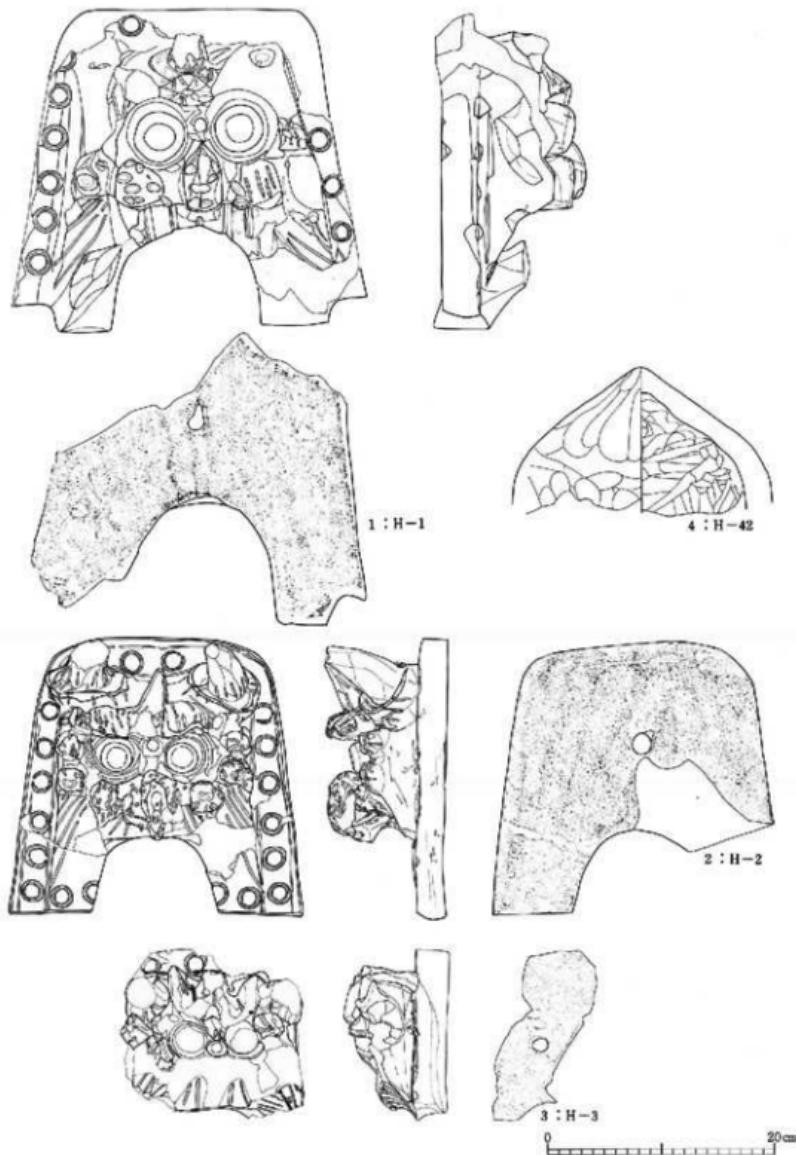
3 : H - 34

0 10cm

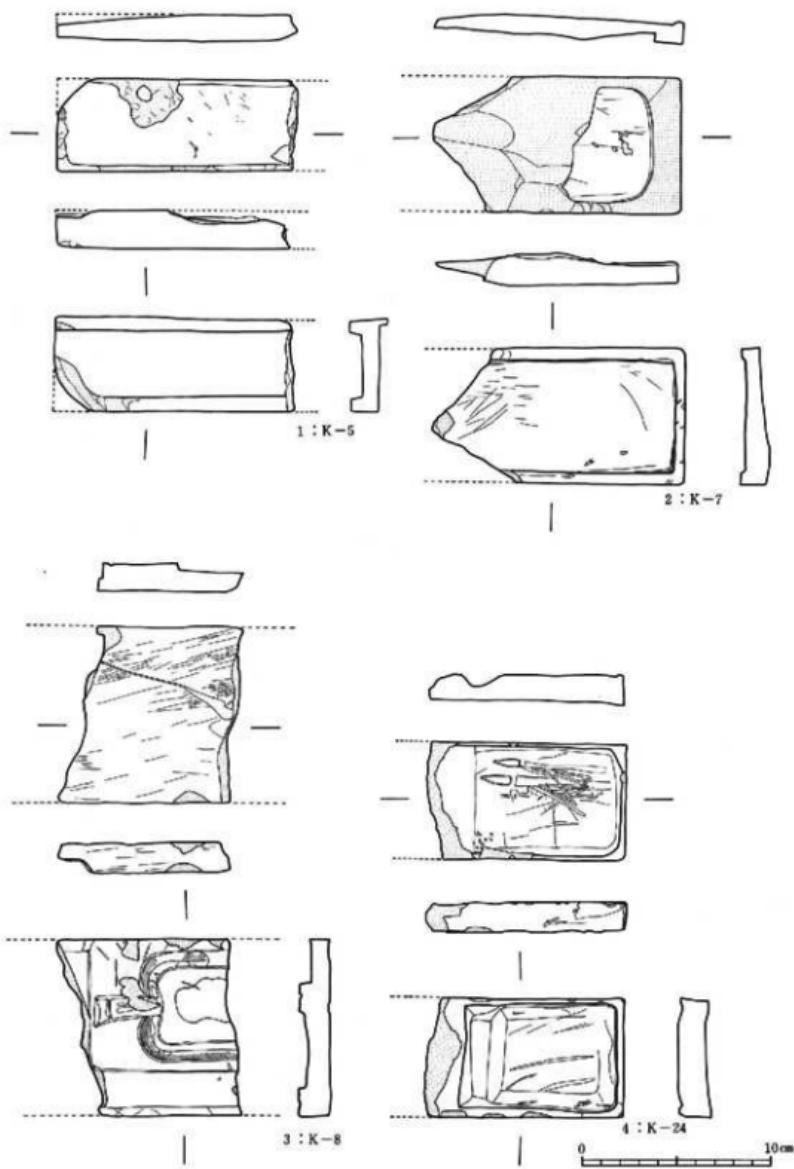
第49図 面戸瓦



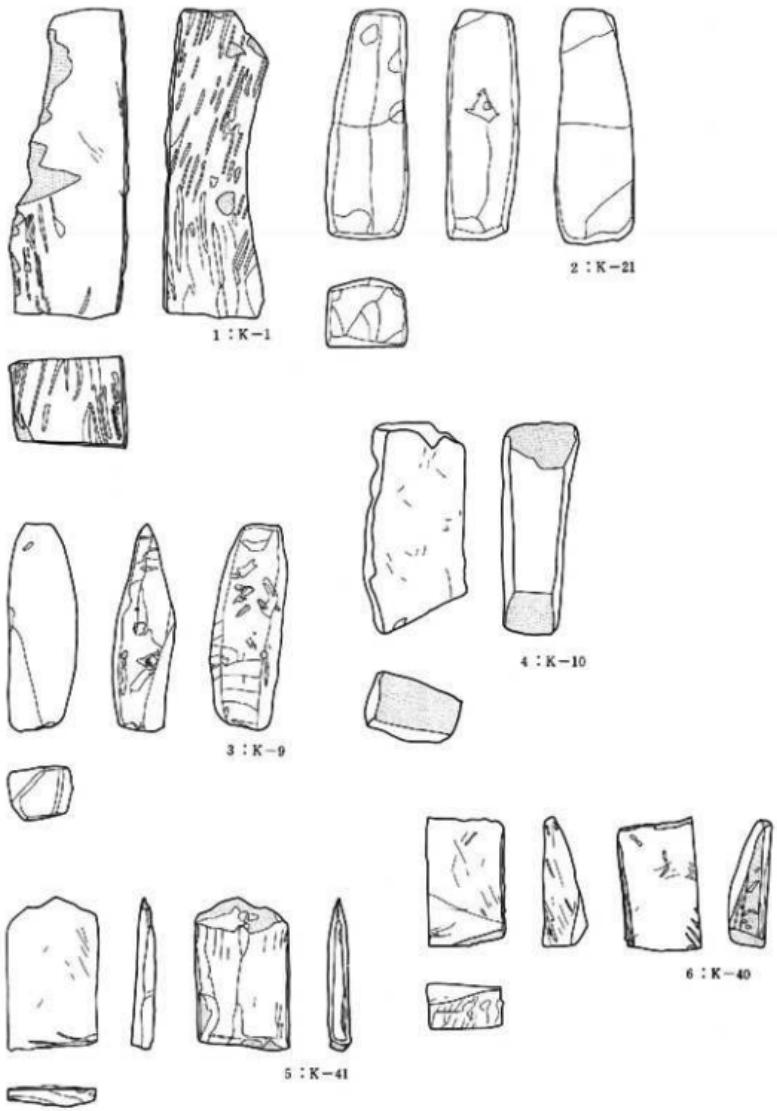
第50図 面戸瓦・切隅瓦



第51図 鬼瓦・宝珠

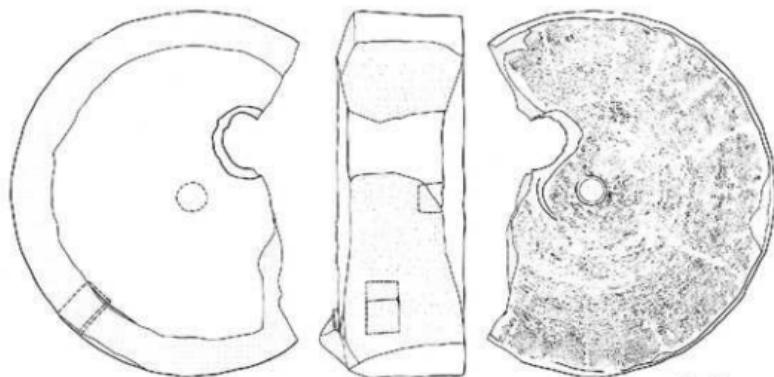


第52図 硯

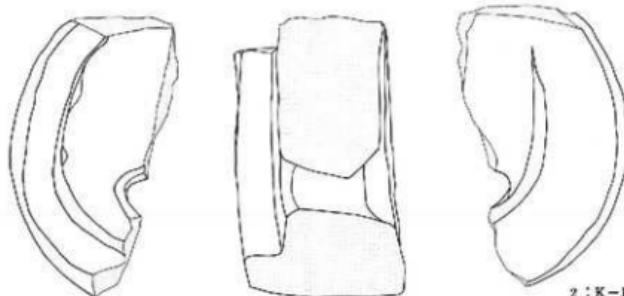


0 10 cm

第53図 磐石



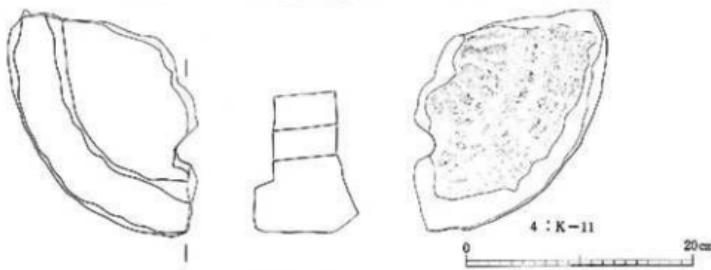
1 : K-12



2 : K-14

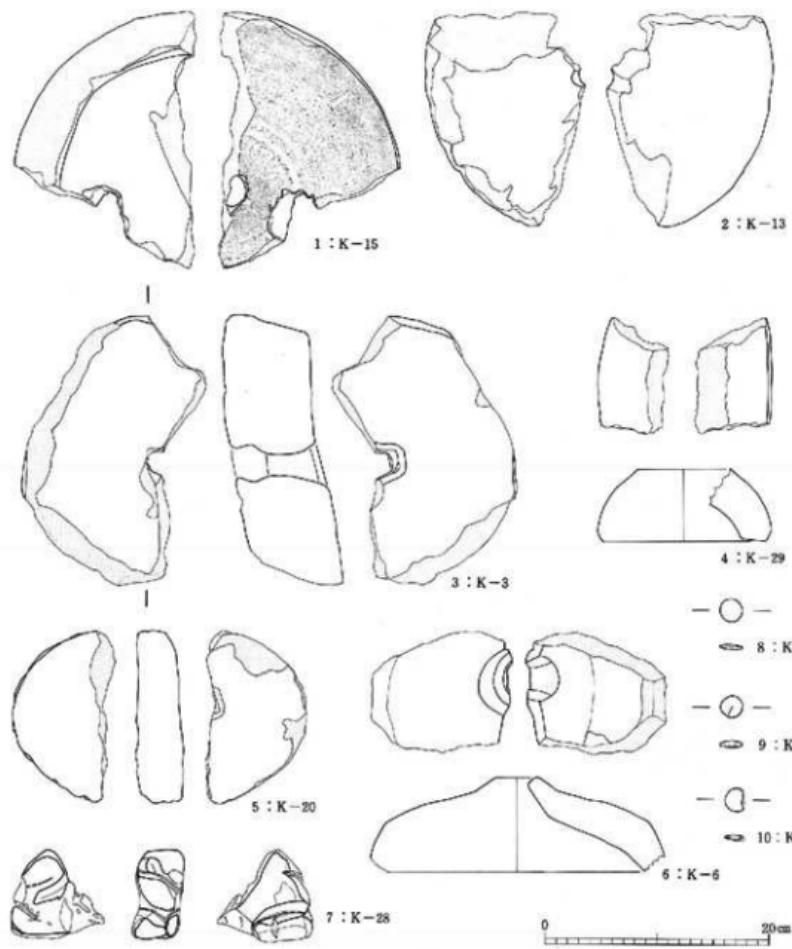


3 : K-26

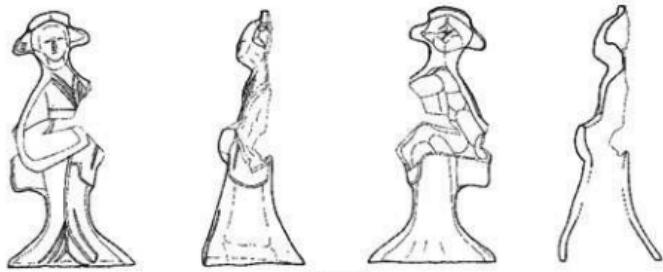
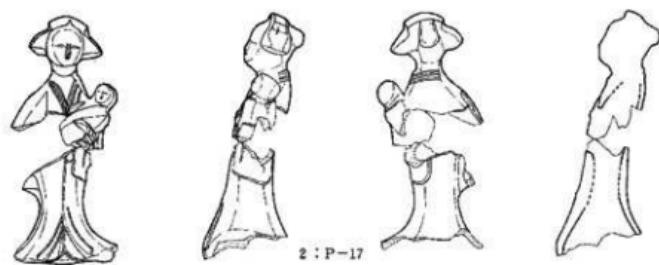
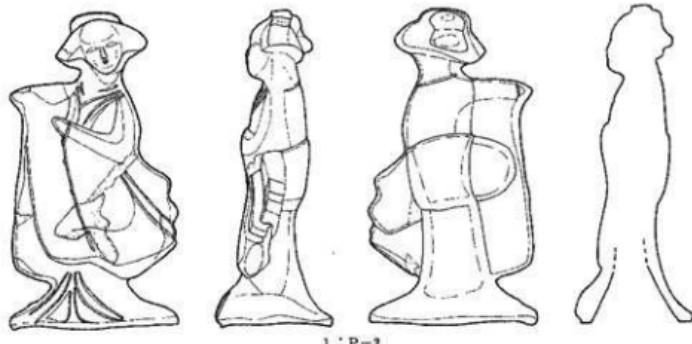


0 20 cm

第54図 石 白

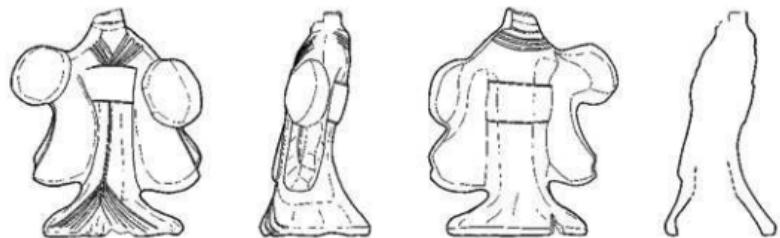


第55図 石臼・石製品

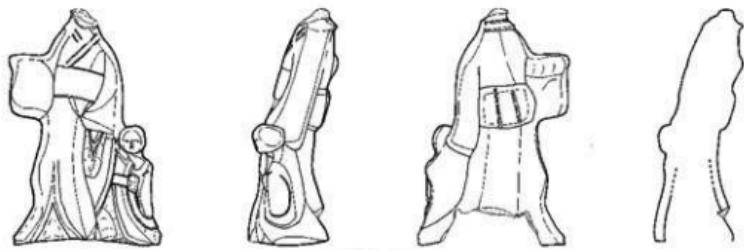


0 10cm

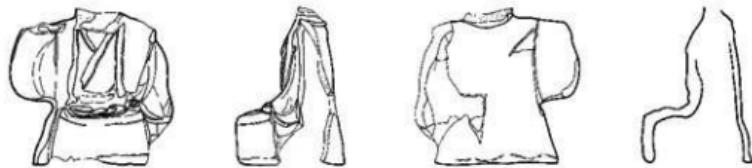
第56図 土人形



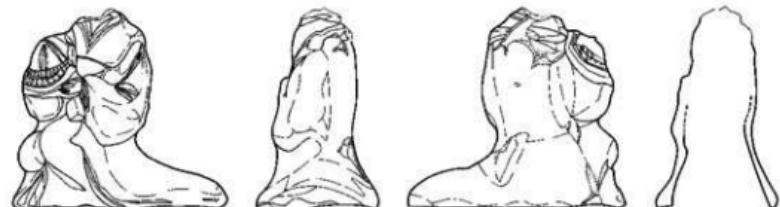
1 : P-19



2 : P-18



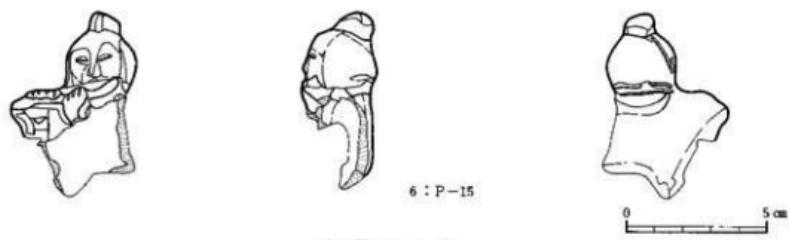
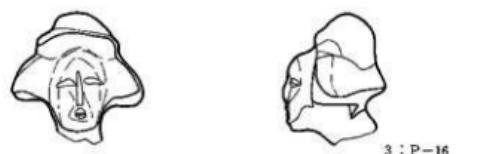
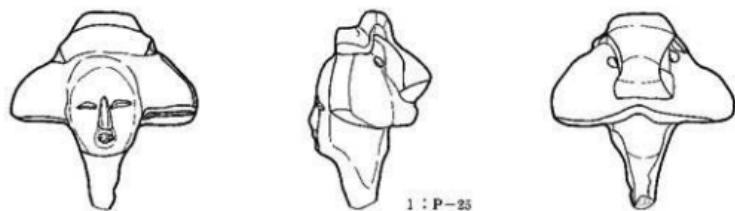
3 : P-10



4 : P-20

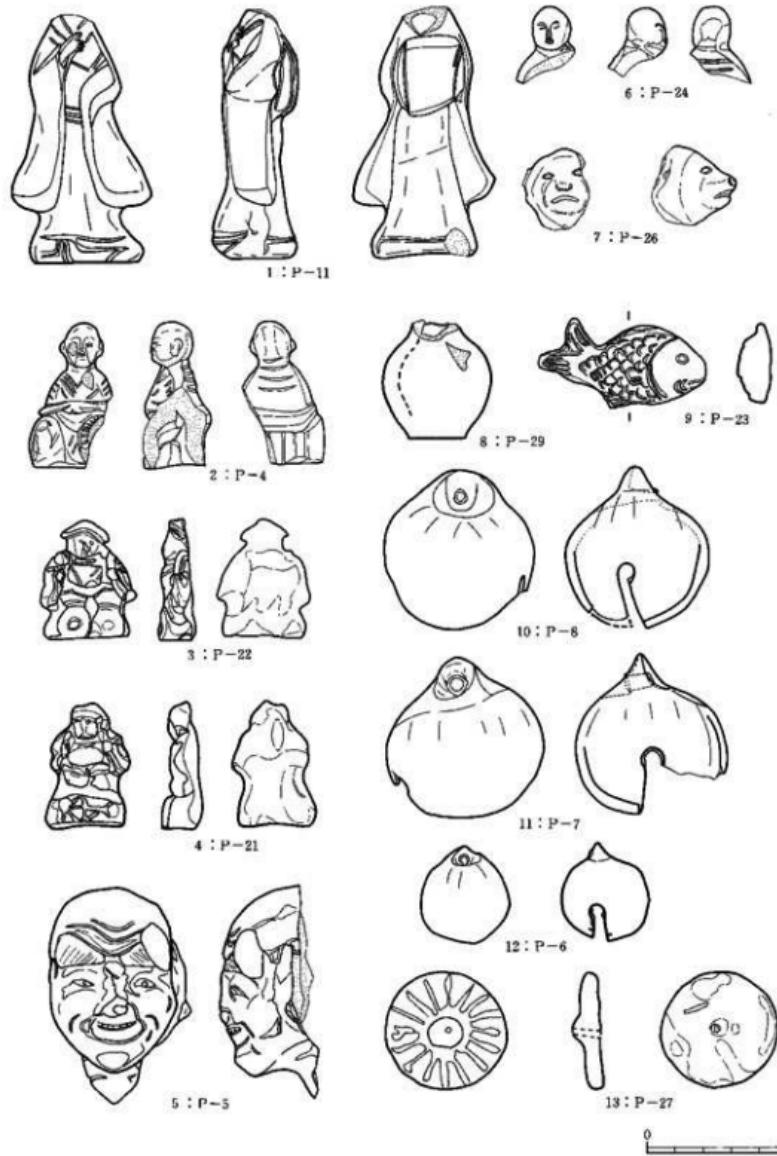


第57図 土人形

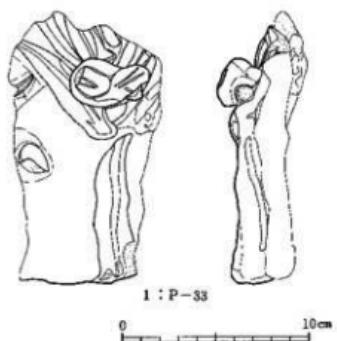


0 5 cm

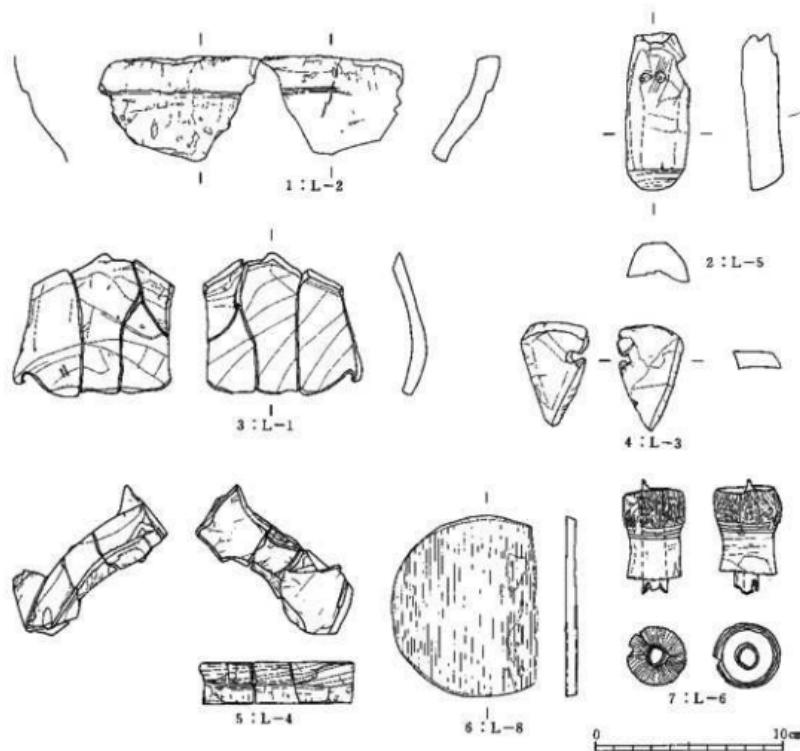
第58図 土人形



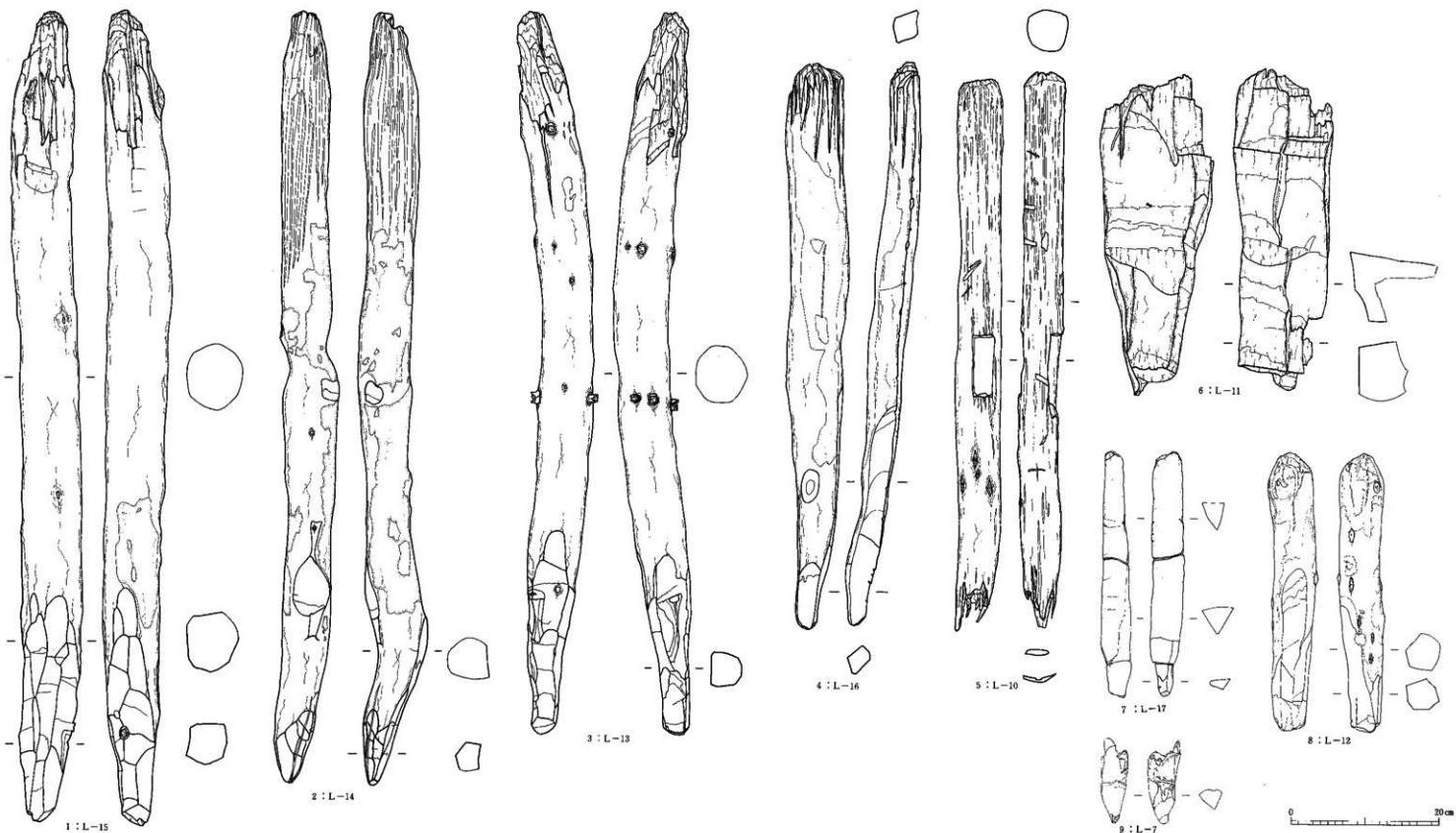
第59図 土人形・土製品



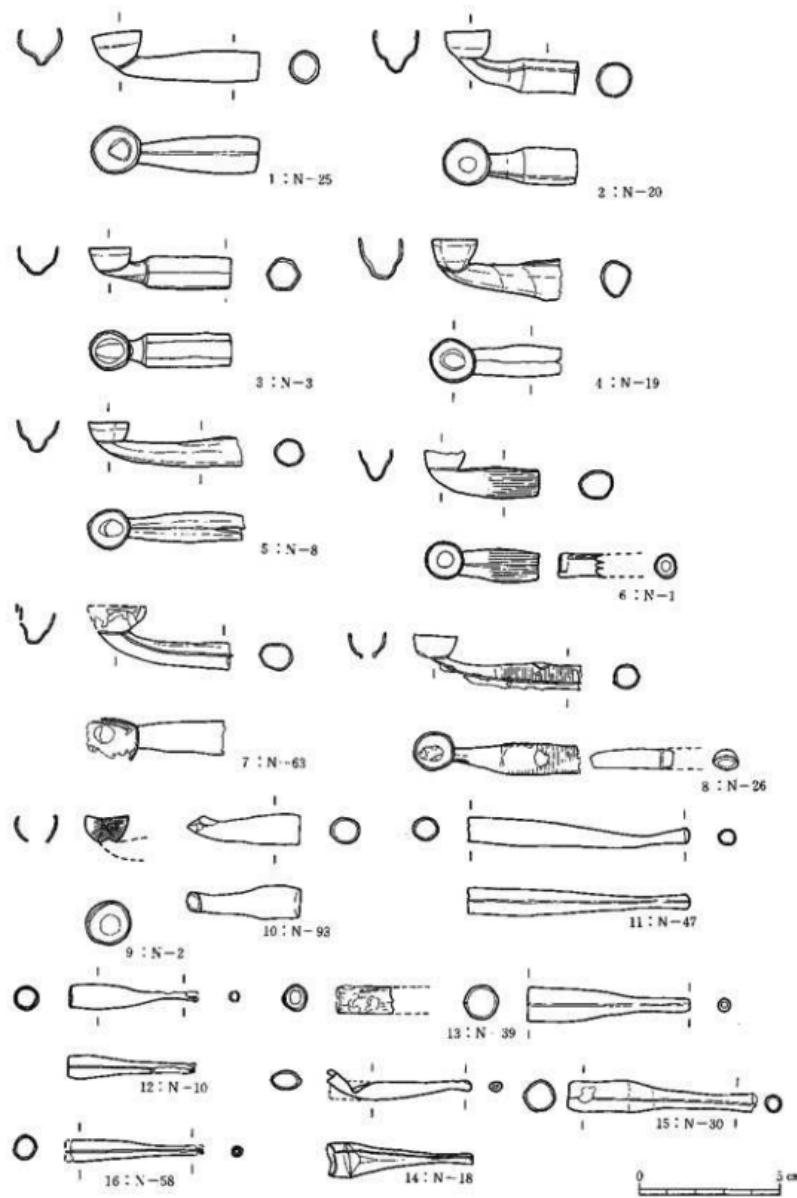
第60図 土人形



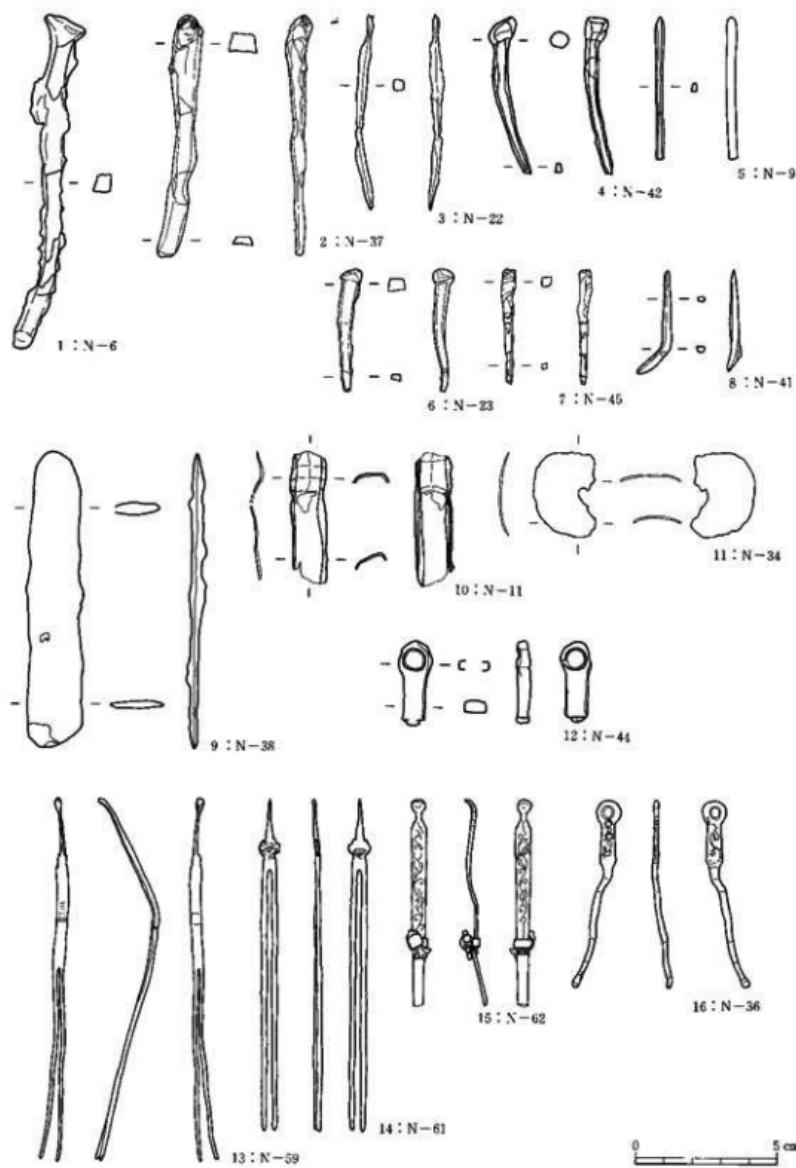
第61図 木製品



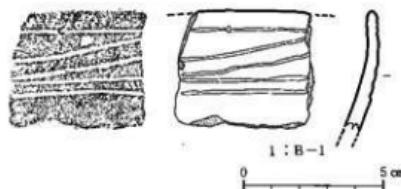
第62図 木 杖



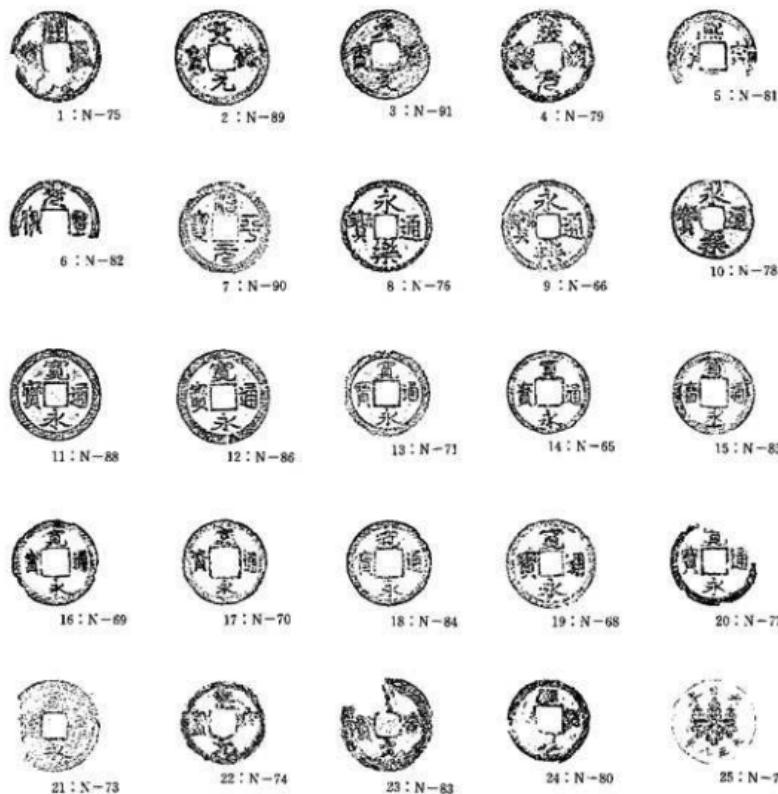
第63図 煙管



第64図 金属製品



第65図 弥生土器



第66図 古銭



第1表 登録遺物目録(1)

I.a. 無動陶器

登録番号	器名	出土地名	出土遺物名	文化遺物名	年号	種別	家業	刀	鉢	瓶	壺	瓶	器名	特徴
1	火 烧	7T			19-10	7-13	瓦質土器		22.4					外腹にガラ、内腹コロナで
2	壺	7T			19-7	7-5			16.6	9.1				下部の腹底4本の脚足あり、焼きめがみあり
3	火 烧	7T			19-11	7-6	瓦質土器		19.5	23.1				外腹輪郭及び脚穴付火炎、3足付
4	七 腹	7T	SR-1 3層		19-9	7-9	瓦質土器		25.8	20.6	17.4			七肚付
5	火 烧	7T	SR-1 2層				瓦質土器							3足付、底部輪郭付
6	火 烧	7T	SR-1 3層		19-13		瓦質土器							3足付、底部輪郭付
7	手 烧	7T	SR-1 3層		19-3	6-4	瓦質土器		19.8		16.5			外腹輪郭の記りだけ文
8	壺	7T	SR-1 3層											
9	手 烧	7T	SR-1 3層		20-5		瓦質土器							(6.7)
10	土 壁	7T			19-2	7-11	瓦質土器		17.2	13.0	9.0			外腹にスス付青
11	火 烧	7T	SR-1 4層		19-5	7-8	瓦質土器		18.6	13.6	9.9			内腹にガラ、3足付、回転済切り
12	壺	7T	SR-1 4層		20-6	8-25								(5.7)
13	手 烧	7T	SR-1 4層		20-3	8-22								(9.0%)
14	手 烧	7T	SR-1 4層		20-2	8-24								(9.35)
15	火 烧	7T	SR-1 4層		20-1	8-24								口縁の外側に筋付文の痕跡あり
16	火 烧	7T	SR-1 4層		20-8	7-10	瓦質土器		24.85		19.5			
17	火 烧	7T	SR-1 5層		19-14	7-14	瓦質土器							
18	手 烧	7T	SR-1 5層		20-12		瓦質土器							大腹にスス状斜面化物を見る
19	手 烧	7T	SR-1 5層		20-11		瓦質土器							内腹にスス付青
20	手 烧	7T	SR-1 5層		20-10		瓦質土器							内腹にスス付青
21	手 烧	7T	SR-1 5層		20-9		瓦質土器							内腹にスス付青
22	手 烧	7T	SR-1 5層		20-8		瓦質土器							内腹にスス付青
23	壺	7T	SD-8 瓦質		20-5	8-7	瓦質土器							口縁内側に洗練あり
24	壺	7T	SD-8 3層		20-4	8-11	瓦質土器							
25	手 烧	7T	SD-9 3層				瓦質土器							
26	手 烧	7T	SD-8 3層		19-6		瓦質土器		18.9	13.6	6.2			施用け文の縁外部に書きあり。器底に土の痕跡
27	手 烧	7T	SD-8 2層		20-13		瓦質土器							(8.2)
28	手 烧	7T	6号石窯付				土師質土器							香炉
29	手 烧	7T	土		8-29									
30	手 烧	7T	土											
31	手 烧	7T	土											
32	手 烧	7T	土											
33	手 烧	7T	土											
34	直形土器	7T	SR-1 2層上部		20-7									
35	手 烧	7T	瓦											
36	手 烧	7T	瓦											
37	手 烧	7T	瓦											
38	手 烧	7T	瓦											
39	手 烧	7T	ペルト付 3層				土師質土器							
40	手 烧	7T	1 層		19-12	7-12	瓦質土器		20.8	29.75	8.5			
41	手 烧	7T	1 层		19-1	7-7	瓦質土器		11.1	8.7	3.6			縫合跡付底
42	手 烧	7T	1 层		19-9	8-27								
43	手 烧	7T	1 层		19-8	8-27								
44	手 烧	7T	1 层		20-4	8-28								(7.8)
45	手 烧	7T	SE-1 1層		8-30									
46	手 烧	7T	SE-1 1層		8-32									7本單位の頭頂あり
47	手 烧	7T	SE-1 1層		8-33		土師質土器							
48	手 烧	7T	SR-1 4層		20-1	8-25	土器							(11.5)
49	手 烧	7T	SR-1 4層		19-4	8-23	瓦質土器							(5.7) まとあり
50	手 烧	7T	SR-1 4層		8-26									
51	手 烧	7T	土											
52	手 烧	7T	土											
53	手 烧	7T	SR-1 4層				瓦質土器							(10.4)
54	手 烧	7T	SR-1 4層		20-10		瓦質土器							
55	手 烧	7T	SR-1 5層上部											8本單位の頭頂あり
56	手 烧	7T	SR-1 5層		8-5									
57	手 烧	7T	SR-1 4層											
58	手 烧	7T	瓦											
59	手 烧	7T	瓦		8-16									
60	手 烧	7T	瓦		8-17									
61	手 烧	7T	瓦上層付 3層											軽微焼成あり、内曲の形状が現れている
62	手 烧	7T	瓦上層付 3層											外壁凹凸あり
63	手 烧	7T	瓦上層付 3層		18-29									藍径1cmの穴あり
64	手 烧	7T	瓦				瓦質土器							
65	手 烧	7T	SR-1 4層		20-14		土師質土器		5.8	16.25				外腹印強あり。軽微焼成あり

I.b. 施釉陶器(1)

登録番号	品種	地名	出土遺物名	実測番号	施釉部位	施釉面積	刀	鉢	瓶	壺	瓶	特徴
2	手 烧	7T		26-18			7.20(28) 6.40(25)	2.2	1.6(7.9) 6.40(5.5)			灰釉、底こぼれがある
3	手 烧	7T	SR-1 1層	27-6	5-5							灰釉、内底無釉、外底有釉、底板内切り
4	手 烧	7T	SR-1 2層	27-10			7.0	4.9 (1.85)	灰釉、内底無釉			
5	手 烧	7T	SR-1 4層	27-2	2-26	被	底、15.0	5.7	7.25	灰釉(食入)、外腹下半斜傾		

第2表 登録遺物目録(2)

1.b. 施釉陶器(2)

登録番号	形	出区名	出土場所名	出回年号	写真番号	地	上	下	施	基	特	記	
7	壺	7T	SR-1	1-2号	26-16	2-3				(9.3)			
8	壺	7T	SR-1	3号	29-3	6-9	型	12.0	8.8	3.0	施釉		
9	壺	7T	SR-1	3号	29-1	-	選	18.0	11.3	3.4	施釉、把手の部分二穴あり、内面擦傷あり		
10	壺	7T	SR-1	3号	29-2	6-10	選	9.1	2.5	施釉、把手の部分二穴あり、口口つま			
11	壺	7T	SR-1	3号	29-6	6-11	型	13.4	11.3	3.3	施釉、把手部分二穴あり		
12	壺	7T	SR-1	3号	29-4	-	選	-	-	-	施釉、把手部分にスス付着。底部外曲強調あり		
13	壺	7T	SR-1	3号	29-5	7-15	壠	13.0	11.1	2.55	施釉、全体外曲強調あり		
14	壺	7T	SR-1	3号	31	2-4	10	選	29.4	15.0	29.7	施釉、表面に粘土・板土・泥れ毛口はそのみ先端部に上部に削る跡	
15	壺	7T	SR-1	3号	31	6-7	-	29.8	21.8	13.7	施釉、15年左辺の口口あり、表面に泥れ毛口あり、口口あり		
16	壺	7T	SR-1	3号	31-5	6-8	相	31.0	22.4	16.15	施釉、15年左辺の口口あり、表面に泥れ毛口あり		
17	壺	7T	SR-1	3号	31-6	6-5	相	31.8	20.8	16.9	施釉、12年左辺の口口あり、表面に泥れ毛口あり		
18	壺	7T	SR-1	3号	-	-	-	-	-	-	施釉、6年左辺の縦割れあり		
19	?	7T	SR-1	3号	29-2	5-9	-	15.5	(4.7)	3.7	施釉、内外面に豊かな表面がある		
20	灰陶	L	SR-1	3号	28-16	7-16	-	7.6	5.8	3.7	施釉、内外面に豊かな表面がある		
21	壺	7T	SR-1	3号	20-17	8-4	-	-	-	(8.69)			
22	壺	?	SR-1	3号	26-2	8-2	壠	8.6	(2.2)	3.0	施釉、質入、足辺に泥れあり、高台に浮き感あり		
23	瓦	7T	SR-1	3号	26-10	8-14	-	11.9	(6.0)	5.0	施釉、瓦入		
24	瓦	7T	SR-1	3号	26-4	8-15	壠	9.8	(1.7)	3.0	施釉、質入、底板網状切欠		
25	瓦	7T	SR-1	3号	21-2	2-4	相	12.0	4.7	5.0	施釉、外表面に文、高台内無隙		
26	瓦	7T	SR-1	3号	24-6	-	-	13.8	1.7	3.6	施釉、外表面に文、高台内無隙		
27	瓦	7T	SR-1	3号	24-3	-	-	22.0	7.3	3.95	施釉、質入、内外面に豊かな表面がある		
28	瓦	7T	SR-1	3号	26-7	3-13	-	9.0	3.4	2.3	施釉、内外面に豊かな表面があり、土台あり		
29	瓦	7T	SR-1	3号	25-6	5-14	壠	13.9	4.4	4.05	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面があり、土台あり		
30	瓦	7T	SR-1	4号	25-5	5-14	相	8.8	3.4	2.05	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面があり、土台あり		
31	瓦	7T	SR-1	4号	25-6	6-11	相	8.8	3.4	2.05	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面があり、土台あり		
32	瓦	7T	SR-1	4号	25-1	1-9	相	8.0	3.3	2.6	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面があり、土台あり		
33	瓦	7T	SR-1	3号	21-4	-	相	8.0	3.3	2.6	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面があり、土台あり		
34	瓦	7T	SR-1	3号	21-3	-	相	8.8	3.5	4.9	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面があり、土台あり		
35	瓦	7T	SR-1	3号	21-5	-	相	8.8	3.8	3.8	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面があり、土台あり		
36	瓦	7T	SR-1	3号	21-2	-	相	8.6	(5.3)	5.3	施釉、瓦入、くぼみあり		
37	瓦	7T	SR-1	3号	21-1	3-5	相	9.2	3.0	5.45	施釉、質入、内外面に豊かな表面があり、土台あり		
38	瓦	7T	SR-1	3号	21-8	2-13	相	9.2	3.3	4.9	施釉、質入、外表面に沈黙模様、瓦入、高台内無隙		
39	瓦	7T	SR-1	3号	21-6	-	相	9.4	3.4	5.3	施釉、体表面に文様あり、高台内無隙		
40	瓦	7T	SR-1	3号	28-8	5-12	-	-	4.3	(2.35)	施釉、底板網状切欠		
41	瓦	7T	SR-1	3号	28-11	5-11	-	-	4.2	(1.8)	施釉、底板網状切欠		
42	瓦	7T	SR-1	2号	28-7	5-14	-	6.0	4.8	5.95	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面あり		
43	瓦	7T	SR-1	2号	28-3	5-16	-	5.0	3.7	5.8	施釉、底板網状切欠		
44	水滴	7T	SR-1	3号	28-14	5-7	相	9.8	5.5	5.8	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面あり、高台内無隙		
45	水滴	?	SR-1	3号	28-2	-	-	-	12.6	(3.9)	外表面に凹、切り口有り		
46	水滴	7T	SD-9	2号	20-6	6-8	-	-	12.6	12.2	16.2	施釉、10年左辺の口口、底板網状切欠、片口あり	
47	水滴	7T	SD-9	2号	31-1	4-8	相	36.0	13.0	18.55	見込み部削毛端の上に横と縦の文様小豆底板網口口		
48	瓦	7T	SR-1	4号	31-3	4-9	相	36.0	-	-	施釉第一		
49	瓦	7T	SR-1	4号	20-15	7-17	-	-	(7.05)	施釉			
50	瓦	7T	SR-1	4号	27	11	-	-	11.2	3.2	(1.95)	施釉	
51	瓦	7T	SR-1	4号	28-1	3-11	-	-	8.0	5.8	10.3	施釉、底板網状切欠二度、丸めています。底板網状切欠	
52	瓦	7T	SR-1	4号	30-3	5-8	-	9.4	5.8	10.3	施釉、底板網状切欠二度、丸めています。底板網状切欠		
53	瓦	7T	SR-1	4号	30-1	4-11	相	16.0	8.0	7.3	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面あり		
54	瓦	7T	SR-1	4号	23-1	6-3	相	15.4	7.2	9.5	施釉、瓦入、内外面に豊かな表面あり、高台内無隙		
55	瓦	7T	SR-1	4号	22-1	6-1	相	20.6	7.0	10.0	施釉、高台内に文字模様「丁子」字、高台内無隙底板網に削る口口		
56	瓦	7T	SR-1	4号	27	3	相	10.0	(5.35)	口口の一部に削る底板網に削る口口			
57	瓦	7T	SR-1	4号	22-2	3-2	相	13.6	3.3	3.7	施釉、高台内に削る底板網に削る口口		
58	土	灰	7T	SR-1	4号	28-12	5-6	相	6.8	(9.85)	施釉、外表面に底板網状切欠		
59	瓦	7T	SR-1	4号	33-10	2-3	相	12.0	5.8	10.3	施釉、内外面に豊かな表面あり、高台内無隙		
60	瓦	7T	SR-1	4号	33-19	-	相	5.8	6.35	1.00	高台の自然断面		
61	瓦	7T	SR-1	4号	33-18	2-13	相	10.3	4.4	7.2	施釉(瓦入)、高台内無隙、底板網に削る口口		
62	瓦	7T	SR-1	4号	25-1	4-4	相	31.3	7.4	4.9	施釉、瓦入に文字模様、高台内無隙、高台内無隙		
63	瓦	7T	SR-1	4号	24-1	4-5	-	22.3	7.6	4.3	施釉、瓦入に文字模様、瓦入に文字模様、瓦入に文字模様		
64	瓦	7T	SR-1	4号	25-3	4-2	相	17.2	9.6	1.8	施釉、削る口口、削る口口、高台内無隙、高台内無隙、瓦入に文字模様をもつていています		
65	瓦	7T	SR-1	4号	24-2	4-6	相	13.0	8.3	3.7	施釉、高台内に削る底板網に削る口口		
66	瓦	7T	SR-1	4号	25-4	-	相	14.2	5.1	3.5	施釉、瓦入に文字模様、高台内無隙		
67	瓦	7T	SR-1	4号	25-5	3-9	相	12.6	4.7	3.4	施釉(瓦入)、高台内無隙		
68	瓦	7T	SR-1	4号	24-4	4-1	相	12.9	4.0	3.6	施釉、山文式、高台内無隙、高台内無隙		
69	瓦	7T	SR-1	4号	25-5	3-11	-	13.0	7.4	3.35	施釉、高台内無隙、高台内無隙、瓦入に文字模様、瓦入に文字模様		
70	瓦	7T	SR-1	4号	24-5	4-5	相	13.3	7.3	3.6	施釉、山文式、瓦入に文字模様をもつていています		
71	蓋物	7T	SR-1	4号	27-13	-	-	7.0	7.4	2.2	施釉(瓦入)、瓦入、瓦入、瓦入		
72	丸瓦	7T	SR-1	4号	26-8	3-8	相	9.3	9.3	3.0	施釉(瓦入)、瓦入、瓦入に文字模様		
73	瓦	7T	SR-1	4号	26-3	-	相	12.0	3.2	3.5	施釉(瓦入)、瓦入内無隙、瓦入に文字模様		
74	瓦	7T	SR-1	4号	-	-	相	-	-	-	施釉(瓦入)		
75	瓦	7T	SR-1	4号	23-22	2-3	相	9.6	4.8	5.6	施釉、外表面に文様(簪文か)、瓦入點、瓦入内無隙		
76	瓦	7T	SR-1	4号	23-14	-	相	8.9	3.4	5.4	施釉、高台内に文字模様		
77	瓦	7T	SR-1	4号	23-16	-	相	8.7	3.2	5.1	施釉(瓦入)、瓦入底板網に削る口口(底板網あり)、瓦入内無隙		
78	瓦	7T	SR-1	4号	23-24	-	相	9.4	3.95	5.4	施釉、高台内無隙、高台内文字「丁子」		

第3表 登録遺物目録(3)

I.b. 施釉陶器(3)

登録番号	西形	地名	出土場所名	発掘調査年	考古番号	施	施	施	施	施	施	施
79	劍	7T	SR-1 4層	22-11		相馬	8.95	4.2	5.3	5.3	5.3	5.3
80	研	7T	SR-1 4層	22-17	2-15	相馬	9.3	3.5	5.5	5.5	5.5	5.5
81	鏡	7T	SR-1 4層	22-9	1-8	相馬	7.5	3.1	5.4	5.4	5.4	5.4
82	鏡	7T	SR-1 4層	22-13	1-14		9.0	3.5	5.8	5.8	5.8	5.8
83	鏡	7T	SR-1 4層	22-26	3-6	相馬	7.55	3.5	5.5	5.5	5.5	5.5
84	鏡	7T	SR-1 4層	21-12	1-15	相馬	8.9	3.5	5.8	5.8	5.8	5.8
85	鏡	7T	SR-1 4層	22-8	2-9	相馬	8.0	9.7	5.75	5.75	5.75	5.75
86	鏡	7T	SR-1 4層	22-10	2-14	相馬	8.2	3.9	5.8	5.8	5.8	5.8
87	鏡	7T	SR-1 4層	23-8	2-2	相馬	12.9	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5
88	鏡	7T	SR-1 4層	23-9	2-7	相馬	16.4	3.8	6.4	6.4	6.4	6.4
89	鏡	7T	SR-1 4層	21-13	3-1	相馬	10.8	3.0	6.4	6.4	6.4	6.4
90	鏡	7T	SR-1 4層	22-4	1-6	相馬	9.0	3.4	5.5	5.5	5.5	5.5
91	鏡	7T	SR-1 4層	22-12		相馬	9.0	3.05	4.7	4.7	4.7	4.7
92	鏡	7T	SR-1 4層	22-1	1	相馬	10.1	3.55	5.5	5.5	5.5	5.5
93	鏡	7T	SR-1 4層	22-16	1-7	相馬	8.7	3.4	4.7	4.7	4.7	4.7
94	鏡	7T	SR-1 4層	22-14	2-17	相馬	9.0	3.0	4.9	4.9	4.9	4.9
95	鏡	7T	SR-1 4層	22-13	2-10	相馬	8.1	2.6	4.8	4.8	4.8	4.8
96	鏡	7T	SR-1 4層	22-3	1-15	相馬	10.1	3.8	5.5	5.5	5.5	5.5
97	鏡	7T	SR-1 4層	21-15	2-6	相馬	9.4	3.5	5.4	5.4	5.4	5.4
98	鏡	7T	SR-1 4層	22-5	1-3	相馬	9.6	3.3	5.4	5.4	5.4	5.4
99	鏡	7T	SR-1 4層	21-19	3-4	相馬	10.4	3.8	5.3	5.3	5.3	5.3
100	鏡	7T	SR-1 4層	21-9	1-16	相馬	7.85	2.7	4.35	4.35	4.35	4.35
101	鏡	7T	SR-1 4層	21-11	1-2	相馬	9.85	3.0	4.85	4.85	4.85	4.85
102	鏡	7T	SR-1 4層	26-6	5-13		7.6	4.5	6.5	6.5	6.5	6.5
103	鏡	7T	SR-1 4層	26-5	5-15			3.2	(5.9)	(5.9)	(5.9)	(5.9)
104	鏡	7T	SR-1 4層	27-14	5-3	相馬						
105	鏡	7T	SR-1 4層	27-8	2-7	相馬	5.2	2.2	3.5	3.5	3.5	3.5
106	鏡	7T	SR-1 4層	22-1	1-12	相馬	7.85	3.0	3.5	3.5	3.5	3.5
107	鏡	7T	SR-1 4層	22-21	3-7	相馬	7.0	3.05	3.6	3.6	3.6	3.6
108	鏡	7T	SR-1 4層	27-12	5-2	相馬		3.2	(3.3)	(3.3)	(3.3)	(3.3)
109	鏡	7T	SR-1 4層	28-7	9-4			7.2	2.0	2.0	2.0	2.0
110	鏡	7T	SR-1 4層	22-2	1-1	相馬	9.7	3.6	3.0	3.0	3.0	3.0
111	鏡	7T	SR-1 4層	22-9	5-5	相馬	6.95	2.4	3.4	3.4	3.4	3.4
112	鏡	7T	SR-1 4層	22-7	2-6		7.3	3.4	6.3	6.3	6.3	6.3
113	鏡	7T	SR-8 4層	26-4				6.4	(4.0)	(4.0)	(4.0)	(4.0)
114	鏡	7T	SR-8 4層	26-15	7-1	相馬	9.4	6.65	1.8	1.8	1.8	1.8
115	鏡	7T	SR-1 4層	29-10				8.4	(3.5)	(3.5)	(3.5)	(3.5)
116	鏡	7T	SR-1 4層	22-11	3-3	相馬	9.85	2.9	4.6	4.6	4.6	4.6
117	鏡	7T	SR-1 2層									
118	鏡	7T	SR-1 2層									
119	鏡	7T	SR-1 2層									
120	鏡	7T	SR-1 2層									
121	鏡	7T	SR-1 2層									
122	鏡	7T	SR-1 2層									
123	大鏡	7T	SR-1 2層上部									
124	鏡	7T	SR-1 3層									
125	鏡	7T	SR-1 3層									
126	土鏡	7T	SR-3 1年									
127	土鏡	7T	SR-3 1年									
128	土鏡	7T	SR-3 1年									
129	土鏡	7T	SR-3 1年									
130	土鏡	7T	SD-8 3層	30-5	5-17		4.1	2.2	4.3	4.3	4.3	4.3
131	土鏡	7T	SD-8 5層	28-1	7-3		13.8	10.0	6.9	6.9	6.9	6.9
132	土鏡	7T	SR-1 5層	25-1	2-1		8.4	2.6	5.5	5.5	5.5	5.5
133	土鏡	7T	SR-1 5層	25-2	2-1							
134	土鏡	7T	SR-1 5層	25-4								
135	土鏡	7T	SR-1 5層	25-3	2-8		7.3	3.2	4.4	4.4	4.4	4.4
136	土鏡	7T	SD-8 5層	25-1	2-1							
137	土鏡	7T	SD-8 5層	25-2	2-1							
138	土鏡	7T	SD-8 5層	25-4	2-1							
139	土鏡	7T	SD-8 4層	25-8								
140	土鏡	7T	SD-8 2層	25-10								
141	大鏡	7T	SD-8 2層	25-11								
142	鏡	7T	SR-1 3層	26-1								
143	鏡	7T	SD-8 2層	27-4	8-7			6.0	(3.0)	(3.0)	(3.0)	(3.0)
144	鏡	7T	SD-8 2層上部	27-6	2-12	相馬	10.45	4.5	6.9	6.9	6.9	6.9
145	鏡	7T	SD-8 2層上部	27-2								
146	鏡	7T	SD-8 2層上部	27-4								
147	鏡	7T	SD-8 2層上部	27-7								
148	鏡	7T	SD-8 2層上部	27-8								
149	鏡	1T		30-6			7.2		(7.8)	(7.8)	(7.8)	(7.8)
150	鏡	1T										
151	鏡	1T										
152	土鏡	1T										
153	土鏡	1T										
154	土鏡	1T										
155	土鏡	1T										
156	土鏡	1T										
157	土鏡	1T										
158	土鏡	1T										

第4表 登録遺物目録(4)

I.b. 施釉陶器(4)

登録番号	器 形	地名	出土遺物名	実測番号	参考番号	底	口	高	径	書 名	特 徴	
160	壺	7T	高台								全体表面に均勻釉あり	
161	甕	5T	高台								年数あり	
165	壺	7T	高台								油瓶、柄の部分に灰土層上にあり	
167	甕	7T		26-6	3-10	青	深	31.5	4.2	3.2	黒火鉢、枝輪ハサ、舌台一基内火鉢	
168	甕	7T	高台	27-3	6-2	青			8.8	(6.3)	口沿部分に粘土層あり、山台船一基一舌台内火鉢	
172	甕	7T	高台								輪底鉢、内面入火付着	
173	甕	1T	高台								輪底鉢、内面入火付着	
174	甕	7T	高台								輪底鉢	
175	甕	7T	高台								輪底鉢	
177	甕	7T	丁原								輪底鉢	
179	甕	7T	1号	27-7	5-6	青	10.8	2.8	1.4 (1.2)	去底火鉢、表面鉄継ぎ、つまみあり高脚輪		
						分厚1.3			4.0			
180	甕	7T	丁原								輪底	
181	甕	7T	ペルカ2号								輪底	
182	大 甕	7T	8号		5-7	青	深				底踏歩	
183	甕	7T	1C号								輪底、スヌ付着	
184	甕	7T	8号	20-18	8-18	青	10.8	2.8	1.4 (1.2)	去底火鉢、表面鉄継ぎ、つまみあり高脚輪		
						分厚1.3			4.0			
185	甕	7T	8号		1-12	青	8.8				底踏歩、外側、内面火鉢一基より施釉(鉢底)	
186	甕	7T	SR-1 6号	23-7	1-5	青	馬	10.0	3.6	5.2	底踏歩、外側斜め(鉢底)、旋紋あり、内面火鉢部より施釉し、高脚外内火鉢	
187	甕	7T	SD-8 4号	23-5					11.3	(3.4)	口沿部斜めの設計分け、背面施釉	
188	甕	7T	SR-1 6号	28-19						14.35		
189	甕	7T	SR-1 3号	26-1						10.7	(4.0)	外側火鉢、外側、内面鉄継ぎ、背面施釉

J. 瓷 器(1)

登録番号	器 形	地名	出土遺物名	実測番号	参考番号	種類	产地	半	代	山 横	高 底	特 徴
1	盤	7T SR-1 1号		10-11		青白	青白					
2	碗 口	7T SR-1 2号				油付	青白・油付(鉢)					青白文、高台内火縁あり
3	碗	7T SR-1 2号				油付	青白・油付(鉢)					外側に墨、墨文、ラの文あり、高台内火縁あり「吉野口」
4	碗	7T SR-1 3号				油付	青白・油付(鉢)					青白文、内面火縁あり
5	碗 口?	7T SR-1 3号				油付	青白・油付(鉢)					外側文、内面火縁
6	小 盆	7T SR-1 3号				油付	青白・油付(鉢)					外側文、火文?見込部分火縁あり
7	碗	7T SR-1 3号				油付	青白・油付(鉢)					口縁部に火文
8	碗	7T SR-1 3号				油付	青白・油付(鉢)					豆文字、見込部分火縁あり
9	角 盆	7T SR-1 3号	34-7			油付	青白・油付(鉢)					2.2 外側墨文、見込部分印刷?
10	碗	7T SR-1 4号	32-3	9-3	9-10	油付	油付					墨文
11	碗	7T SR-1 4号	32-6	9-6	9-6	油付	油付			7.0	3.6	5.15 文様あり、東八脚部分に豆文字
12	碗	7T SR-1 4号	32-3	9-5	9-5	油付	油付			10.3	4.1	5.1 墨文、西南に火文の模様あり、「印」もおか子
13	碗	7T SR-1 4号	33-12	9-8	9-8	油付	油付			11.0	4.8	5.15 豆文字。スヌ付着
14	皿	7T SR-1 4号	33-11			油付	油付			13.8	7.2	2.95 墨文
15	大 盆	7T SD-8 4号				油付	油付					墨文
16	碗	7T SR-1 4号	32-8	9-9	9-2	油付	油付			9.9	3.6	5.45 墨文
17	碗	7T SR-1 4号	32-9			油付	油付			8.0	3.9	5.5 墨文
18	碗	7T SR-1 4号				油付	油付					墨文、見込部分に火文
19	碗	7T SR-1 4号				油付	油付					外側文
20	碗	7T SR-1 4号	34-3	3-12	油付	油付				13.3	7.2	3.5 文字あり「山形落葉」印下印跡「1B-48」印記と墨
21	碗	7T SR-1	32-7	9-1	9-1	油付	油付			11.3	4.1	6.2 見込部分に墨の火文
22	碗	7T SR-1 4号	33-1	9-5	9-5	油付	油付			9.4	4.1	5.35 墨文、見込部分に火文、高台内火縁あり「口」
23	皿	7T SR-1 4号	34-2	9-13		油付	油付			15.3	8.2	2.5 火文文、見込部分火文
24	碗	7T SR-1 4号				油付	油付					外側文様あり
25	碗	7T SR-1 4号	9-7			油付	油付					豆文字、墨台内火文あり「天明年製」
26	皿	7T SR-1 4号	34-5			油付	油付	17 c		13.8	7.8	3.05 墨文
27	皿	7T SR-1 4号	34-6			油付	油付			19.4	6.0	3.3 見込部分火文あり「柳葉紋」印下印跡「1B-48」印記と墨
28	碗 口	7T SR-1 4号	33-8			油付	油付			9.4	7.8	3.0 外側、墨と墨の火文、印押
29	豆皿	7T SR-1 4号	33-3			油付	油付			4.2	(2.7)	
30	皿	7T SR-1 4号	34-1	9-12		油付	油付			12.6	7.0	(3.65) 墨文文、見込部分豆文字火文、底部鉢跡「高台内文字」
31	皿	7T SR-1 4号	33-4	10-1		油付	油付	18 c		1.5	5.1	14.6 墨文
32	皿	7T SR-1 4号	34-4	9-4		油付	油付			12.6	7.5	3.5 墨文文、MURANOガラス文、高台内文字あり「山形落葉」
33	皿	7T SR-1 4号				油付	油付			7.0	3.6	6.6 見込部分墨文
34	碗	7T SR-1 6号				油付	油付			7.0	3.6	6.6 口縁印刷文
35	碗	7T SD-8 2号上	33-7			油付	油付			7.0	3.6	6.6 口縁印刷文
36	碗	7T SD-8 2号上				油付	油付					

第5表 登録遺物目録(5)

J. 磁 鋼 (2)

登録番号	部	部品名	出土遺物名	実測寸法	写真番号	頭寸	高さ	年	汽	山形	新潟	福島	群馬	静	滋	
37	7T	SD-8	2号	30-7	青磁											
38	7T	SD-8	2号	30-8	A付											
39	鏡	7T	SD-8	6.4号	30-12	青磁										
40	7T	SD-8	2号	30-9	青磁											
41	7T	SD-8	4号	30-14	A付											
42	7T	SD-8	2号	30-10	青磁											
43	柱頭口	7T	SD-8	3号	33-14	30-20	肥前		2.3	0.6	1.3					
44	7T	SD-8		30-15	青磁											
45	7T	SD-8	4号	30-15	青磁											
46	7T	SD-9	3号	30-19	青磁											
51	7T	直c	2号	30-27	青磁											
52	7T	直c	2号	30-36	青磁											
53	7T	直c	2号	30-18	青磁											
54	修	7T	5号-1	直筒	33-16	9-9	函台	瓦前	13.8	7.5	4.73	高文、高足、高筒、函台部分長手有り、高台内空室あり、(○)年製				
55	瓶	7T	SD-9	直筒			函付									
56	仙飯器	7T	SR-1	2号	33-9	10-4	函付									
57	甕 口	7T	SR-1	2号	33-15					5.7	3.1	3.3	灰釉、函台内無釉			
59	甕	7T	SR-1	2号	32-1					13.6	5.6	7.7	外沿一高脚單耳			
60	甕	7T	SR-1	3号	32-4	9-11					13.3	5.9	6.2	外沿一高脚單耳又あり、真人、裏込深コシニア類		
62	仙飯器	7T	SR-1	1号	33-2	10-3	函付					3.8	(4.7)	外側伸縮又あり並列脚スス付器		
63	甕	7T	SR-1	1号	33-10	10-2	函付					4.7	(6.3)	外側伸縮又花文		
64	甕 口	7T	SR-1	1号	33-5	10-6	平手木	喜多一高脚四脚	8.2	3.25	2.3	型打、内面文様み				
65	甕	7T	SD-8	4号	33-6		函付	明治初期	9.7	3.6	3.4	高文、高内内虹アラジン(スタンプ)				
66	甕 ?	5T	素 土							12.0	5.0	3.6	高文、門檻部にくびれ、裏込間にスス行書。見			
67	甕 ?	7T	素 土	34-8		函付					8.6	(2.9)	窄文、高文、足込部端土片あり			
68	甕	6T	9号石付	2号			函付				13.3	4.0	4.3	印押		
69	甕 口	7T	SR-1	1号	23-18	10-5	函付							寅蛇、高内内虹アラジン(スタンプ)喜多文		

N. 土 師 質 土 器

登録番号	部	地区名	出土遺物名	実測寸法	写真番号	口径	底径	高さ	特				備	
									外	内	蓋	底		
D-1	7T	SR-1	3号	35-22		11.6							1/2	
2	灯明器	7T	SR-1	2号	35-19	10-31	4.8	2.65	1.2	平口ス	スス付蓋	同軸木柄	はね定形	
3	灯明器	7T	SR-1	3号	35-2		5.45	3.45	1.52		しん立であり		1/2	
4	灯明器	7T	SR-1	3号	36-13	10-26	6.1	3.5	1.55	スス付蓋	同軸木柄	はね定形		
5	灯明器	7T	SR-1	1号	36-4	10-26	6.1	3.2	1.7	口輪部フワ付蓋	同軸木柄	はね定形	1/2	
6	灯明器	7T	SR-1	3号	36-8	10-30	6.2	3.5	1.4	スス付蓋	同軸木柄	はね定形		
7	7T	SR-1	4号	26-1	10-22	10.1	5.4	1.45		同軸木柄	はね定形	1/2		
8	灯明器	7T	SR-1	4号	36-11	10-27	6.5	3.96	1.83	笛ス付蓋	同軸木柄	はね定形	1/2	
9	灯明器	6T	10号直面	2号	35-6	10-29	5.8	3.8	1.6	スス付蓋	スス付蓋	同軸木柄	はね定形	
10	灯明器	7T	SR-1	1号	36-3		6.6	3.6	1.83		同軸木柄	はね定形	1/2	
11	灯明器	7T	SR-1	4号	36-5		6.4	3.0	1.5		同軸木柄	はね定形	1/2	
12	灯明器	7T	SR-1	1号	36-7	10-28	5.2	2.85	1.45	口輪部スス付蓋	見込み、スス付蓋	同軸木柄	はね定形	
13	灯明器	7T	SR-1	3号	35-3		3.8				同軸木柄	はね定形	1/2	
14	灯明器	7T	SD-1直面	3号		5.6	2.9	1.45	スス付蓋、一部斜面	スス付蓋	スス付蓋、同軸木柄	はね定形のみ		
15	灯明器			36-12		6.3	3.7	1.6	口輪部スス付蓋		同軸木柄	1/2		
16	灯明器			36-10	10-23	6.65	3.75	1.9	スス付蓋	1.6cmであり、スス付蓋	スス付蓋、同軸木柄	1/2		
17	灯明器	2T	素 土	36-9		6.1	3.2	1.8	口輪部スス付蓋		同軸木柄	はね定形		
18	灯明器	3T	素 土	35-1		5.9	3.8	1.5			同軸木柄	1/2		
19				35-11			3.95					底部のみ		
20	灯明器	6T	素 土	36-6		7.3	3.65	2.1	スス付蓋	スス付蓋	スス付蓋、同軸木柄	1/2		
21	灯明器	6T	9号直面	2号	36-7		6.6	3.3	1.7	スス付蓋	スス付蓋	スス付蓋、同軸木柄	1/2	
22	灯明器			36-2	10-24	6.7	3.6	1.65	口輪部スス付蓋		同軸木柄	1/2		
23	7T	SR-1	4号	35-8			4.5							

B. 弥 生 土 器

登録番号	部	地区名	山十遺構名	実測寸法	写真番号	口径	底径	高さ	特	備
B-1	鉢	7T	SR-1	3号	65-1					

第6表 登録遺物目録(6)

C. 土器

登録番号	形	地区名	出土地名	口 径	外 壁	内 面
1	鉢	?	5丁	35-4	(6.1)	ナ デ シガキ

E. 瓢 惠 器

登録番号	形	地区名	出土地名	実測径番号	口 径	高	外 壁	内 面	規	石
1	縦	?	5R-1	4号	35-5	(7.8)	(3.3)	ロ クロ ロ ク ナ	34	
2	縦	?	SD-9	3号						
3	縦	?	SR-1	4号				平行印を撰 平行印を撰 あて透視法		

F. 軒 丸 瓦

登録番号	地区名	出土遺構名	実測径番号	写真番号	当得	全長	主理長	外 壁			規	考
								色	巴紋	筋肉		
1	3T		37-1	12-1	12.5	34.3	5.6	7.2	3	左	1.7	縫文 1.6 1.4
2	3T	壁 墓	37-5	12-2	9.4			7	2	右	1.2	1 0.5
3	3T	壁 墓	37-6	12-3	(9.0)			6.6	3	左	1.2	1.2 0.7
4	3T		37-7		(9.0)	(35.3)	(4.3)	6.8	3	右	1.1	1 0.75
5	3T	壁 墓	37-8	12-4	9.1	25.3	4.3	6.7	3	左	0.9	1 0.7
6	3T	壁 墓	38-2	12-5	(8.9)			6.7	3	左	1.2	1.1 0.7
7	3T	壁 墓	38-1	12-6	9.2			6.5	3	左	1.0	0.9 0.6
8	3T	壁 墓	38-3	12-7	9.1			6.8	3	左	1.0	1 0.7
9	3T		38-4		(8.6)			6.7	3	左	(1.1)	(0.3) 0.4
10	7T	塊 乱			39.2			3	左	0.9~ 1.1	1	0.4
11	3T		37-2					3	右	1.3	縫文 1.3	-1.3
12	3T		37-3					3.9	(左)	(1.5)	縫文	
13	3T											調査のみ後存
14	3T		37-4							1.4~ 1.8	縫文 1.6 1.5	
15	3T									1.5	1.8 1.3	
16	3T									1.6		
74	3T	土								縫文		
75	7T	土								1.4~ 2.1	縫文 2.3 0.15~ 0.2	
76	7T	土			8.1			4	3	左	1.4~ 1.6	0.3~ 0.6
77	3T	土									縫文	

F. 丸 瓦(1)

登録番号	地区名	出土遺構名	実測径番号	写真番号	平均径	全長	主理長	幅	規	考
37	3T		46-1		12~8	32.9	5.7	12.8		塊 乱、つり紐×2列、土縫あり
38	3T	塊 乱	46-2	41 7	12~9	33.0	5.5			
39	3T	塊 乱	46-3	41-2	12~10	34.8	5.4		13.0	
40	3T		39-4	42-1	15~2	31			12.4	
21	3T				21~11	32.6	6.0		(13.0)	
22	3T		41-1		13~1	31.5	5.2			
23	3T		40-5		13~3	33.95	5.85		(13.2)	玉縫部に釘穴あり
24	3T				13~3	32.1	6.0			
25	3T		40-7		13~4	32.7	5.2	13.5		縫合と直、つり紐×2列、土縫あり
26	3T				13~5	33.6	5.7		13.9	
27	3T		40-4	41-3	13~6	32.4	5.4		12.7	縫合に孔あり、直の少く、つり紐×2列、玉縫あり
28	3T				14~1	32.8	4.4		13.3	縫合と直、つり紐×2列、玉縫あり
29	3T		40-8		14~2					
30	3T				14~3	34.3	6.4		(13.3)	

第7表 登録遺物目録(7)

F. 丸 瓦(2)

登録番号	地区名	出土遺物名	実測図面号	拓本番号	写真番号	全 長	玉 縁 地	幅	備 考
31	6 T	10号石室奥土	40-6		14-4		4.3		四切き底、つり組×2列、玉縁複数に○脚突痕
32	3 T								
33	3 T				14-5	33.0	5.4		
34	3 T				14-6	33.8	5.3		
35	3 T						5.4		
36	3 T						5.7		
37	3 T						5.8		
38	3 T						5.7		
39	3 T		39-7				4.9		
40	3 T	櫻 亂							
41	3 T	皿 覆					4.7		
42	6 T	灰 土							
43	3 T								
44	3 T		39-11						
45	3 T	IV 屋							
46	3 T	飛 風							
47	3 T				15-1	33.0	5.4		
48	3 T		39-5		15-5				
49	3 T	皿 覆	39-12	41-4					四切き底、つり組×2列、玉縁複数
50	7 T	SD-5 35号							四切き底、つり組×(1)列、玉縁複数
51	3 T	IV 屋							
52	3 T								
53	3 T								
54	3 T								
55	3 T								
56	3 T								
57	3 T		39-6	41-6	15-3	24.4	4.4	9.8	四切き底、つり組×2列、玉縁あり
58	3 T		39-8		15-4	23.0	3.6		四切き底、つり組×2列、玉縁あり
59	3 T	IV 屋	39-9				3.6		
60	6 T	10号右側土土							
61	3 T								
62	3 T	III 屋							
63	3 T		39-3					(14.3)	
64	3 T		39-2					(15.1)	
65	3 T	III 屋	39-1	42-2			5.2		玉縁部前穴あり
66	3 T						5.0		玉縁部前穴あり
67	3 T		39-10	41-5			3.8		玉縁部前穴あり
68	3 T						5.0		玉縁部前穴あり
69	3 T								玉縁部前穴あり
70	3 T	櫻 亂							玉縁部前穴あり
71	3 T								玉縁部前穴あり
72	3 T								玉縁部前穴あり
73	3 T								玉縁部前穴あり
74	7 T	表 上							

G. 幹 平 瓦(1)

登録番号	特徴名	出土遺物名	実測図 面 号	実測合号	从当序	从当緒	実測序号	文様の 高 3	上 外 区	下 外 区	輪 幅	ズ 幅	備 考
1	3 T		43-1	16-1	27.5	(25.9)		1.6	1	1.5			玄文 縞--×2 上--3 下--3 計 08
2	3 T		43-3	15-6	34		2.8	0.4	1.7	1.8			玄文 縞--不規 上--7 下--7 計 06
3	3 T		43-4	15-7	28		1.6	0.4	1.3	0.9	1		玄文 縞--×2 上--2 下--6 計 30
4	3 T		43-7	15-8			1.8	0.3	1.6	1.1	0.9		玄文 縞--×2 上--6 下--6 計 24
5	3 T		43-5		27.5		1.9	0.5	1.25	1.2			玄文 縞--小斜 上--3 下--4 計(不明)
6	3 T		43-6				1.5	0.4		1.2	1		玄文 縞--3 上--4 下--4 計(不明)
7	3 T		43-7				2.1	0.3		1.2			玄文 不規 上--1 下--3 計(不明)
8	3 T		43-8				1.7	0.4		1.3	2		玄文 上--1 下--3 計(不明)
9	3 T		43-9	16-2	24	17.8			0.7	0.6	0.6		玄文なし
10	3 T		43-10	16-5	16	17.5	1.6		0.9	0.8	0.7		玄文なし 完全瓦身
11	3 T		43-11	16-6	2.0		1.4		0.7	0.9	0.8		玄文なし V字 瓦身
12	3 T		43-12		20		1.5		0.8	0.8	0.5		玄文なし 完全瓦身

第8表 登録遺物目録(8)

G. 軒平瓦(2)

登録番号	地区名	所土地権名	大廻回番号	写真番号	瓦出現	内寸法	文様の 有無	1.外区		2.外区		3.区		備 考
								年 代	文様	年 代	文様	年 代	文様	
12	3T	櫻 亂			23	1.5		0.8	0.5	4.1				既文なし
14	3T		43-13	16-3	2.5	1.6		1	0.8	0.7				既文なし
15	3T	SR-1 2層			15	1.3		1.3						既文なし
16	3T		43-14		21.5	1.4		0.5	1	0.8				既文なし

G. 平 瓦(1)

登録番号	地区名	山上遺構名	大廻回番号	写真番号	全長	広巾	狭巾	厚さ	備 考					
17	3T			44-1	16-6	25.7	26.0	25.2	2.1					
18	3T			45-3										
19	3T			44-2		27.1								
20	3T			44-3			(24.9)							
21	3T			45-1		25.8								
22	3T			45-2		25.8								
23	3T			45-4			(22)							
24	3T													2.2
25	3T													既子印き痕、織れ砂、バリ、格子印き痕压痕
26	3T													1.65
27	3T													2.2
28	3T													2.2
29	3T													1.6
30	3T													
31	3T													1.9
32	3T													
33	3T													
34	3T													1.7
35	3T													1.1
36	3T													2.2
37	3T													
38	3T													2.1
39	3T													2.1
40	3T													1.9
41	3T													1.9
42	3T													2.0
43	3T													2.2
44	3T													
45	3T													
46	3T													1.9
47	3T	櫻 亂												2.0
48	3T													
49	3T													
50	3T			45-2										
51	3T													1.9
52	7T	SD-9 1層												1.9
53	3T		46-1	16-7	(16.75)	(18.75)	19.3	1.8						
54	3T	櫻 亂			19.7									1.5
55	3T		46-3		18.2									1.6
56	3T													1.3
57	3T		47-1	17-3	18.8									1.85
58	3T	櫻 亂	47-4		19.1									1.7
59	3T		47-2	17-2	19.0									1.7
60	3T													既子印き痕、織れ砂、バリ、格子印き痕压痕
61	3T													1.5
62	3T													1.5
63	3T													1.7
64	3T													
65	3T													1.5
66	3T	櫻 亂												1.7
67	3T													1.7
68	3T													1.7

第9表 登録遺物目録(9)

G. 平 瓦(2)

登録番号	地区名	山土清標名	実測図番号	写真番号	全長	幅	厚さ	基	考
69	3T							1.7	
70	3T							1.6	
71	3T							1.4	
72	3T	飛瓦						1.5	
73	3T	瓦						1.4	
74	3T								
75	3T	飛瓦						1.5	
76	3T	瓦						1.4	
77	3T								
78	3T								
79	3T								
80	3T								
81	3T								
82	6T	瓦						1.2	斜穴が引かれている
83	3T								
84	3T								斜穴がある
85	3T								斜穴がある
86	3T								
87	3T		47-3	17-1				1.1	斜穴がある
88	5T								格子叩き痕、織れ目、格子叩き痕
89	3T								斜穴がある
90	3T								
91	3T								
92	3T								
93	3T								斜穴がある
94	3T								
95	3T								
96	3T								斜穴がある
97	3T								
98	7T	瓦	5D-9	1層				1.3	
					17-4				

H. 面戸瓦・切り隅瓦

登録番号	地区名	山土清標名	実測図番号	写真番号	広巾	厚さ	備	考
29	戸瓦	3T		49-1	18-6	10.0	2.6	端叩き痕、つり縫
30	戸瓦	3T		49-2	18-5	9.0	1.7	つり縫
31	戸瓦	3T		49-1	18-4	9.0	1.6	つり縫
32	戸瓦	3T		49-3	18-3	8.8	2.2	端叩き痕、つり縫
33	戸瓦	3T		49-2	18-2	10.5	1.3	つり縫
34	戸瓦	3T		49-3	18-1		1.4	
35	切り隅瓦	3T		50-3	18-9		2.5	斜穴がある。格子叩き
36	切り隅瓦	3T		50-4	18-8		2.2	斜穴がある
37	戸瓦	3T		50-5	18-7		1.8	端叩き痕
38	切り隅瓦	6T	表土	50-1	18-10		1.8	端叩き
39	平瓦	7T	1層				2.1	
40	切り隅瓦	6T	9号石版 1層	50-2	18-7		2.4	斜穴がある。格子叩き痕、端叩き
41	野矢瓦	7T	土					端叩き
42	宝塔	7T	1層					端叩き
43	平瓦	7T	SR 1層					現代瓦

H. 鬼 瓦(1)

登録番号	地区名	山土清標名	実測図番号	拓木番号	写真番号	備	考
1	3T		31-1		17-5	珠文帯、角2本、丸6本、円形刻印、北緯、斜穴	
2	3T	山土	31-2		17-6	H-1とほぼ同じ直文、三連丈夫共寄理	
3	3T		31-3		17-7	珠文帯、角7本、円形刻印、北緯、斜穴	
4	3T						
5	3T					目瓦	
6	3T					縞、角3本、斜穴、H-9と同一個体か	
7	3T					透、沈縞	
8	3T					心にめかみ、角、縞、沈縞	
9	3T					縞、円形刻印と沈縞	
10	3T			42-3		縞、円形刻印と沈縞、牙	

第10表 登録遺物目録(10)

H. 鬼瓦(2)

登録番号	地名	出土箇所名	東南西北	拓本番号	写真番号	備考
11	3 T					平底、鉢穴
12	3 T					板、朱文
13	3 T					石板、門形制夷
14	3 T					四脚、次輪
15	3 T					板、比較
16	3 T					板、円、波足
17	3 T					板、朱文
18	3 T					平底、円形制夷
19	3 T					板
20	3 T					平底、半
21	3 T					牙、比較
22	3 T					丸頭、凸唇制夷、波足
23	3 T					
24	3 T					角
25	3 T					角
26	3 T					角
27	3 T					角
28	3 T					縫合、朱文
42	3 T	I層	51-4		17-8	

K. 石製品

登録番号	種類	地名	出土箇所名	東南西北	写真番号	長さ	幅	厚さ	特徴
1	板石	7 T	SR-1 3層	53-1		16.5	6.2	5.1	
2	板 砂	7 T	SR-1 3層	44-3-2	付 17	21	10	3	7号牌
4	瓶	7 T	SR-1 1.2.3層	32					
5	瓶	7 T	SR-1 4層	52-1	18-17	12.7	5	20.5	
6	瓶	7 T	SR-1 5層	55-6	19-1				
7	瓶			52-2	18-21	13.25	7.25	1.65	
8	瓶	7 T	SR-1 6層	52-3	18-32	9.5	9.5	1.6	
9	高 石	7 T	SD-8 1層	33-3		11.05	3.6	3.1	
10	板 石	7 T	SD-8 2層	53-4		11.05	5.4	3.95	
12	瓶 砂			55-8	18-16			2.6	
17	基 石	7 T	SD-9 1層	55-9	18-15			2.9	
18	板 砂	1 T	SK-2	付3-3	付 18	25	16	3	8号牌
19	6 T	9号石瓶	黄土						
20				55-5	(55-6)	19.0	1.5	2.85	
21	砾 石	3 T	玉 土	53-2		12.3	4.35	3.75	
22		7 T	玉 土						
23	器 石	7 T	I層	55-10	18-14			2.1	
24	瓶	7 T	III層	52-4	18-13	10.55	6.35	1.6	
25	瓶	7 T	付1						
27		7 T	SR-1 3層						
28		7 T	SD-8 4層	55-7					
29		7 T		1層	55-4				
30	板 砂	7 T	SE-1 2層	付3-1	付-15	53	15	4	6号牌
31	板 砂	1 T	SK-2 滅廻	付3-4	付 19	34	26	7	2号牌
32	板 砂	1 T	SK-2 建土	付3-5	付20	8	6	0.8	10号牌
33	板 砂	7 T	SD-8 2層	付2-1	付-1	114	27	13	1号牌
34	板 砂	7 T	SD-8 2層	付2-2	付-3	134	21	20	2号牌
35	板 砂	7 T	SD-8 2層	付2-3	付-8	93	35	30	3号牌
36	板 砂	7 T	SD-8 2層	付2-4	付 10	77	38	26	4号牌
37	板 砂	1 T	SK-2 滅廻	付2-5	付-12	104	25	33	5号牌
38	基 石								
39		7 T	SR-1 3層						
40	板 砂	7 T	SR-1 5層	53-6	19-2	6.9	3.9	1.8	
41	板 砂	7 T	SR-1 4層	53-5	19-3	8.0	4.9	0.7	

第11表 登録遺物目録(11)

K. 石 磚

登録番号	器 形	地名	出 土	文 物	年 代	材 質	寸 法	記	ふくみ	*分山X番	*横幅口 a×b	施	考	
K- 3	柳枝形、火鉢	7 T	9.7m	37-3		Hg	8.4		**S1.27	6.9×2.5		馬	馬の形が跡あり、裏面に放射状の溝あれ。	
11	柳枝形、火鉢	7 T	2.9m	36-4	33-18	** (8)	Hg. 14.8	2.9	2.4	0.67	** 不規	3.3×?	馬	
12	柳枝形、火鉢	7 T	2.9m	36-1	53-21	**	Hg. (11.6) (9.3)		2.0	** 不規	4.6×?	馬	馬の形が跡あり、裏面に放射状の溝あれ。	
13	柳枝形、火鉢	7 T	2.9m	37-2		Hg	9.7					馬	馬の形が跡あり、裏面に放射状の溝あれ。	
14	柳枝形、火鉢	7 T			36-2	53-19	** △27	** Hg. 9.5	3.6	1.8	1.6	** 不規	3.0×?	馬
15	柳枝形、火鉢	7 T			37-1	53-20	** △25.6	** Hg. (8.3) (3.7)				溝無?	3.5×?	馬
26	柳枝形、火鉢	7 T	9.5m	36-3								馬	馬の形が跡あり、裏面に放射状の溝あれ。	

P. 土 製 品

登録番号	器 形	地名	山土遺物名	実測寸法	等高番号	特 徴	後
1	埴人形	1 T				女顔	
2	埴人形	7 T	SR-1 4層			麻糸(奥?)	
3	埴人形	7 T	SR-1 3層	56-3	10-32	〔一人舟〕 高さ18.8、幅10.0×6.9、厚さ0.6~1.3	
4	埴人形			58-2	11-13	僧帽(坐姿?) 高さ5.2、幅2.4×2.3、厚さ0.8	
5	埴人形	7 T	SR-1 3層	20-5	11-13	男顔、頭の部分黒、高さ(7.7)、幅4.95×3.5、厚さ0.5	
6	土 佛	7 T	SR-1 3層	59-12	11-17	高さ3.5、頭部3.1、孔径0.6 中に直径約1cmの土製の土玉が入っている	
7	土 佛	7 T	SR-1 3層	59-11	11-16	高さ(5.7)、直徑0.35、孔径0.8	
8	土 佛	7 T	SR-1 3層	59-10	11-16	高さ(5.75)、直徑0.35、孔径0.6	
9	埴人形	7 T	SR-1 3層	56-3	16-33	女人顔物語 高さ15.2、幅7.5×6.6、厚さ0.15~1.7	
10	埴人形	7 T	SR-1 3層	57-3	11-4	人丸腰の太腰持 高さ(8.3)、幅8.3×3.7、厚さ0.3~0.8	
11	埴人形	7 T	SR-1 3層	59-1	11-3	女人顔物語(一人舟) 高さ(8.8)、幅4.9~3.0、厚さ?	
12	埴人形			58-4	11-5	女顔 高さ(4.6)、幅4.8×4.1、厚さ0.7	
13	埴人形			58-2	11-6	女顔 高さ(4.5)、幅5.1×4.2、厚さ0.3~0.8	
14	埴人形	7 T	SR-1 3層	58-3	11-7	女顔 高さ(4.6)、幅4.0×3.8、厚さ0.4~0.6	
15	埴人形			58-6	11-14	扇吹 高さ(6.6)、幅4.4×2.7、厚さ0.4	
16	埴人形			58-3	11-9	女顔 高さ(4.7)、幅4.6×3.6、厚さ?	
17	埴人形			56-2	10-35	人形物語(舟) 幅28.0、厚さ18.8、高さ24.2~4.8、幅27.0、厚さ19.8、高さ21.2	
18	埴人形	7 T	SR-1 4層	57-2	11-1	女人顔物語(舟) 高さ(12.6)、幅7.8×4.2、厚さ0.4~0.5	
19	埴人形			57-1	10-34	女人顔物語(通寺) 高さ(12.1)、幅9.8×5.9、厚さ0.4~0.8	
20	埴人形	7 T	SR-1 4層	37-4	11-2	女人顔物語(通寺) 高さ(16.7)、幅6.5×11.4、厚さ0.3~0.8	
21	埴人形			59-4	11-12	大鳥形 高さ4.5、幅2.8×1.4、厚さ0.6~1.4	
22	埴人形	7 T	SD-8 2層	59-3	12-11	大鳥形 高さ4.2、幅3.4×1.3、厚さ0.55~1.3	
23	埴人形	7 T	SD-8 2層	50-9	17-18	魚(鱗?) 高さ3.3、幅14.5×9.9、厚さ0.4~1.2	
24	埴人形			59-6		船形 高さ(2.7)、幅6.0~2.05、厚さ?	
25	埴人形	7 T	SR-1 4層	58-1	11-8	女顔 高さ(7.0)、幅7.0~4.3、厚さ?	
26	埴人形			59-7	11-19	大? 高さ(3.9)、幅2.3×3.6、厚さ0.35	
27	埴人形	7 T	SR-1 4層	59-13	10-21	泥炉? スカット者 高さ(9.9)、直徑2.6~1.0、孔径0.2	
29	小瓶?			39-8		人形の下部(女)	
30	埴人形	7 T	SR-1 4C層			三ツ巴瓶	
31	埴人形	7 T	SR-1 4C層			花器?	
32	埴人形	7 T	SR-1 1層				
33	埴人形	1 T	SD-1 1層	60-1		高さ(14.5)、幅8×4.6、厚さ3.8	
34	埴人形	1 T	SD-1 1層				
35	埴人形	1 T	SD-1 1層				
36	埴人形	1 T	SD-1 1層				
37	埴人形	1 T	SD-1 1層				
38	埴人形	1 T	3分石塙 古土				
39	埴人形	2 T	古 土				
40	埴人形	7 T	SR-1 1層				

第12表 登録遺物目録(12)

L. 木 製 品

登録番号	形 状	地区名	出土遺物名	大湖調査号	写真番号	大きさ(単位)	幅	厚さ	特 徴
1	棒	?	7T	SR-1 3層	61-3	20-7	7.5	8.2	0.75
2	棒	?	7T	SR-1 3層	61-1	20-3	5.6	8.0	1.2
3	加工材	?	7T	SR-1 3層	61-4	20-9	5.6	3.5	0.9
4	加工材	?	7T	SR-1 3層	61-5	20-6	4.4	6.3	2.2
5	棒	?	7T	SR-1 3層	61-2	20-4	8.2	3.3	1.6
6	棒	?	7T	SR-1 3層	61-7	20-2	6.1	3.6	1.4
7	丸 棒	7T	SR-1 4層	62-9	20-19	11.0			
8	曲 物	?	7T	SD 8 5層	61-6	20-5	9.6	7.6	0.6
9	?	7T	SR-1 3層		20-8				
10	丸 棒	7T	SD 8	62-5	20-12	72.4	6.2		3角孔、三舟村、財度刻印、中央に幅1.2cm孔1.5の穴有り
11	加工材	?	7T	SK-1 2層	62-6	20-10	42.0	7.5	
12	丸 棒	7T	SD 8	62-8	20-15	37.3	6.1		2面孔、丸材、削度半分刻印、鉛錠有り
13	丸 棒	7T	SD 8	62-3	20-17	97.0	8.0		2面孔、丸材、削度残存
14	丸 棒	7T	SD 8	62-2	20-14	103.0	7.4		2面孔、円材、削度残存
15	丸 棒	7T	SD 8	62-1	20-13	108.8	8.6		4面孔、丸材、削度残存
16	丸 棒	7T	SD 8	62-4	20-18	76	7.6		4面孔、半丸材、削度残存
17	朱漆被覆の破片	7T	SR-1 4層	62-7	20-16	32.6	1.3		破片有り
18	朱漆被覆の破片	7T	SR-1 4層						
19	朱漆被覆の破片	7T	SK-1 4層		20-21				木質残存
20	火漆被覆の破片	7T	SR-1 3層		20-8				木質残存

N. 煙 管

登録番号	形 状	地区名	出土遺物名	大湖調査号	写真番号	大きさ	幅	厚さ	特 徴
1	煙管、細管	7T	SR-1 2層	63-6	19-20	4.8, 1.7	1.2, 0.75	0.05	木部残存
2	煙 管	7T	SR-1 2層	63-9		1.5	1.6	0.1	
3	煙 管	7T	SR-1 3層	63-3	19-18	3.0	1.5	0.1	
4	煙 管	7T	SR-1 4層	63-5	19-19	5.4	1.1	0.1	
5	煙 管	7T	SK-1 4層	63-12	19-22	(4.4)	0.85	0.05	木部残存
6	煙 管	7T	SR-1 5層	63-14	19-23	5.1	1.3	0.05	
7	煙 管	7T		63-4	19-14	4.55	1.15	0.1	
8	煙 管	7T		63-2	19-15	4.65	1.3	0.1	
9	煙 管	7T		63-1	19-13	5.9	1.3	0.1	
10	煙 管	7T	SD-8 2層	63-8	19-16	5.9	1.1	0.05	
11	煙 管	7T		63-12	19-27	6.7	2.2	0.1	木部残存
12	吸口、煙管	7T	SD-8 4層	63-13	19-25	5.7(2.0)	1.20, 0.95	0.10, 0.2	木部残存
13	吸 口	7T		63-11	19-24	7.75	0.9	0.05	
14	吸 口	7T		63-16	19-23	(4.8)	0.8	0.05	
15	煙 管	7T		63-7	19-17	4.7	1.15	0.05	
16	煙 管	7T		63-10	19-26	(4.6)	1.2	0.1	

N. 金 屬 品(1)

登録番号	形 状	地区名	出土遺物名	大湖調査号	写真番号	大きさ	幅	厚さ	特 徴
4	針	7T	SR-1 2層						針頭あり
5	?	7T	SR-1 3層						
6	針	7T	SR-1 3層	64-1	19-68	11.9	0.6	0.6	針頭あり
7	針	7T	?		19-67	3.35	0.3	0.3	針頭あり
9	針	7T	SR-1 4層	64-5	19-60	5.1	0.3	0.2	針頭あり
11	?	7T	SR-1 4層	64-10		4.7	1.3	0.1	
12	針	7T							
13	針	7T							針頭あり
14	?	7T			19-62	12.05	1.3	0.1~0.4	
15	?	7T							
16	?	7T							穴あり
17	?	7T	SR-1 4層上部		19-61				
21	釘	7T	SK-1 SD-8 6層				0.7	0.9	歯がりの内側長さ6.6
22	釘	7T	SR-1 6層	64-3	19-65	6.9	0.4	0.35	

第13表 登録遺物目録(13)

N. 金属製品(2)

登録番号	器 形	地区名	出土遺物名	文書番号	写真番号	長	幅	厚	特 徴
23	鉗	7T	SR-1 6層	64-6	19-66	4.4	0.45×0.6		釘頭あり
24	鉗	7T	SR-1 6層			3.6	0.7×1.1		
27	鉗	7T	SD-8 2層			3.4	0.45×0.7		
28	鉗	7T			19-64	6.1	0.35×0.85		
29	鉗	7T			19-63	6.9	0.6×0.6		
31	?	7T							
32	鉗 ?	7T							
33	鉗 ?	7T							
34	?	7T	SD-8 2層上面	64-11				0.05	
36	耳 か ざ	7T	SD-8 4層	64-16	19-5	6.65	0.35×0.85	0.15~0.2	
37	鉗	7T	SD-8 4層	64-2	19-57	8.6	0.65×1.0		
38	?	7T	SD-8 4層	64-9		10.55	2.0	0.35	
40	鉗	7T	SD-8 4層		19-59	4.45	0.9×0.9		
41	鉗	7T	SD-8 4層	64-8		3.65	0.2×0.3		
42	鉗	7T	SD-8 4層	64-4	19-58	5.6	0.53×0.6		
43	鉗	7T	SD-8 4層			3.9	0.6×0.6		
44	?	7T	SD-8 4層	64-12		2.9	0.8~1.1	0.45	穴の直径 0.75
45	鉗	7T	SD-8 4層	64-7		4.1	0.4×0.35		
46	?	7T							
48	輪	7T							
49	赤銅りばさみ	2T							
50	セイウツイ	2T	表 土						
51	鉛 鋸	2T	表 土						
52	不 明	7T	SD-8 2層上面					0.3	二重刃三角形 一刃の長さ 9.6~11
53	*	7T			19-9	30.7	1.35	0.7	棒状
54	*	7T			19-10	30.8	1.35	0.7	棒状
55	*	7T			19-11	30.7	1.35	0.65	棒状
56	*	7T			19-12	30.8	1.35	0.65	棒状
57	*	8T	9寸石窓 or 1号石窓(表土)			4.3	2.6	0.1~0.2	台形
58	鑿	7T	1 層	64-13	19-8	12.9	0.6	0.2	
60	不 名	7T	ペルス 2層上面						
61	鑿	7T	瓦 層	64-14	19-6	12.8	0.6	0.15	
62	鑿	7T	瓦 層	64-15	19-4	7.4	0.55	0.1	小鉢が付いている
64	耙 手	7T	瓦 層		19-7	6.4	0.15		

O. 種 子

登録番号	器 形	地区名	出土遺物名	文書番号	写真番号	種 子
O-1	あ わ	7T	SR-1 3層	20-20		
2	ももの輪、くるみ どんどん	7T	SR-1 5層	20-24		
3	くるみ、鈴	7T	SR-1 3層 SD-8 6層	20-21		
4	鈴	7T	SR-1 5層	20-22		
5	鈴	7T	SR-1 5c層	20-23		

N. 古 銭(1)

登録番号	器 形	地区名	出土遺物名	拓本番号	写真番号	特 徴			
						材 質	年 時 代	直 径	厚 度
62	寛永通宝	7T	SR-1 2層	66-14	19-33	寛永13年(1636)	江戸	2.2	0.1
66	永徳通宝	7T	SR-1 2層	66-9	19-29	永徳6年(1408)	明	2.4	0.6 0.15
67	小 明	7T	1 層		19-44				
68	寛永通宝	7T	SR-1 4a層	66-18	19-45	寛永13年(1636)	江戸	2.3	0.6 0.1
69	寛永通宝	7T	SR-1 4a層上面	66-16	19-39	寛永13年(1636)	江 戸	2.2	0.7 0.1
70	寛永通宝	7T	SR-1 4a層上面	66-17	19-36	寛永13年(1636)	江 戸	2.2	0.7 0.1
71	寛永通宝	7T	SR-1 4a層	66-13	19-50	寛永13年(1636)	江 戸	2.3	0.6 0.1

第14表 登録遺物目録(14)

N. 古 銭(2)

件號番号	地 種	油汎名	出 4. 號標名	拓木番号	写真番号	特 墓					
						切 溝	溝	時代	直径	孔道	縫隙
72	一 銭	7 T	SR-1 4a層	66-25	19-40	大正 8年(1919)	大 正	2.3	6.1		
73	寛永通宝	7 T	SR-1 4c層	66-21	19-48	寛永13年(1636)	江 戸	2.25	0.65	0.1	
74	○○九重	7 T	SR-1 5層	66-22	19-56			2.25	0.65	0.1	
75	開元通宝	7 T	SR-1 6層	66-1	19-28	武清 4年(621)	鐵	2.4	0.7	0.1	
76	永樂通宝	7 T	圓 C層	66-8	19-32	永樂 6年(1408)	明	2.2	0.6	0.1	
77	寛永通宝	7 T	SD-8 2層上面	66-20	19-54	寛永13年(1636)	江 戸	2.45	6.6	0.15	
78	永樂通宝	7 T	SD-8 2層	66-10	19-35	寛永13年(1636)	江 戸	2.3	0.65	0.1	
79	無等光背	7 T	SD-8 2層	66-4	19-46	無等光背(1068)	宋	2.5	0.7	0.15	
80	○○九重	7 T	SD-8 2層	66-24	19-52			2.2	0.7	0.1	
81	無等瓦背	7 T	SD-8 4層	66-5	19-52	無等瓦背(1068)	宋	2.4	0.6	0.2	
82	光背○九	7 T	SD-8 4層	66-6	19-41	光背○九(1068)	北宋?	2.2	0.7	0.1	一字不明の角、無尾
83	○○九重	7 T	SD-8 4層	66-23	19-52			2.4	0.6	0.1	
84	寛永通宝	2 T	古 1	66-18	19-32	寛永13年(1636)	江 戸	2.25	0.7	0.15	
85	寛永通宝	2 T	6号石井 烏土	66-15	19-33	寛永13年(1636)	江 戸	2.2	0.7	0.15	
86	寛永通宝	6 T	1 層	66-12	19-38	寛永13年(1636)	江 戸	2.5	0.6	0.15	
87	無等通宝	7 T	SM-1 3層		19-43	寛永 2年(1605)	北 宋	2.4	0.7	0.1	
88	寛永通宝	7 T	1 層	66-11	19-30	寛永13年(1636)	江 戸	2.4	0.6	0.1	
89	無等瓦背	7 T	III 層	66-2	19-31	無等瓦背(1068)	宋	2.5	0.65	0.15	
90	無等瓦背	7 T	II 層	66-7	19-37	無等瓦背(1068)	南 宋	2.45	0.65	0.15	
91	人頭瓦背	7 T	V b層	66-3	19-49	人頭瓦背(1023)	北 宋	2.35	0.7	0.1	
92	不 明	6 T	10号石井		19-47						

V. まとめ

曹洞宗寺院東光寺は、寺に伝わる縁起によれば、元来は天台宗寺院であったが七堂伽藍を焼失、鎌倉時代に一時、留守氏の菩提寺として興隆するが再び荒廃し、天文年間（16世紀中葉）に須賀川長禄寺の普岳文統和尚によって曹洞宗寺院として再興されて今日に至っている。

文献にみえる「東光寺」の初見は、「塩竈神社文書」觀応2年（1351）の陳状で、「東光寺僧」とあって、南北朝期には東光寺が存在していたことがうかがえる。また、留守氏の系図の中で比丘尼性喜という人に「号東光寺殿」という注記があって、「留守氏文書」元享4年（1324）留守家明謹状にその名が見えることから、東光寺は14世紀前半には留守氏の庇護下で興隆をふるっていた可能性が高い。

寺の境内には、土壘に囲まれた嘉暦2年（1327）の銘をもつ大型板碑2基の他、13世紀後半から14世紀前半にかけて造立された多くの板碑が分布し、宮城県内でも有数の板碑群として知られている。また、丘陵末端の凝灰岩の崖面には、かつての参詣道に沿って10数基の石窟が穿たれ、そのうちの4基では奥壁や側壁に仏像のレリーフが確認されている。再上段の石窟には、薬師仏や阿弥陀仏が浮き彫りにされ、「穴薬師」として現在も信仰の対象として祭られている。

また、延宝年間（17世紀後半）の『仙台古城書上』には、「東光寺城跡」の記載があり、寺を囲む馬蹄形の尾根上に堀切り土塁、曲輪がみられ、岩切城跡に続いているが、墓地の造成によりその中心の平場は大きく削平されている。また、横穴が所々に開口しており、七北田川上流の入生沢・台原敷横穴群や利府町菅谷横穴群とつながる墓域であったことが知られている。

大崎八幡神社の神官大場雄淵によって描かれた近世絵画史料『奥州名所図絵』にみえる東光寺付近の景観は、文化・文政年間（19世紀前半）のものではあるが、中世から続く歴史景観の一部をも包摂しているものと考えられる。1T・1～3号石窟の前では、ピット、2基の土坑、方形に巡る溝などを検出した。3号石窟前で検出したピットは柱穴とみられ、方形に巡る1号溝は、堆積土から神仏像の一部とみられる土人形を出土したことから、「図絵」にみえる「十王堂」の周囲に巡らされた溝と推定したい。

描かれた東光寺自体は、近世曹洞宗寺院としての姿であるが、門前の「十王堂」から参詣道に沿って「穴地蔵、古碑、薬師堂、奥の院」と続く構築物は、中世に盛行した地蔵十王信仰にかかる一連の施設と捉えたい。

辛うじて削平を免れた5Tの崖際からは、凝灰岩の岩盤を削って造り出した堅穴造構、階段、礎石、「井戸」状造構、柱穴などを検出した。堅穴造構の堆積土には、瓦片と常滑産陶器、摩耗した県内産中世陶器が含まれていた。また、造構に伴う出土ではないが、崖際と崖面の覆土からは瓦類を多量に出土している。これらは、廃棄されたものとみられ、県内産の中世陶器とと

にも軒瓦や鬼瓦など各種の瓦があり、県内初の中世瓦の出土例となり、「図絵」には描かれていない、中世寺院の遺構の存在が明らかになった。

井戸状遺構は、検出状況からは井戸跡である可能性が強く、藤本正行氏、入間川宣夫氏のご教示、山本博氏の論文「中世の井戸の成立と構造」(『歴史手帖』昭和52年4月号掲載)によれば、主として寺社に伝世する「箱型石井」で、

- (1)「開伽井」(仏に供える水を汲む井戸)
- (2)参詣前に手や顔を洗い清める手水場
- (3)信仰の根源に関連する「御神体」そのもの

などと捉えられるが、給水の方法や施設を確認しておらず、礼堂や祠、塔基部の収納施設などの可能性も否定できない。

これらの遺構は、東光寺山門前の十王堂から参詣道を辿り、地蔵菩薩、他の石窟仏を経て薬師如来の石窟へと続く一連の遺構群で、覆屋をもつ井戸状遺構・礎石は、削半された尾根上部で大量の瓦を葺いていたであろう14世紀の中世寺院「東光寺」に関連する宗教的な性格をもつ遺構と考えられる。

第2次調査の結果、近世の七北田川に並流する河川跡と東光寺から流れこむ溝跡を検出した。河川跡は『図絵』にみえる「途絶川」と推定でき、橋脚の痕跡、「洗い場」跡・杭列を検出し、堆積土から大量の焼土とともに陶磁器を出土した。さらに60cm程の厚さの整地層の下から井戸・溝・ピットなどの遺構を検出した。常滑産中世陶器、宋銭、青磁片などの出土遺物から14世紀頃の生活面といえる。

今回の調査で検出した遺構群を、文献にみえる「市場」と断定する根拠は不十分であるが、七北田川の下流側にも遺構が連続していることがその後の試掘調査で確認されている。発掘調査によって「市場」の位置が解明されることに期待したい。

東光寺遺跡は、今回の発掘調査以前には古代の横穴群、中世の城跡・板碑群・石窟仏群という複合遺跡として理解されていたが、発掘調査の結果、あらたに中世寺院・集落跡という性格も加わり、史跡岩切城跡とあわせて、古代から中世にかけて「陸奥の都」多賀城を中心とする「府中」を総合的に解明する上で貴重な遺跡であることが明らかになった。

）

参考・引用文献

- 赤羽一郎 (1984) : 常滑焼 - 中世窯の様相 -、考古学ライブラリー23、ニュー・サイエンス社
- 伊東信雄 (1930) : 岩切村東光寺境内発掘の板碑と其出土状態、仙台郷土研究第2巻第8号
- 上原真人 (1986) : 岩波講座8 仏教、日本考古学4、岩波書店
- 大三輪龍彦 (1985) : 鎌倉の考古学、考古学ライブラリー32、ニュー・サイエンス社
- 大脇 潔(1991) : 研究ノート 丸瓦の製作技術、奈良国立文化財研究所第49回研究論集IX、奈良国立文化財研究所
- 元興寺文化財研究所 (1982) : 中・近世瓦の研究 - 元興寺篇 -
- 工藤哲司 (1986) : 柳生、仙台市文化財調査報告書第95集、仙台市教育委員会
- 研修道場用地発掘調査団 (1983) : 研修道場用地発掘調査報告書、鎌倉市鶴岡八幡宮
- 古泉 弘 (1987) : 江戸の考古学、考古学ライブラリー48、ニュー・サイエンス社
- 極楽寺III境内遺跡発掘調査団 (1980) : 極楽寺III境内遺跡、鎌倉市教育委員会
- 小林清治・大石直正編 (1978) : 中世奥羽の世界、東京大学出版会
- 斎藤 忠 (1930) : 陸前宮城郡に於ける岩屋佛について、考古学第20巻第2号、日本考古学会
- 佐賀県立九州陶磁文化館 (1984) : 北海道から沖縄まで国内出土の肥前磁器
- 佐藤 洋 (1983) : 今泉城跡、仙台市文化財調査報告書第58集、仙台市教育委員会
- 佐藤 洋 (1985) : 仙台城三ノ丸跡、仙台市文化財調査報告書第76集、仙台市教育委員会
- 三十三間堂奉賛会 (1961) : 三十三間堂
- 紫桃正隆 (1974) : 史料仙台領内古城・館4、宝文堂
- 芹沢長介他 (1981) : 日本やきもの集成1 北海道・東北・関東、佛平凡社
- 仙台市史編集委員会 (1950~1970) : 仙台市史
- 仙台叢書刊行会 (1923) : 「仙台領古城書上」「仙台叢書」4
- 高井梯三郎 (1954) : 常陸・下野の中世瓦瞥見 - 常陸三村山瓦窯跡出土瓦の二、三を中心に - 、茨城県史研究43、茨城県史編集委員会
- 田口昭二 (1983) : 美濃焼、考古学ライブラリー17、ニュー・サイエンス社
- 鶴岡八幡宮境内発掘調査団 (1985) : 鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書、鎌倉市教育委員会
- 鶴岡八幡宮境内発掘調査団 (1987) : 鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書II、鎌倉市教育委員会
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 (1985) : 東北大学埋蔵文化財調査年報I
- 直会殿用地発掘調査団 (1983) : 直会殿用地調査報告書、鎌倉市鶴岡八幡宮
- 永竹 咸他 (1980) : 日本やきもの集成11 九州I、佛平凡社
- 奈良国立文化財研究所 (1983) : 南都七大寺出土軒瓦型式一覧 (1)
- 博崎彰一 (1977) : 世界陶磁全集3 日本中世、鶴小路館

- 樽崎彰一他 (1980) : 日本やきもの集3 濑戸・美濃・飛驒、佛平凡社
- 松島 健 (1986) : 地蔵菩薩像、日本の美術第239号、至文堂
- 三上次男他 (1983) : 世界陶磁全集9 江戸 (4)、佛小学館
- 三春町歴史民族史料館 (1984) : みちのくの古人物ー三春人形とその周辺ー
- 宮城いしふみ会(1986) : 仙台市東光寺板碑群、仙台市文化財調査報告書第93集 仙台市文化財
分布調査報告IV、仙台市教育委員会
- 宮城県史刊行会 (1954~1987) : 宮城県史、宮城県
- 森 郁夫 (1986) : 瓦、考古学ライブラリー43、ニュー・サイエンス社
- 読売新聞社 (1980) : 日本のやきもの第5集 濑戸・美濃・常滑
- 読売新聞社 (1977) : 日本のやきもの第2集

VI. 付 編

1 仙台市東光寺出土の板碑と七北田川下流の板碑概観

石 黒 伸一郎

1. はしがき

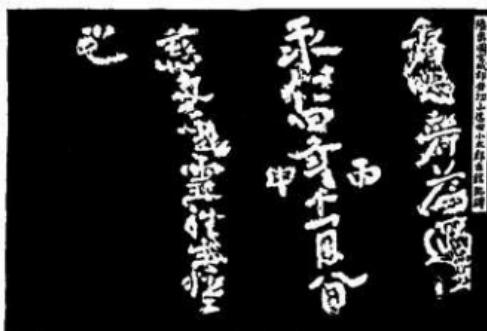
東光寺は仙台市内において板碑が最も多くみられるところである。仙台市教育委員会では昭和59・60年の二ヶ年にわたって分布調査を実施し、70基の板碑と五輪塔を1基確認した。くわしいことは報告書を見て頂きたい(文献1)。今回の発掘調査では10基の板碑が出土した。そのうち9基は新資料である。以下それらを記載するとともに七北田川下流の板碑を概観してみたい。出土した板碑は便宜上1号碑~10号碑とした。

第1表 東光寺出土板碑一覧表

番号	出土地所	石材	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	種子	銘文	備考	版面	写真
1	SD-8(8号溝跡)	砂岩	114	27	13	パン			第2回1	1~2
2	SD-8(8号溝跡)	粘板岩	134	21	20	ア	正應五年十一月十四日	細縫あり	第2回2	3~7
3	SD-8(8号溝跡)	砂岩	93	35	30	ア		下部破損	第2回3	8~9
4	SD-8(8号溝跡)	安山岩	77	39	26	バク			第2回4	10~11
5	SK-2(2号土地)	砂岩	104	75	35	バ	石志者為通井 聖仁四年夏十一月八日 園園園園生稀幸也	「集古十種」に あり。後壁に刊 用されている	第2回5	12~14
6	SE-1(芦戸路)	粘板岩	53	15	4	ラ		焼けて黒くなっている	第3回1	15~16
7	SR-1(河川跡)	粘板岩	21	10	3	サカサク		破片	第3回2	17
8	SK-2(2号土地)	粘板岩	25	16	3	パン		下部破損	第3回3	18
9	SK-2(2号土地)	安山岩	34	26	7	マー?		頂部破損	第3回4	19
10	SK-2(2号土地)	粘板岩	8	6	0.8	サカサク		小端片	第3回5	20

2. 東光寺出土の板碑

1号碑はSD-8(8号溝跡)から出土した。砂岩の礫を使用しており、高さ114cm、幅27cm、厚さ13cmを測る。左側面のみ剝離して整形する。右側面は自然面のままである。碑面は平滑に磨いて調整する。上部に種子「パン」を篆研彫りする。彫刻方法は底線に対して並行方向の削りである。彫り



第1図 「集古十種」碑銘之部に収録の5号碑

幅は2.4cm、深さは0.5cmである。底線ははっきりしている。銘文などはみられない。(第2図1、写真1・2)

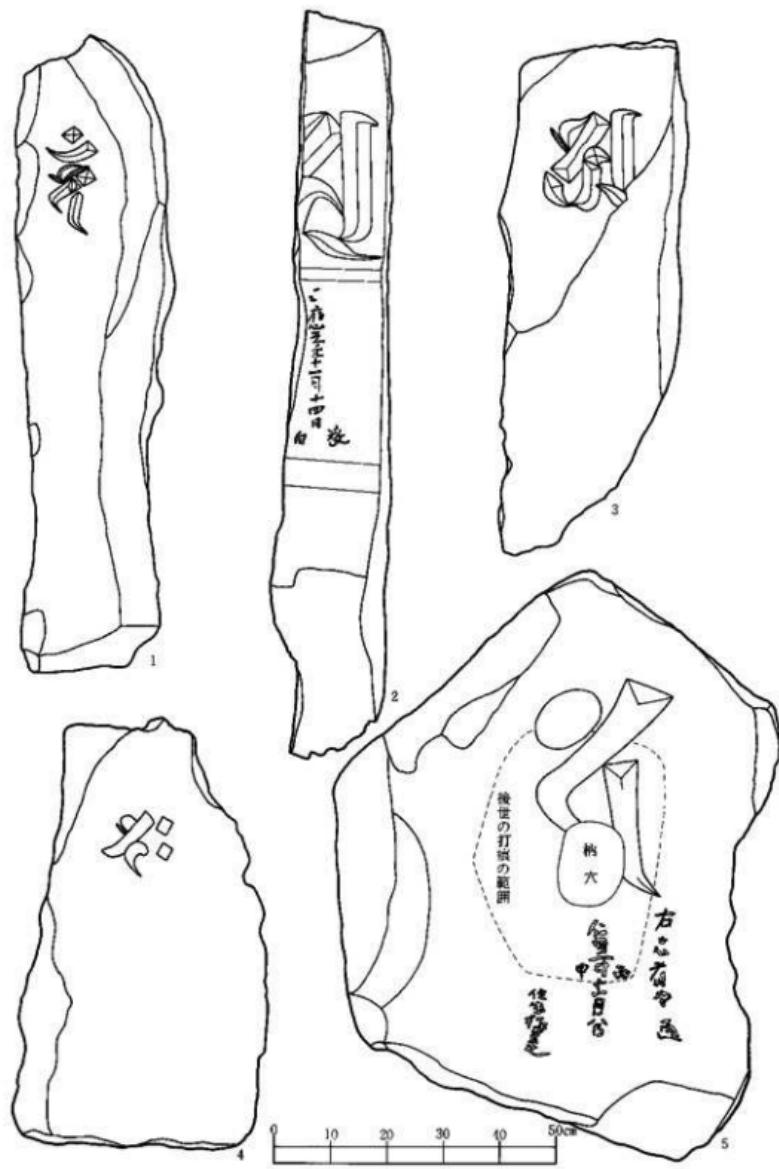
2号碑はSD-8(8号溝跡)から出土した。枯板岩の剥離した石材を使用しており、高さ134cm、幅21cm、厚さ20cmを測る。左側面は破損しているが破損面は古い。碑面は文字のある部分のみ磨かれている。基部の面は剥離面のままである。上部に種子「ア」を薬研彫りする。彫刻方法は掻打で、彫り幅は5.1cmと広く、深さは0.5cmある。底線ははっきりしている。種子の下には「正應五年十一月十四日敬」と紀年号がある。紀年号の部分には打痕がある。紀年号の上と下にはそれぞれ二本の細線があり、この線は碑面の割付線ではなく種子と紀年号を区画する線であろう。(第2図2、写真3~7)

3号碑はSD-8(8号溝跡)から出土した。砂岩の礫を使用しており、高さ93cm、幅35cm、厚さ30cmを測る。中央より下は大きく破損している。碑面調整はない。上部に種子「ア」を薬研彫りする。彫刻方法は掻打の後に底線と並行方向の削りで仕上げている。彫り幅3.8cm、深さは0.5cmで、底線ははっきりしている。(第2図3、写真8・9)

4号碑はSD-8(8号溝跡)から出土した。安山岩の礫を使用しており、高さ77cm、幅39cm、厚さ26cmを測る。加工や碑面調整などはない。上部に種子「バク」を浅く丸彫りする。彫刻方法は掻打である。種子は小さく浅いのでわかりにくい。彫り幅は2.3cm、深さは0.3cmで底線はなく、銘文などはみられない。(第2図4、写真10・11)

5号碑はSK-2(2号土塚)から出土した。この板碑は寛政12年の『集古十種』(文献2)に「陸奥国宮城郡岩切山信田小太郎古館跡碑」として図示されている(第1図)。松本源吉氏の『陸前宮城郡の古碑』には東光寺門前の三界万靈塔の台石になっていたと報告されている(文献25)。昭和59・60年の調査時には確認できなかったものである。砂岩の円礫を使用しており、高さ104cm、幅75cm、厚さ35cmを測る。碑面調整はない。碑面の中央には台石に利用された時の枘穴があり、さらにそのまわりは掻打によって平らに整形されている。中央やや上に大きく種子「バ」を丸彫りする。彫刻方法は掻打で、彫り幅は4cmと広く、深さは1cmある。底線は部分的に彫られている。「バ」には命点がなく、第一画は梢円形に表現しており、類例は非常に少ない。種子の下には三行の銘文があるが、碑面が非常に荒れているので読み難い。中央に「延仁四年十一月八日」と紀年号があり、その右側に「右志者為過因」、左側に「南國往生極楽也」とある。[]の中は『集古十種』から補なった。この板碑は頼文から慈父の追善供養の為に造立されたものであろう。字のわからない部分はトレースできなかった。(第2図5、写真12~14)

6号碑はSE-1(井戸跡)から出土した。粘板岩の剥離した石材を使用しており、高さ53cm、幅15cm、厚さ4cmを測る。碑面調整はなく剥離面のままである。上部に種子「ラ」を薬研彫りする。彫刻方法は底線に対して並行である。彫り幅は1.3cm、深さは0.2cmある。底線ははっきり



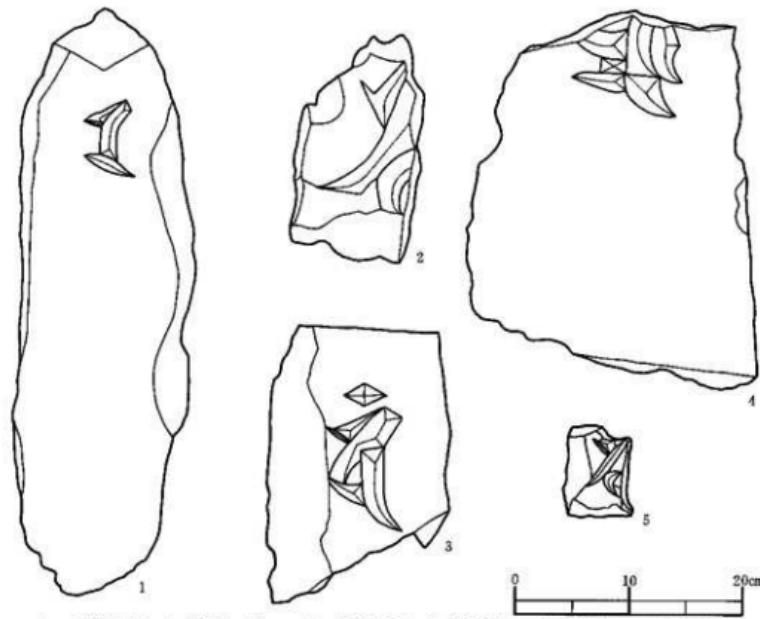
1. 1号碑 SD-8 (写真1・2)
4. 4号碑 SD-8 (写真10・11)
2. 2号碑 SD-8 (写真3~7)
5. 5号碑 SK-2 (写真12~14)

第2図 東光寺出土板碑実測図1 (スケール1/10)

りしている。銘文などはみられない。碑面の中央部は黒く焼けている。(第3図1、写真15・16)
7号碑はS R - 1(河川跡)から出土した。破片である。粘板岩の剥離した石材を使用しており、高さ21cm、幅10cm、厚さ3cmを測る。碑面調整はなく剥離面のままである。種子は「サ」または「サク」の左側部分しか残っていない。薬研彫りで、彫刻方法は底線に対し並行である。彫り幅は2.5cm、深さは0.5cmである。底線ははっきりしている。(第3図2、写真17)

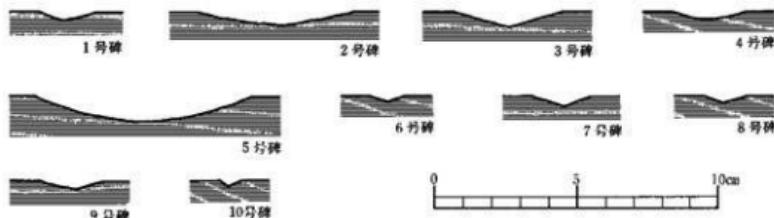
8号碑はS K - 2(2号土塹)から出土した。上部のみの破片である。粘板岩の剥離した石材を使用しており、高さ25cm、幅16cm、厚さ3cmを測る。碑面調整はない。中央に種子「パン」を薬研彫りする。彫刻方法は底線に対して並行の彫りである。彫り幅1.8cm、深さ0.3cmである。底線ははっきりしている。(第3図3、写真18)

9号碑はS K - 2(2号土塹)から出土した。安山岩の剥離した石材を使用しており、高さ34cm、幅26cm、厚さ7cmを測る。頂部は破損している。碑面の中央部は若干磨かれている。上部の種子は「マー」と思われるが一部が欠けている為に断定はできない。薬研彫りで、彫刻方法



1. 6号碑 SE-1 (写真15・16) 2. 7号碑 SR-1 (写真17)
4. 9号碑 SK-2 (写真19) 5. 10号碑 SK-2 (写真20) 3. 8号碑 SK-2 (写真18)

第3図 東光寺出土板碑実測図2 (スケール1/5)



第4図 種子の彫刻横断面図

は搞打である。彫り幅2.6cm、深さ0.3cmである。底線ははっきりしている。(第3図4、写真19)

10号碑はSK-2(2号土塹)から出土した。非常に小さな破片である。枯板岩の剥離した石材を使用しており、高さ8cm、幅6cm、厚さ0.8cmを測る。種子は「サ」または「サク」の左側のみしか残っていない。薬研彫りで、彫刻方法は底線に対して並行の彫りである。彫り幅は0.8cm、深さは0.2cmある。底線ははっきりしている。(第3図5、写真20)

3. 考 察

今回の東光寺の発掘調査では10基の板碑が出土したが、半数近くは断碑や破片などのために全体がよくわからない。また、資料の数も少ないので、これまでに調査された岩切地区(東光寺を含む)の板碑124基、七北田川下流の板碑52基の合計176基の板碑について若干の考察を加えたい。また、仙台市の南部を流れる名取川下流の柳生地区の板碑36基を比較資料とした(文献3)。七北田川下流と呼ぶ範囲は岩切の南から河口までの右岸・左岸とも約2kmで、主な地区は仙台市田子・福田町・岡田・高砂・福室・中野・蒲生、多賀城市新田・南宮・山王・高橋などである。この地域の板碑の詳しい事は報告書を見て頂きたい(文献4)。

(1) 分布と立地

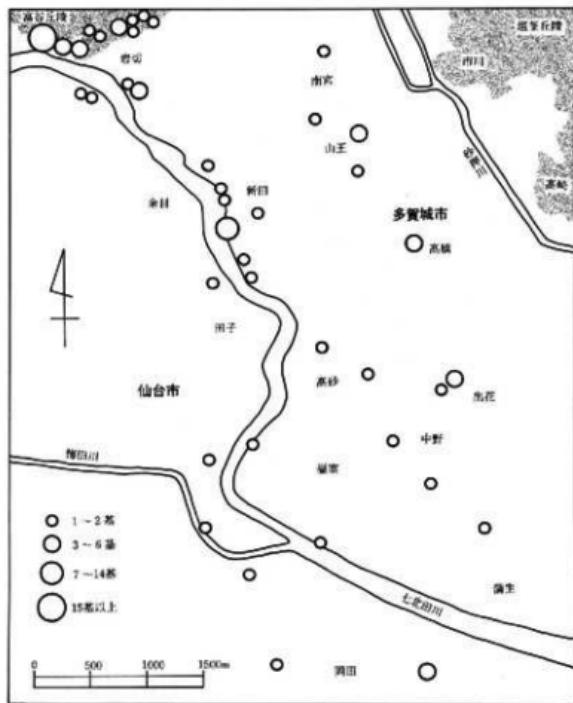
岩切地区及び七北田川下流の板碑で原位置を保っているものは少なく、ほとんどが後世に動かされている。原位置を動いていないと思われる板碑は東光寺本堂の裏山、雜木林の中にある7基ほどである。しかし、移動されている板碑でも何kmと動いているとは考えられないので、おおまかな分布の傾向はつかめる。第5図は七北田川下流の板碑分布図で、円の大きさの違いによって1ヶ所あたりの数量を示している。最も板碑の集中しているのは岩切であり、この分布は北に隣接する宮城郡利府町神谷沢地区にも広がっている。この地域は富谷丘陵の南端に位置し、多くの板碑は丘陵の裾部に造立されており、その中心は東光寺である。東光寺の境内に

は現在70基の板碑がみられ、仙台市内では最大の板碑群である。七北田川の下流において岩切地区にのみ数多くの板碑が造立されているのは、この地域が一大供養地であったからであろう。また、昭和7年の発掘調査では板碑の近くから人骨が出土しており(文献5)、供養地であると共に墓所的な性格も有していた事を物語っている。岩切に次いで多くの板碑がみられるのは、多賀城市新田である。新田の板碑の立地は七北田川の左岸、特に岸辺の近くにあり川の中にあった板碑もある。丘陵の裾部に立地する岩切地区とは対象的である。この立地の違いはおそらく造立者層と造立趣旨の違いによるものであろう。新田の板碑群の中心は南安楽寺板碑群で8基ある。この板碑群は七北田川の河原にあったものを堤防工事に伴い現在地に移したものである。

七北田川下流の地域において板碑群を形成しているのは、東光寺を中心とした岩切地区と南安楽寺板碑群を中心とした新田板碑群の二ヶ所である。その他の板碑は1基から数基単位で散在しているが、ほとんどの板碑が七北田川の自然堤防上に位置している。自然堤防上には中世の遺跡が多く存在している。岩切地区の中世遺跡としては今市遺跡・若宮前遺跡・鴻ノ巣遺跡・東光寺遺跡・岩切城跡などがあり、新田地区には新田遺跡・安楽寺遺跡がある(文献6~10)。

板碑の立地と中

世村落には密接な関係があると考えられ、板碑が多く造立されているような場所の付近には中世遺跡がある場合が多い。しかし、中世遺跡の中心部には板碑があまりみられず、遺跡の周囲や少し離れた所に立てられている傾向が岩切や新田にはみられ、中世村落の中でも板碑を



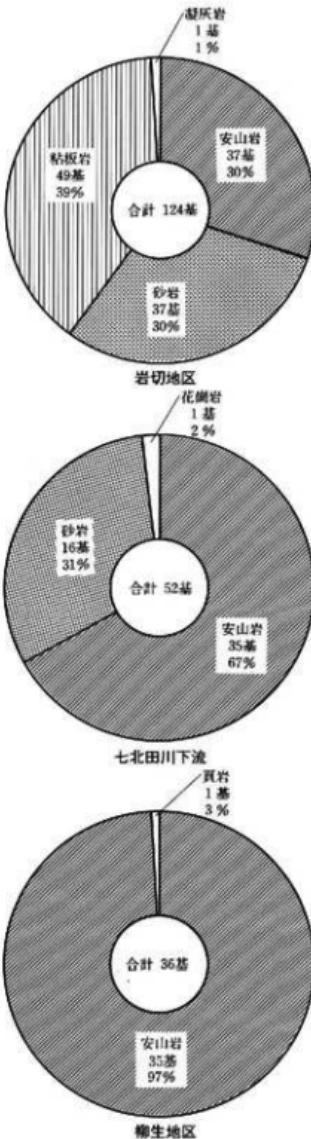
第5図 岩切・七北田川下流の板碑分布

立てる特定の場所は、村落のまわりや丘陵の裾部、河川の近くなどに限定されているようである。

(2) 石材

岩切地区の石材で最も多いのは粘板岩で39%を占め、次いで安山岩と砂岩が同数の30%、凝灰岩は僅か1%である。粘板岩を使用した板碑は、東光寺境内の小型板碑が多い。大型・中型板碑で粘板岩を使用している例は少なく、安山岩と砂岩が主である。小型板碑に使用されている青い粘板岩の産出地ははっきりわからないが、おそらく石巻・牡鹿地方より運びこまれたものであろう。東光寺本堂の西側壁上の嘉慶2年の高さ273cmの大型板碑は石巻市稻井産の粘板岩を使用しており、船により仙台湾から七北田川を通って運ばれたものであろう。

七北田川下流の石材は安山岩が最も多く67%で、次いで砂岩の31%、花崗岩はわずかに2%である。富谷丘陵の南部には砂岩と凝灰岩から構成されている七北田層が分布しており（文献11）、砂岩や凝灰岩は岩切の周辺から入手したものであろう。安山岩は岩切やその周辺ではなく、七北田川上流に分布する荒川火碎岩に産出する（文献12）。砂岩や安山岩などは七北田川の河原などから入手したものだろう。花崗岩は宮城郡利府町春日に若干産出する（文献13）。柳生地区の石材はほとんどが安山岩で、特に名取川から入手した円礫を使用しているのが特徴となっている。



第6図 地区別石材比率グラフ

石材で注目すべきことは、岩切地区にのみ粘板岩を使用した板碑が分布していることである。七北田川下流において岩切という狭い地域に粘板岩製板碑が造立されたということは、それに特別な意味があると考えられる。粘板岩は石巻・牡鹿などの遠隔地から運ばなくてはならず、鎌倉時代の岩切には「冠廬市庭」や「河原宿五口市庭」などの定期市が開かれていたことは『留守文書』(文献14)によってうかがえ、商業が発達していたことが推測できる。しかし、需要の少ない粘板岩が一般的な商品として流通していたとは考えられなく、特別に取り寄せたのではないだろうか。おそらくそれは岩切周辺において大きな勢力を持っていた留守氏に関係する人物だったと考えられる。

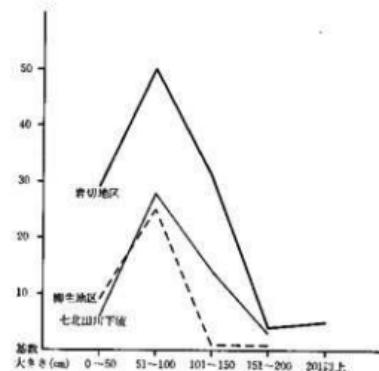
(3) 大きさ

第7図は地区別に板碑の大きさをあらわしたもので、縦が基数で横が50cm単位の大きさである。地上に立っている板碑は地面から頂部までの大きさを計測している。この図をみると51～100cmの板碑がそれぞれの地区において最も多く造立されており、地区が離れていても同様の傾向を示している。このことは宮城県の中央部では普遍的な状況を指しているものと思われる。しかし、大きな石材が容易に入手できる石巻地方では150cm前後の板碑が多くなるのではなかろうか。岩切地区は50cm以下の板碑が非常に多くみられ、一つの特徴になっている。それらはほとんど東光寺境内の粘板岩製小型板碑で、このような傾向は宮城郡松島町雄島板碑群でも確認されている(文献15)。また、2m以上の大型板碑は七北田川の流域で岩切地区にしかみられず、特徴的な存在である。大型板碑を造立するには多くの資金と人出が必要なので、東光寺境内の嘉慶2年の高さ273cmある板碑などは留守氏に関係する人物が岩切周辺の住民の協力を得て造立したものであろう。

七北田川下流と柳生地区の大きさはよく似ているが、柳生地区の101～150cmの板碑は七北田川下流と比較して少ない。これはおそらく大きな石材が入手できなかったからであろう。

(4) 形態と製作方法

岩切地区や七北田川下流の板碑は素材をあまり加工しないで製作している板碑がほとんどで、形態は素材に左右されているも



第7図 板碑の大きさ

のが多い。形態や加工で特徴ある板碑が4基ほどある。東光寺境内の穴薬師付近にある無紀年号のパン種子板碑は安山岩を使用しており、頂部に斜め方向の擦切痕がみられる（第8図1）。これは長さ24cm、幅0.8~1.3cm、深さ0.9~1.2cmで、断面は狭いV字形である。この擦切痕はおそらく石鎚のようなものを使って左側面を切り落とそうとしたが、何らかの理由によって途中で擦切をやめたようである。頂部の右側面は剥離によって斜め方向に整形されており、これは明らかに頂部を三角形にしようとしたものであろう。宮城県内に頂部を三角形に整形、または三角形の線刻を施した板碑は非常に少なく、古川市堤根大寿庵の弘安2年板碑（文献16）、石巻市狐崎小祝浜の觀応2年板碑（文献17）、遠田郡涌谷町御膳姫社板碑群（文献18）、桃生郡河南町鹿又道的の建武2年板碑（文献19）などにみられるが、擦切技法で三角形にしている例は東光寺のみで、全国的にみても類例はほとんどないようである。擦切技法は縄文時代に磨製石斧を作る際に一部使われたが、中世に擦切技法という特殊な技術を持っていた石大工が居たということは興味深いことであり、類例を探すことによって石大工の系統などもたどれるかもしれない。

岩切字入山の地蔵堂付近にあった永仁7年の阿弥陀曼荼羅板碑は（第8図2）、安山岩を使用

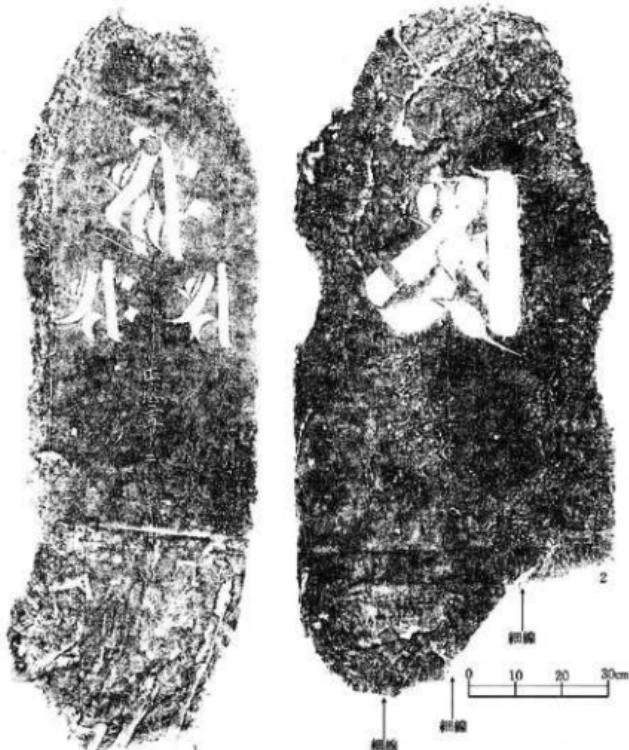


第8図 加工のある板碑(1)

しており頂部が破損している。碑面を平らに調整し、基部を約3cmほど段状に作り出して、側面も直線的に整形している。このように基部を段状に作り出す例は、加美郡小野田町門沢の康永2年板碑(文献20)、名取市下増田毘沙門堂古墳の無紀年号板碑(文献20)、同市植松の弘安4年板碑(文献21)、同市北目切通の弘安6年板碑(文献21)などが知られているが類例は少ない。名取市毘沙門堂古墳や同市北目切通の資料を参考にすると、地蔵堂の阿弥陀曼荼羅板碑の頂部には額部が作られていたものと考えられる。

第9図は岩切字羽黒前126-4森谷茂氏宅の車庫前で行われていた下水道工事現場から偶然掘り出された2基の板碑である。1号碑は正應2年の阿弥陀三尊種子板碑である。碑面は平らに整形され、キリークの上に弧状の細線と中心を決めるための細線がある。頂部は尖らせているが、完全な三角形ではない。碑面と

側面は調整と部分的な細線によって区分されており、ノミで面取りが施されている。ノミ痕ははっきりと残っており、先の尖っているノミを使ったようである。基部は自然面のままで、高さの3分の1は土中に埋めていたと思われる。この様に碑面全体を整形する丁寧を作りの例は宮城県においては少ない。形態が似ているもの



1-2 仙台市岩切字羽黒前126-4 森谷茂氏宅前出土

第9図 加工のある板碑(2)

として石巻市南境八幡神社の元應元年板碑がある(文献22)。また、碑面と基部を調整によって区分している例として、黒川郡大衡村大森阿弥陀堂の元應2年の阿弥陀独尊来迎図像板碑がある(文献23)。

2号碑は無紀年号のア種子板碑である。加工はなく自然面のままである。拓本ではよくわからないが中心と種子の両側に合計3本の細

線が観察できる(第9図2)。この細線は種子を彫る時の割り付け線と思われ、仙台市柳生2丁目の阿部氏宅1号碑にもみられる(文献3)。東光寺境内の小型板碑2基にも格子状の細線がある(文献1)。どちらにも銘文が彫られていないので墨書きなどをするときの割り付け線ではないだろうか。この様な細線はよく観察しないと見えないので、これまで報告されている資料は少なく、これからは資料も増えると思われる。

岩切地区及び七北田川下流で磨きなどの碑面調整のある板碑は11基と少なく全体の7%しかない。また、板碑全体を整形して、岩切の地蔵堂や羽黒前1号碑のように形態を整えている板碑はさらに少なく全体の1%しかない。宮城県内の板碑は碑面調整や加工がありなく、この数値はおそらく宮城県全体に当てはめることができるだろう。

(5) 種 子

種子は梵字を用いて如来や菩薩などを表現して主尊としたものである。また、主尊を絵で表現した画像板碑もあるが岩切地区や七北田川下流にはまったくみられない。諸尊は特定の種子をもっているが、中には同じ種子でも別の仏尊を指している場合が多くみられるので、ある種子を見てそれが

第2表 地区別種子集計表

種子	地区	岩切地区	七北田川下流	柳生地区
ア		30	13	9
バ	ン	20	11	13
キ リ 一	ク	19	12	6
ア	ン	3	3	1
ア	ク	2	3	2
ア	ー ク		1	
カ	ー	7	1	
カ	ク	1		
カ	ン		1	
	ク	1		
イ	イ	3		1
イ	ー	1		1
バ	イ	2		
バ	ク	2	1	1
バ	ー ク		1	
バ	サ	4	2	
タ ラ ー	ク	1		
ウ	ー ソ	1		
マ	マ	1		
マ	ー ?	1		
ブ	タ ?	1		
ラ	ー	2		
ラ	ー	1		
パン・ウーン		1		
パン・ア				1
阿弥陀二尊		3		1
大日三尊		2	1	
阿弥陀曼荼羅		1		
五大種子		1	1	
合 計		114基	51基	36基

何尊を示すかということは分らないので(文献24)、ここでは一般的な例を使うことにする。第2表は種子の判明する板碑を地区別と種子別に集計したものである。岩切地区的種子は27種類で、最も多いのはア(地蔵界大日如来)で26%、次はパン(金剛界大日如来)で18%、3位はキリーク(阿弥陀如来)の17%、4位はカ(地蔵菩薩)の6%でその他の種子は少ない。七北田川下流の種子は13種類あり、最も多いのはアの25%で、キリークは23%、パンは22%でその他の種子は少ない。柳生地区的種子は10種類ありパンが最も多く36%、アは25%、キリークは17%である。三ヶ所とも共通しているのはアとパンの密教系種子とキリークの阿弥陀系種子が多く、このことは宮城県全体に共通していることである。

岩切地区的種子で最も特徴あるのは種類が非常に多く、七北田川下流の2倍近い27種類の種子が使われていることである。数多くの種子が使われているのは粘板岩を使用した小型の板碑に多く、この傾向は松島町雄島板碑群などでも確認されている(文献15)。また、カ(地蔵菩薩)が7基と多く、地蔵信仰が他の地区と比べて盛んだったと思われる。

仙台市福室字鶴巻一番の熊野神社境内にある無紀年号板碑の種子はど



第10図 仙台市岩切字入山27-1 佐藤信夫氏宅1号碑拓本

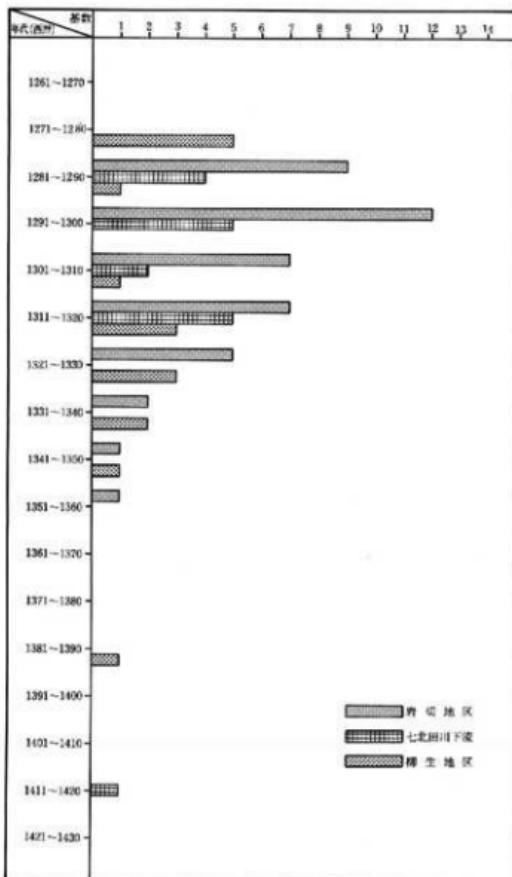
う読むのかよく分らないが、バーンク(金剛界大日如来)の涅槃点が無いもののようにあり松本源吉氏の言うように仮にバーンと呼んでおく(文献25)。例は少なく多賀城市市川字大畠に無紀年号の板碑が1基ある(文献25)。

仙台市岩切字入山の地蔵堂付近にあった永仁7年の阿弥陀曼荼羅板碑はオン・ア・ミリ・タ・

ウーンと中心から下
がって右回りに読む
(セイ・カは破損して無い)。

全国的にみても類例が
少なく、宮城郡七ヶ
浜町代ヶ崎字影田に建
治3年(文献25)、福島県
郡山市如法寺に建治2
年のものがある(文献26)。

仙台市岩切字入山の
佐藤信夫氏宅1号碑(第
10回)の種子はア・バ
・ラ・カ・キヤと中心
から下がって右回りに
読み(キヤは欠損している)。
それぞれの種子を二重
の円相で囲み、それら
をさらに大きな円相で
囲み金剛界曼荼羅の様
に配置した豪華なもの
で弘安の紀年号がある。
ア・バ・ラ・カ・キヤ
は大日如来真言の一種
で、ほかに五大種子と
して五輪塔などによく
見られる地水火風空を
表現している。類例と



第11図 年代別板碑造立数

しては仙台市福室西光寺に正應2年の板碑があるが、この種子には円相がない。読みかたは中心から右へ、そして右回りなので入山の板碑とは少し違う。

東光寺境内にある嘉曆2年のパンは特徴がある(第12図)。パンの空点は普通刷毛書きで四角形に表現されるが、この板碑の空点は円になっており円錐形に彫りこまれている。このような例は少なく埼玉県川越市の大辯天堂に応安元年の例がある(文献27)。このようなパンはなんらかの仏教上の意味をもつものか、たんなる書体の一つなのかよくわからない。

多賀城市新田字北安樂寺にある結衆板碑の種子は太い刷毛書きのアであるが、アのまわりを散華で装飾されている(第13図)。散華は花をまき散らして仏に供養することである。種子を直接散華で装飾した板碑は全国的にみても希少であり、例としては埼玉県羽生市の清淨院にある建長6年板碑は、アーンクのまわりに散華がみられる(文献28)。

(6) 年代

岩切地区で最古の板碑は東光寺境内の弘安6年(1283)で、最も新しいのは同じく東光寺境内の延文5年(1360)である。岩切地区的板碑造立のピークは13世紀後半で、板碑が立てられ始めてから15年ほどの短い期間に大量に造立されたようである。それからは14世紀中頃に向かって徐々に少なくなる。弘安年間の板碑は岩切地区に6基あるが、七北田川下流には1基しかみられないで、この地域で板碑を最も早く受け入れたのは東光寺を中心とした岩切地区であろう。

七北田川下流で最も古い板碑は仙台市福田町2丁目の四野觀音堂境内にある弘安9年(1286)で、新しいのは仙台市中野字阿弥陀堂の誓度寺境内の応永23年(1416)である。七北田川下流の板碑造立のピークは13世紀の終わり頃と14世紀前半であるが、14世紀の初めには若干少くなる。14世紀前半からは板碑の造立は一時なくなり15世紀前半に再び造立されているが数



第12図 東光寺境内の嘉曆2年板碑部分拓本



第13図 多賀城市新田字北安楽寺の結樂板碑拓本

は非常に少ない。このようにある期間板碑が造立されなくなる現象は柳生地区でもみられる。

第11図で全体的にみると1271年から1360年と1390年から1420年に板碑が立てられており、それは大きく二つの期間に分けられる。ここではそれを前期(鎌倉時代中頃~南北朝時代中頃の約90年間)・後期(南北朝時代終わり~室町時代中頃の約40年間)とよぶことにする。前期はさらに1期から

3期の3つに細分できる。1期は板碑が立て始められた頃から1300年で、文永年間の初発期から約30年という短い期間に板碑の造立はピークに達し、板碑の初発期から最盛期に当たる。2期は1301年から1330年で、最盛期を過ぎるが相当数造立されており板碑安定期といえる。3期は1331年から1360年で、次第に板碑の造立は少なくなる板碑減少期である。後期は1381年から1420年で、板碑の造立は非常に少なく、中頃には一時造立はなくなり、後期は板碑衰退期といえる。

板碑造立数の変化を日本で最も多くの板碑が見られる埼玉県（文献29）と宮城県の中央部を比較してみることにする。埼玉県の板碑造立の開始は嘉祥3年（1227年・日本最古）で、宮城県中央部で現在確認されている最古の板碑は名取市高船字八角の文永9年（1272年）であり（文献21）、埼玉県と比べると45年ほど遅れている。埼玉県における造立のピークは1360年頃で、初発期からは緩やかに上昇していくが、宮城県中央部では初発期から最盛期の1300年に向かって急激に多くなっており、板碑を造立する信仰が急速に受け入れられ広がっていったことを示している。埼玉県の最盛期は1320年から1360年前後であるが、その頃の宮城県中央部ではすでに板碑の減少期に向かう時期である。埼玉県の板碑の消滅は1600年頃（文献30）、宮城県中央部は1416年でその差は200年近くもある。宮城県桃生郡北上町などの海岸部では比較的室町時代の板碑が多く（文献31～33）、その開きは少し縮まるが埼玉県の方が長く造立されている。総合的にみると、埼玉県は板碑の造立が早く開始され約370年間の長期にわたり多数の板碑がたてられた。一方、宮城県中央部は遅く造立され始め150年間と板碑が立てられた期間も埼玉県と比べかなり短いようである。

（7）銘文

銘文には造立趣旨などがみられる。板碑の造立趣旨には大きくわけて二つある。一つは死者の冥福のために、死者にゆかりのある生存者があとから追って善事を行う追善と、もう一つは死後の冥福を祈るために、生前にあらかじめ死後に修すべき仏事を修することと、死後、後人にしてもらうよりも功德がすぐれているという逆修である（文献34）。岩切地区及び七北川川下流の板碑で造立趣旨がはっきりしているものは追善供養の板碑が多く、逆修の板碑はみられないようである。柳生地区でも逆修の板碑はみられず、追善供養の板碑が多い傾向にある。結衆板碑については後述する。

岩切地区で造立趣旨のみられる板碑は東光寺境内に7基、東光寺の周辺に8基の計15基が多いが、七北川川下流ではわずか2基と非常に少なく、東光寺を中心とした岩切地区の特徴の一つになっている。

供養の対象になった人々の名称は次の8例がみられる。「慈父」「悲母」「亡親」「過去面々」

「而々各々・祖父祖母・慈父悲母」「聖靈」「過去聖靈」「過去尊靈」などで、それらによると亡くなった両親や祖父母、先祖の人々を供養するために板碑が立てられたことが推測できる。

東光寺境内の石窟付近にたてられている正應4年の板碑には「右志者相当聖靈第三年之忌辰」とある。忌辰とは命日と同じことで、二回忌に読経や法要などを行い死者の追福を祈ったものであろう。忌辰の類例としては桃生郡河南町光明寺板碑群（文献35）や石巻市多福院板碑群（文献36）などにみられ例は多い。同じく石窟の隣にある応長元年の板碑には「夫以慈父幽儀慈黄泉・環口以来相当鳥兎十旬過」などとみられる。旬は十日のことなので十旬とはおそらく百日のことであり、亡き父の百ヶ日の忌日に際して立てられたものであろう。百ヶ日という例は多いが十旬という例は少ない。

仙台市中野字只星敷の古澤輝男氏宅にある延慶4年板碑には長い銘文がある、それには「竊以率都婆是大日遍照・之本地常住之妙軀也爰・過去慈父幽靈七世安存・宅□□□所以來送七・ヶ年早霽春秋依之為恭・正路本年□□□□如作」とみえ、亡き父の7回忌のために立てたものであろう。「竊以」とは密かに私は思うということである（文献34）。第1行の「率都婆是大日遍照之本地」ということは、率都婆が大日如来の標識を指しており、種子がパン（金剛界大日如来）であると共にこの板碑が密教系ということを示している。類例としては、青森県藤崎町藤崎の延文4年板碑に「右塔婆是大日遍照」とみえる（文献37）。

（8）人　名

岩切地区及び七北田川下流に入名がみられる板碑は少なく、岩切地区的4基だけである。東光寺の本堂裏の永仁元年の板碑には「賀世住人・尼念性□」とある。賀世とは現在の宮城郡利府町加瀬付近をさしていると思われる。岩切字入山にある地蔵堂の永仁2年板碑には「□又：郎・小二郎・小三郎・本□二郎・三郎」と5人の俗名があり、兄弟か親戚であろう。岩切字羽黒前の正應2年の板碑には「信心孝子藤原高泰」とあり留守一族の一人と考えられている（文献1）。岩切字入山の弘安年間の板碑には「笠上入道□也」とある（第10図）。弘安6年の『留守家政譲状』には「こくうそう入とう」、弘安8年の『沙弥行妙譲状』には「こきう人道」と見え（文献14）、留守氏の譲状にはたびたび入道と出てくる。それらの入道は在家を指しており「笠上入道」も在家のひとりと考えられる。また、中世文書に「笠上入道」とはみられないが、「余目記録」には「留守のひくはん年来之事、芳賀、作藤、南宮、笠上すり殿と……」とあり（文献14）、笠上とは現在の多賀城市笠神を指しているといわれ（文献38）、「笠上入道」とは現在の笠神付近に所在していた在家だったのではないだろうか。

(9) 側頭

側頭は經典などから仏の教えを詩句によって述べたものである。側頭のある板碑は岩切地区と七北出川下流には合計9基と少ない。東光寺境内には4基ある。嘉慶2年のア種子板碑は右半分しかないが、それには「華藏如來成正覺時於其・身中普見一切衆生成正」とあり「大方廣佛華嚴經」の改作であると推定されている(文献39)。正應3年のア種子板碑は「諸佛念衆生・衆生不念佛・父母恩念子・子不念父母」とあり銘録の『孝義集卷上』に引用されているが実際の出典は不明である(文献39)。徳治2年のパン種子板碑は種子の両側に「諸行無常是生滅法・生滅々已寂滅為樂」とあり、「大般涅槃經」からである。種子の両側に側頭を彫る例は少ない。嘉慶2年のア種子板碑の「十方佛土中・唯有一乘法・無二亦無三・除佛方便説」は『妙法蓮華經方便品第二』からである。多賀城市南安楽寺板碑群の永仁6年のキリーク種子板碑と正應3年キリーク種子板碑、および仙台市高砂西光寺の正應2年板碑の計3基にみられる「光明遍照・十方世界・念佛衆生・攝取不捨」は『仏說觀無量壽經』からで埼玉県ではこの側頭が60%を占めているという(文献30)。仙台市中野にある愛宕神社境内の永仁3年のキリーク種子板碑は「願以此功德・普及於一切・我等與衆生・皆共成佛道」とあり『妙法蓮華經化城喻品第七』からである。仙台市中野字只園敷の延慶4年のパン種子板碑には種子の両側に「末法万年・余經悉滅・弥陀一教・利物偏増」とあり『西方要決真言通規』からである。

側頭のある板碑で最も古いのは正應2年(1289)、新しいのは嘉慶2年(1327)で9基の板碑はいずれも鎌倉時代のものであり、それらは東光寺境内・多賀城市新田の南安楽寺板碑群・仙台市高砂及び中野周辺の三ヶ所に集中している。

(10) 光明真言

光明真言のある板碑は東光寺境内で最も大きい嘉慶2年パン種子板碑にのみみられる(第12図)。種子と紀年号のあいだに「オンアボギヤベイ・ロシャナウマカ・ボダラマニハン・ドマジンバラハラバ・リタヤウーン」とある。最後の梵字は終止符なので発音しない。光明真言は大准提真言ともいい、大日如來の真言である。帰命(オン)、不空(アボギヤ)、光明遍照即ち大日如來(ペイロシャナウ)、大印(マカボダラ)、如意宝珠(マニ)、蓮華(ハンドマ)、光明(ジンバラ)、転(ハラバリタヤ)、菩提心(ウーン)と訳す。全体の意味は、帰命、効驗空しからざる遍照の大印即ち大日如來の五色光の印よ、宝珠と蓮華と光明の徳を有するものよ、転ぜしめよ、ということであるといふ(文献24)。この板碑は種子パン(金剛界大日如來)であり、光明真言があることから密教系であると考えられる。宮城県の中央部には光明真言のある板碑は非常に少なく、仙台市下愛子の弥勒寺に元亨2年板碑の例がある(文献25)。宮城県内では石巻地方に多く石巻市福井大瓜地区には光明真言のある板碑が数基みられる(文献40)。

(1) 名号板碑

名号板碑も非常に少なく、東光寺境内の石窟付近に1基ある。パン種子の無紀年号で、パンの下に「南無阿弥陀仏」とあるが、「陀仏」のみ一行にほらされている。名号板碑は通常上尊は名号のみで、この板碑には種子と名号が両方あり、このような例は比較的古い名号板碑にみられるという(文献41)。密教系種子がありこの名号板碑が何宗の板碑であるかよくわからないが、浄土系の板碑であることは間違いない。パンと名号両方がある板碑の例としては、青森県弘前市中別所の正和2年板碑(文献37)、石川県富来町大福寺に正中2年板碑(文献42)などがあるが全国的にみても類例は非常に少ない。宮城県中央部の名号板碑はほかに2基ある。仙台市六丁目コミュニティセンター隣の無紀年号板碑は名号が鏡文字にほらされている非常に類例が少ないとある(文献25)、名取市高館の大門板碑群には延慶3年の名号板碑があり(文献43)、それには「桙尼門阿」があるので時宗系の板碑である。宮城県内で最も多くの名号板碑がみられるのは石巻市鹿妻の専称寺跡で25基の名号板碑がある(文献44)。

(2) 結衆板碑

結衆板碑は板碑の造立に参加し結縁した人々の名前や人数が銘記されている板碑を指す。岩切地区と七北田川下流には合計8基の結衆板碑がある。以下、簡単に紹介していくことにする。岩切字洞ノ口の北華堂にあった結衆板碑は現在、東光寺の境内に移動されている。元應元年の紀年があり、断碑のため「□□四十三人」としかわからない。岩切字洞ノ口の加藤氏宅には3基の結衆板碑がある。1号碑は元應2年で「右為講衆廿三人亡盡也・乃至自己法界平等利益故也」とある。2号碑は嘉慶2年の断碑で銘文は「三十五人」としかない。3号碑も断碑で「別時」「已上廿人」などとある。多賀城市新田字北安楽寺の結衆板碑は正和元年の紀年号がある。大きな石材を使い重量感がある。銘文は「四十八日・念佛結衆・已上六十・八人敬白」とある(第12回)。多賀城市新田の南安楽寺板碑群には8基の板碑があるが、そのなかに1基の結衆板碑がある。紀年号は「正應三年二月彼岸第二」、「已上講衆・四十二人敬白」の銘文がある。多賀城市南宮の慈雲寺の境内に1基ある。紀年号は「永仁二年八月彼岸一番」で「四十八日別時衆・三十五人敬白」の銘文がある。仙台市中野字曲田の結衆板碑は摩滅が激しく銘文がよくわからぬが、「□□念佛」「□佛□十八□正和七」「三十八人」とある。

分布は仙台市岩切・中野・多賀城市新田・南宮の4ヶ所にある。特に集中しているのは岩切地区で5基の結衆板碑がみられ、七北田川の左岸に多いようである。最も古いのは正應3年(1290)、新しいのは嘉慶2年(1327)であり、鎌倉時代後期の36年間という短い期間に立てられている。紀年号の後に「彼岸一番」や「彼岸第二」などとみられるのは春秋の彼岸に際して立てられたものだろう。普通の板碑と比較すると結衆板碑には彼岸に造立されたものが多い傾向に

ある。種子はキリーク・ア・アク・パンなどがあり、アが多いようである。人数で最も多いのは多賀城市新田字北安楽寺の68人、少ないのは仙台市岩切字洞ノ口の20人、平均すると38人位で、一つの講集団が構成されていたと推測される。北安楽寺の板碑には「四十八日・念佛結衆」とあり、48時間の念佛を行つるために結縁した68人の念佛講によって立てられた板碑である。68人という人数はこの地区最大の講集団であったことがうかがわれ、板碑の大きさにもそれはあらわされている。同市南宮の慈雲寺にある結衆板碑にも「四十八日別時衆・三十五人」とあり、この板碑も念佛を48日間おこなったようである。「別時」や「別時衆」というのは、別時念佛講をさしており念佛講とは区別されている(文献34)。別時念佛とは10日や90日などと特定の期間に限つて行う念佛のことである。念佛を48日間行つたという例は宮城県では他に登米郡南方町板倉にある。正安2年の紀年号があり、「右為四十八日踊念佛結衆等」「五十余人結衆」などの銘文がある(文献45)。このような結衆板碑から考えると宮城県では鎌倉時代の後期に念佛や踊念佛などを行つる多人数の講集団が各地にあり、踊念佛の板碑は時宗の影響によって立てられたものであろう。宮城県中央部の結衆板碑はほかに6基ほど知られている。仙台市北目宅地の嘉元4年板碑には「結衆三十人也」とある(文献43)。仙台市川内東北大学理学部附属植物園のなかに1基ある。種子はカーン・マーン・ダで、正安4年の紀年号があり、「四十余人講衆」とみられ、高さ4m近い大きな板碑である(文献25)。多賀城市市川の弘安10年板碑には、「三十余人合力」「勧進西阿弥陀仏」とある(文献25)。松島町雄島板碑群の中には2基の結衆板碑がある(文献15)。1号碑は「貞和五年六月日一結徒衆等敬誌」とあり8段にわたつて142名の法名と俗名がみられる。2号碑は断碑で紀年号はないが3段にわたり33名の法名がみられる。松島町瑞巖寺境内の巻塚に1基ある。貞和4年の紀年号があり、紀年号の両側に21名の法名と俗名がみられる(文献15)。

結衆板碑で名前がみられるのは松島町の3基のみで俗名より法名が多い。その他の11基は人数のみである。松島町の3基には法名が多数みられ、また中世の靈場的な場所であった雄島や瑞巖寺(中世は円福寺)などに立てられているので、それらとの密接な関係がうかがえる。仙台市や多賀城市的結衆板碑はその立地や銘文から中世村落にあった講集団によって造立されたものと思われ、岩切や多賀城の周辺には多くの念佛講などがあり多数の人々が活動していたと考えられる。

4. まとめ

- 1 七北出川の下流の板碑で最も多くの板碑が分布しているのは岩切の東光寺境内で、次に多賀城市的新田地区であり、丘陵の裾部や自然堤防上に立地している。
- 2 石材は安山岩や砂岩が多く使用されており、粘板岩の板碑がみられるのは東光寺を中心

とした岩切のみである。

- 3 板碑の大きさは51～100cmのものが多く、200cm以上の大型板碑は岩切にみられる。
- 4 形態は素材に左右されているものがほとんどで、全体を加工整形している板碑は岩切字入山の地蔵堂付近の阿弥陀曼荼羅板碑と岩切字羽黒前の阿弥陀三尊種子板碑の2基である。また、東光寺境内の無紀年号パン種子板碑にみられる擦切痕は全国的にみても類例は非常に少ない。
- 5 種子はア・パン・キリークが多い。岩切は種子の種類が多く27種、七北田川下流は13種みられる。東光寺境内の嘉暦2年板碑のパンは空点が丸く彫られており、このような例は関東地方に二三みられる。
- 6 岩切で最も古い板碑は弘安6年(1283)で新しいのは延文5年(1360)である。七北田川下流で古い板碑は弘安9年(1286)で新しいのは応永23年(1416)である。板碑造立の頂点は13世紀後半から14世紀前半である。
- 7 造立趣旨は追善板碑が多く、逆修板碑はみられない。仙台市中野字只屋敷にある延慶4年板碑には密教系の銘文がみられる。
- 8 人名がみられる板碑は岩切にのみ4基ある。それらは「尼念性□」「□又二郎・小二郎・小三郎・本□二郎・三郎」「藤原高泰」「笠上入道」などである。
- 9 傷頬のある板碑は9基あり、「仏説觀無量寿經」が多い。年代は鎌倉時代の後期で、東光寺・多賀城市南安楽寺・仙台市高砂および中野の3ヶ所に集中している。
- 10 光明真言のある板碑は東光寺の嘉暦2年パン種子板碑のみである。
- 11 名号板碑は東光寺に1基ある。無紀年号であるがパン種子があり、名号と種子の両方がみられる板碑の例は少ない。
- 12 結衆板碑は仙台市岩切・中野・多賀城市新田・南宮の4ヶ所に合計8基あるが、岩切には5基の結衆板碑があり集中している。年代はすべて鎌倉時代後期である。内容的には48日間の念佛を行なうために集まつた念佛講や別時念佛講の人々が造立した板碑などがあり、銘文にみられる人数は68～20人で平均すると38人位である。

引用文献

- 宮城いしづみ会(編) 仙台市文化財分布調査報告Ⅳ 仙台市東光寺板碑群 仙台市文化財調査報告書第93集 仙台市教育委員会 昭和61年3月
- 松平定信(編)『東古十種』碑銘之部 宽政12年
- 石川伸一郎 仙台市柳生の板碑 柳生一土地区画整理事業に伴う柳生地区の遺跡分布調査と、松木遺跡の発掘調査報告書— 仙台市文化財調査報告書第95集 p p 217~248 仙台市教育委員会 昭和61年12月
- 石黒伸一郎 仙台市文化財分布調査報告Ⅴ 七北田川下流の板碑 仙台市文化財調査報告書第121集 仙台市教育委員会 昭和63年3月
- 伊東信雄 岩切村東光寺境内発掘の板碑と其出土状態 仙台郷土研究2—8 p p 1~13 仙台郷土研究会 昭和7年8月
- 白鳥良一・加藤道男 岩切瀬ノ堀遺跡 東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ 宮城県文化財調査報告書第35集 p p 161~274 宮城県教育委員会 昭和49年3月
- 工藤哲司・金森安孝 昭和56年度鴻ノ堀遺跡発掘調査報告書 仙台市文化財調査報告書第32集 仙台市教育委員会 昭和56年3月
- 青沼一民・長島栄一 昭和57年度鴻ノ堀遺跡発掘調査報告書 仙台市文化財調査報告書第44集 仙台市教育委員会 昭和57年12月
- 森 隆男 岩切城跡周辺の遺跡分布調査報告 仙台市文化財分布調査報告Ⅲ 仙台市文化財調査報告書第84集 p p 14~23 仙台市教育委員会 昭和60年3月
- 野崎 卓 中世宮城内部の若干の考古資料—留守氏関係の遺跡・遺物— 東北学院大学東北文化研究所紀要第5号 p p 399~416 東北学院大学東北文化研究所 昭和54年3月
- 北村・石井・寒川・中川 仙台地城の地質 地域地質研究報告5万分の1地質図幅秋田(6) 第98号 通商産業省工業技術院地質調査所 昭和61年3月
- 北村・大沢・中川 吉岡地域の地質 地域地質研究報告5万分の1地質図幅秋田(6) 第88号 通商産業省工業技術院地質調査所 昭和58年9月
- 石井・柳沢・山口 塩釜地域の地質 地域地質研究報告5万分の1地質図幅秋田(6) 第99号 通商産業省工業技術院地質調査所 昭和58年11月
- 仙台市史編纂委員会 「仙台市史8 資料篇1」 仙台市役所 昭和28年3月
- 宮城いしづみ会(編)『松島の板碑と歴史—雄島の板碑と石窟調査報告—』 宮城いしづみ会 昭和57年3月
- 茂庭邦元 古川附近の古碑と古城『古川市史上巻』 p p 184~193 古川市 昭和43年9月
- 佐藤雄一 宮城県の板碑—型式の伝播と初発期板碑を中心にして— 石巻市史編纂資料伊守水門第6集 p p 2~13 石巻市教育委員会 昭和58年3月
- 佐藤正人 「御膳娘板碑群」 潟谷町教育委員会 昭和55年3月
- 佐藤雄一 板碑『わがまち河南の文化財』 p p 65~82 河南町教育委員会 昭和61年11月
- 佐藤正人 宮城県『板碑の総合研究2 地域編』 p p 31~41 柏原房 昭和58年11月
- 松本源吉 陸前名取郡の古碑—造跡— 奈古字9—4 p p 187~199 東京考古学会 昭和13年4月
- 佐藤雄一 昭和56年度文化財調査報告—石巻市南境地区的板碑— 石巻市文化財だより第12号 p p 3~10 石巻市教育委員会 昭和58年3月

- 23 大衡村誌編纂委員会 「大衡村誌」 大衡村 昭和58年7月
- 24 川勝政太郎 「梵字講話」 河原書店 昭和55年10月
- 25 松本源吉 陸前宮城郡の古碑 「仏教考古学論叢」 考古学評論第3輯 p p 107~159 東京考古学会 昭和16年5月
- 26 嶋部清五郎 「板碑懸説」 鳥鳴書院 昭和8年9月
- 27 埼玉県立歴史資料館 「埼玉県板石塔婆調査報告書」 埼玉県教育委員会 昭和56年3月
- 28 坂田一二夫 建長の板碑巡査(7) 歴史考古学第14号 p p 51~59 歴史考古学研究会 昭和59年10月
- 29 千々利利 『板碑とその時代—てちかな文化財・みじかな中世—』 平凡社 昭和63年3月
- 30 有元修一 埼玉県 「板碑の総合研究2 地域編」 p p 101~109 柏書房 昭和58年11月
- 31 紫桃正隆 「長塙谷の板碑群調査報告—桃生郡北上町一」 桃生郡河北地区教育委員会 昭和58年8月
- 32 紫桃正隆 「長塙谷板碑群第二次調査報告—桃生郡北上町一」 桃生郡河北地区教育委員会 昭和63年1月
- 33 紫桃正隆・中村光一・藤倉元吉郎・高橋精一 「小泊遺跡—中世板碑造立地の発掘調査—」 河北地区教育委員会 昭和61年3月
- 34 中村 元 「佛教語大辞典縮刷版」 東京書籍 昭和56年5月
- 35 三宅赤誠 桃生郡河南町鹿又光明寺の板碑について 石巻地方研究創刊号 p p 7~37 ヤマト屋書店 昭和57年11月
- 36 佐藤唯一 日輪山多福院の板碑群 石巻市文化財だより第4号 p p 2~9 石巻市教育委員会 昭和51年6月
- 37 嘴海 秀・根井敏隆・戸澤 武・小鎌真三 青森県の板碑 青森県立郷土館調査報告第15集歴史-2 青森県立郷土館 昭和58年3月
- 38 角川日本地名大辞典編纂委員会 「角川日本地名大辞典4 宮城県」 角川書店 昭和54年12月
- 39 加藤政久 中世率婆の韻文・経文・仏文の出典解明 「日本石仏団典」 p p 438~452 国書刊行会 昭和61年8月
- 40 佐藤唯一 石巻市鶴井大瓜地区的板碑分布調査 石巻市文化財だより第13号 p p 2~12 石巻市教育委員会 昭和59年3月
- 41 石村喜英 項目、名号、十三仏板碑 「板碑の総合研究1 総論編」 p p 120~157 柏書房 昭和58年2月
- 42 櫻井其一 「石川縣銘文集成: 中世金石文編」 北國出版社 昭和46年1月
- 43 松木源吉 陸前名取郡の古碑 考古学8-2 p p 76~106 東京考古学会 昭和12年2月
- 44 佐藤唯一 石巻市尊称寺廐寺跡の名号板碑について 「石巻地方の歴史と民俗」 p p 83~89 石巻工業高等学校 昭和48年8月
- 45 今井雅晴 踏り念仏の板碑 時衆研究第95号 p p 1~8 時宗文化研究所 昭和58年2月



写真1 1号碑全形(第2回1)



写真2 1号碑種子



写真3 2号碑全形(第2回2)



写真4 2号碑種子



写真 5 2号碑上部二本線

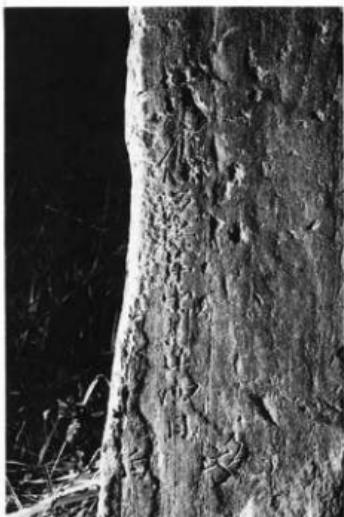


写真 6 2号碑紀年号



写真 7 2号碑下部二本線



写真 8 3号碑全形(第2図3)



写真9 3号碑種子



写真10 4号碑全形 (第2図4)



写真11 4号碑種子



写真12 5号碑全形 (第2図5)



写真13 5号碑種子



写真14 5号碑鉢文



写真15 6号碑全形（第3図1）



写真16 6号碑種子



写真17 7号碑全形 (第3図2)



写真18 8号碑全形 (第3図3)



写真19 9号碑全形 (第3図4)



写真20 10号碑全形 (第3図5)

2 東光寺遺跡 6・10号石窟写真測量調査

アジア航測㈱ 矢 島 義 則

1. 目 的

仙台市岩切東光寺石窟仏群で、道路工事によって掘削される石窟のうち、保存状態の良好な6号石窟と道路に面した外壁面に彫り込まれた家形の形状を呈する10号石窟の写真測量による計測記録を行った。

2. 調査経過

6号石窟の写真測量は、昭和61年11月に奥壁（「地蔵菩薩坐像」）を撮影し、図化を行った。さらに、石窟全体の移築が不可能となった昭和62年8月、石窟内壁全体の形状を記録するために写真測量を実施した。その際、10号石窟の家形の彫り込みについても写真撮影を実施し、昭和63年2月に図化を行った。（表1）

3. 調査内容

3.1 計 画

文化財の写真測量を行う場合、対象となる文化財を現地で確認し、記録保存の見地にたって余すところなく、かつ、正確に実施計画を立案する必要がある。

現地調査における留意点には、次の事柄が上げられる。

1) 位置

2) 年代・性格

3) 文化財の形状

4) 計測範囲

5) 記録する内容

6) 精度・縮尺・表現方法

7) 基準点・座標系

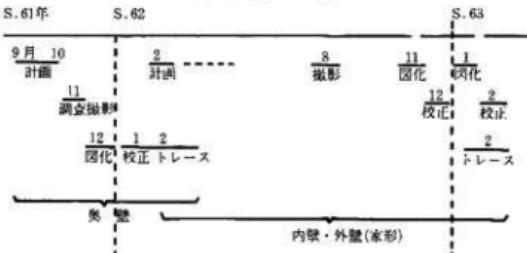
8) 測量に必要な期間

東光寺石窟の測量調査で

は、作業に先立ち現地調査

を行い、入念に計画を立案した。6号石窟は、樹木で覆われている上、当初、入口が木製の扉で塞がれ、内部は薄暗く照明の必要があったため、使用カメラやフィルムの選定、電源の確保に留意した。

表1 経 過



また、10号石窟およびその外壁面の家形の彫り込みは、その大きさから、少し離れた道路上からの撮影となった。

3.2 基準点

撮影時に設置し写真内に写し込む基準点は、カメラ位置を求め、対象物の幾何学的形状を再現し、正確な測定を行うための重要な基準となる。

写真画像による空間を定位するために必要な基準点の要件は、平面位置 (X 、 Y) が与えられる点が 2 点以上と、標高 (H) を表示する 3 点以上の点が最低限必要となり、この条件を満たすようにそれぞれの対象面に基準点を設置する。

ただし、これらの基準点は各対象面を計測するためのもので、絶対的な位置を与えるものではなく、各面における任意の基準点としている。

1) 壁面

通常の写真測量と異なるのは基準点の与え方である。

6号石窟の壁面は、奥壁と左右壁の 3 面がある。それぞれの壁面の記録は第一にその凹凸形状を正確に求めることにあるので、壁面に対しつてほぼ平均的な基準面を設定する。

これには上部に取り付けた棒から 2 本の垂球を下ろし、この間の垂直面が基準面となる。(図1の斜線部)

これによって高さの基準が与えられたことになり、写真の傾きを決定することができる。

次に、位置のデータ (X 、 Y) を表示する必要がある。これは写真に縮尺を与えることになるので、垂直に下ろした垂球の糸に単位長さ(例えば、50cm)を示す標識を取り付けておく。(図1)

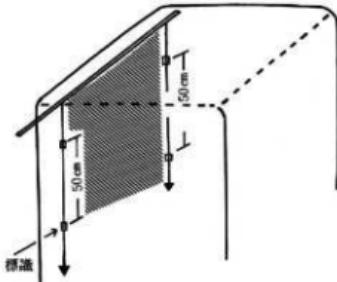


図 1

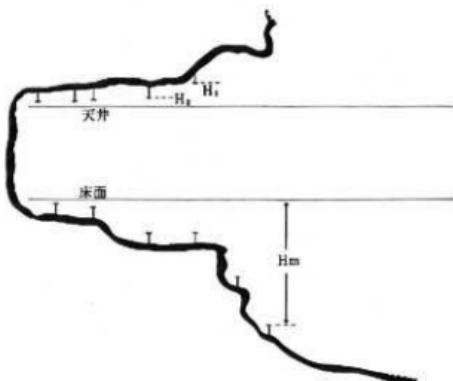


図 2

2) 床面・天井

平面的な対象面であるので、空中写真測量のように点による基準によっても可能であるが、狭い場所で短時間で必要な基準を与えるため、撮影時にスケールを撮影範囲内に水平にセットするとともに、高さだけを与えた釘を基準点とする。これは天井部も同様である。標高の基準は任意であるが、各面ともレベルによってそれぞれ水平面を与え、任意の標高を与えている。(図2)

3) 外 壁

10号石窟の外壁に彫り込まれた象形形状を記録するための基準点は、壁面と同様の考え方で設置するが、範囲が大きいので上から垂球を下ろすことはできない。そこで測定面にはほぼ平行になるように2本のポールを垂直に立てて基準面を表示した。(写真1)

このように撮影写真内に種々の基準を表示することによって、一対の写真によって構成される立体モデルの縮尺や傾きを決定し、図化投影面を設定することができる。

表2 広角測量カメラデータ

(レンズデーター)	
レンズ枚数	8
レンズ構成	5
F - 級 オート	4.5
焦点距離	38.6mm
画面サイズ	53×53mm
画角	対角線 90° 水平線 72°
絞りストップ	4.5-5.6・8-11-18-22
焦点距離調節	∞ ~ 0.3m
フィルターサイズ	シリーズ63
カメラ重減	1,000g



写真1 10号石窟と基準

3.3 撮影

近接写真測量を行う場合、最も重要な部分は撮影であり、写真測量理論を十分考慮した上で撮影機材や方法、撮影条件を整え、計測を目的とした立体写真撮影を行う必要がある。

1) 壁面

6号石窟内の撮影では撮影距離が全ての面に対して1m前後しかとれず、非常に近接した立体写真撮影となった。このような撮影では、近距離用の計測用カメラが有効に用いられる。

使用したカメラは、地上写真用カメラ・ハッセルブラッドMKW/E ($f = 38\text{mm}$) で、このカメラは広角でありながらレンズの歪みが少なく、周辺まで光量のむらなく撮影ができる。カメラの性能諸元は表2に示した通りである。

壁面の撮影では、三脚上

のステレオ架台に2台のカ

メラを水平に設置し、できるだけ広範囲を写すように距離をとり、かつ、垂直でセットした基準面に平行に撮影する。(写真2) この基準面と撮影投影面との平行度が少ないと一般の図化

表3 撮影諸元

対象	距離	基線長	写真縮尺	露出	枚り	モデル数
奥壁	1.88 ^m	20 ^m	1/49.5	1/2~1/4 sec	11	1
左壁面	1.60	20	1/42.1	1/4~1/30	8	2
右壁面	1.60	20	1/42.1	1/4~1/30	8	2
天井部	1.50	20	1/39.5	1/4~1/30	8	4
床面	1.50	20	1/39.5	1/4~1/30	8	5
外壁内	8.0	任意	1/210	1/125~1/30	16	2



写真2 6号石窟内のステレオカメラ



写真3 6号石室奥壁と基準線

機にはセットできなくなってしまう。撮影諸元およびモデル数は表3に示した通りである。

撮影では、カメラワークとともにライティングも重要で、暗部の撮影では50m程離れた場所から電源をとり、写真用ランプによって照明した。一方、外光の影響も大きく、撮影面の大き



写真4 10号石室の撮影風景



写真5 解析図化機

な露光差は計測の支障となるため、入口をシートで覆ったり、太陽光の動きにも注意して撮影を行った。また、計測用写真として不充分なものは再撮をして補った。

2) 床面・天井

床面、および天井の撮影では、カメラを上部あるいは下部から対象面に平行撮影できるようアルミ材の撮影架台を作り、撮影した。

3) 外壁面

10号石窟の撮影では、対象面が比較的大きいため、少し離れた道路上から行うことになったが、対象の影り込み部分の位置が高く、かつ、雑草の障害があるため、車の上より1カットずつ撮影し、ステレオモデルを構成した。(写真4)

撮影したフィルムは、直ちに自動現像機によって現像処理を行い、測定用ポジや密着写真的作成を行った。

3.4 図化

撮影した写真ネガから作成したポジフィルムを図化機にセットする。

図化機は、ツァイス社製精密図化機メトログラフFおよびマトラ社製解

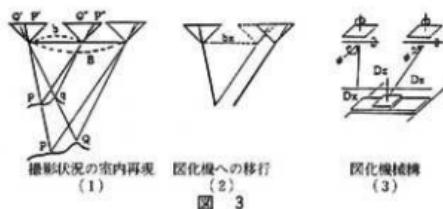


図 3

析図化機トラスター（写真5）を使用した。

これらの図化機は一般の航空写真測量に使用されている図化機で、一対の写真を基準データによって撮影された時と同じ条件を与え、立体的な空間モデルを作り出すことができる。この撮影状況の室内再現の原理は、図3-1の様に同じ投影機構によれば縮小した立体モデルを作れることによっている。そして、この原理を利用した図化機によって機械的に再現することができ（図3-2）、図化機の投影器にいろいろな変量を与えることによって写真から3次元的データが得られる。（図3-3）

これらの操作を標準といい、完全に標定された立体像（機械モデル）が得られると、測標（メスマーカー）を利用してこの立体像を描画し、等高線の測定を行うことができる。

図化の場合の基準は、撮影時の基準面に合わせ、さらに対象を最適に表現できるような位置にセットする。石窟内の図化では、それぞれ次に示す部分を基準にして測定した。

- I) 奥壁 壁面の最奥部（左下）
- II) 壁面 奥壁との接合面
- III) 天井 奥壁との接合面、上を十とする。
- IV) 床面 奥壁との接合面、下を一とする。
- V) 外壁 家形周辺の壁面、奥を一とする。

等高線および縮尺については表2に示した通りであるが、奥壁にみられるような仏像の表現では、図化縮尺を1/2で行い、より細かい等高線で描画することによってその形状が客観的データとして浮き上がってくる。また、表面の形状もできるだけ記録するため、現地でのスナップ写真を観察しながら忠実に図化を行った。

一方、その他の石窟内壁面では、微妙な形状変化は意味をもたないので、全体としての凹凸

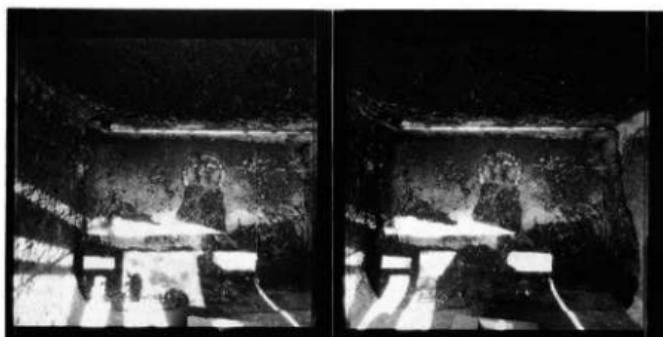


写真6 6号窟奥壁の立体写真

形状の把握を目的として、2cmの等高線で描画し、岡化段階では縮尺1/2で岡化を行った。外壁の窓形の彫り込みは、10cmの等高線で、縮尺1/10の表現とした。(付図2)

3.5 整理・岡化

測定岡化によって得られた素図を十分に検討し、文化財記録資料として有意な作図整理を行った。壁面および天井・床面の図はこの段階で1/2に縮小し、縮尺1/4の図を作成した。現場とのチェックなどによる校正を行った後、製図を行い、成果図とした。(付図1)

4. おわりに

今回調査した石窟群は、現代の社会的要請を受けてその姿を消すことになった。移築復元という方法で残しても、その文化財が有していた場としての価値は失われている。しかし、数多くの記録写真や計測資料の中で写真測量による写真記録は、立体という形で再現できる画像記録であり、客観的な計測用写真資料であることから、後の研究資料としても大きな価値をもつものといえよう。

最後に、本作業の実施に当たって、撮影、測定に奮闘した林崎俊哉君、並びに、石窟調査手法に写真測量を採用し、多人なる御指導を賜わった仙台市教育委員会に心からの謝意を申し上げる次第である。

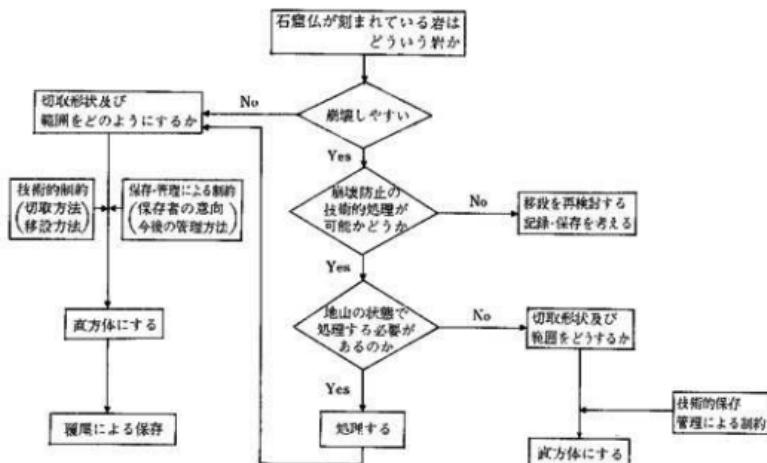
参考文献

- 矢島 義則 「文化財と写真測量技術」 APA - 3
写真測量技術協会 1977年
- 矢島 義則 「三原田遺跡の航空写真測量」
三原田遺跡第1巻 群馬県企業局 1980年
- 日本写真測量学会編 「写真による三次元測定」 共立出版 1983年
- 文化庁文化財保護部 「埋蔵文化財発掘調査の手引」 第一法規 1975年
- 矢島 義則 「貝層体積の求積」 伊皿子貝塚遺跡本文編・港北伊皿子貝塚遺跡調査会 1981年
- 矢島・並木 「文化財測定と土器展開写真」
APA18 日本測量調査技術協会 1981年
- 矢島 義則 「四ッ塚における写真測量調査」 四ッ塚古墳群 山梨県教育委員会 1985年

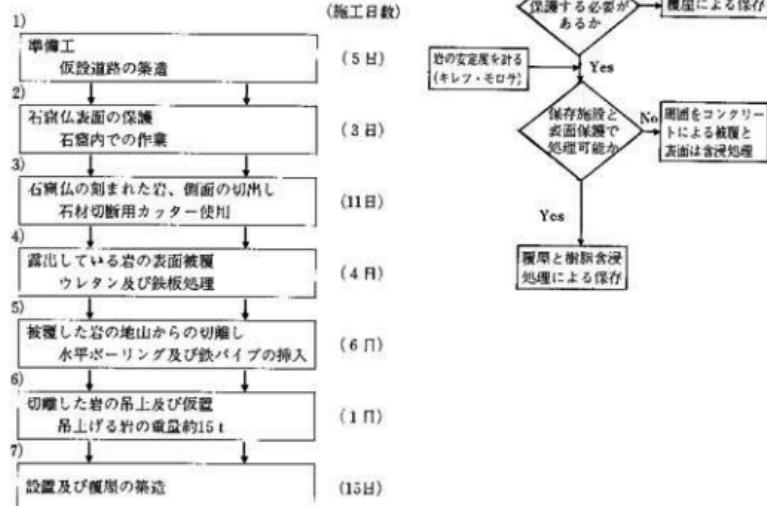
3 東光寺遺跡 6号石窟仏切取保存工事概要

宮城県仙台東土木事務所 土 生 道
株 根 本 建 設 松 木 吉 信

I 石窟仏の切取移設の計画フロー図



II 施工順序図



尚、各工程の詳細については、以下に述べる。

III 施工詳細

施工方法

1. 石窟仏のまわりを機械切土した後、仮設道路を作り石窟仏の移設工事を始める。

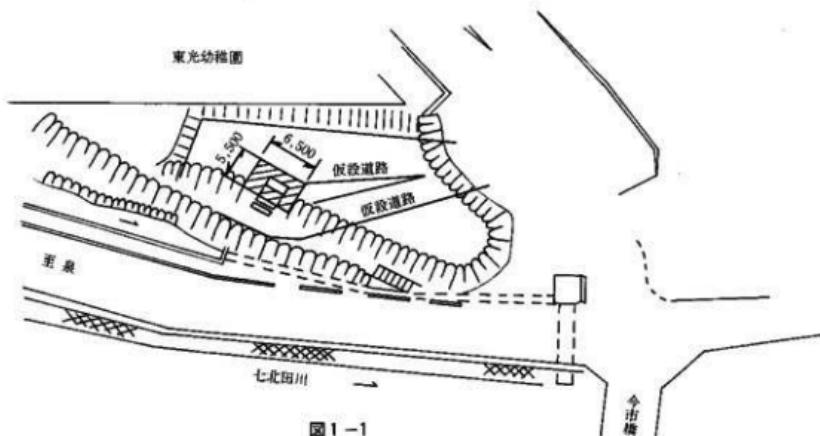


図1-1

石窟仏の移設にあたり、下図1-2のように幅6,500×5,000mmに残し施工をする。(5日)

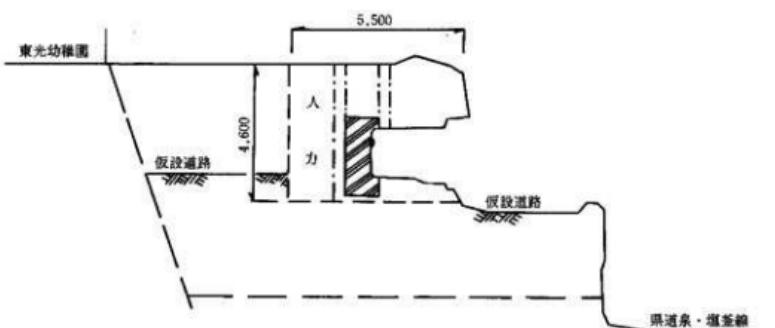
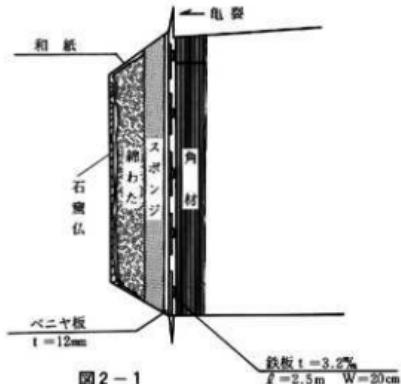


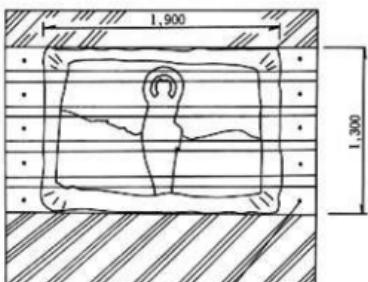
図1-2

2. 切取りした岩片が石窟仏表面に当たらないように次のような処置を行う



作業手順

- 1 石窟仏両側
切り取り作業(人力)
 - 2 両側切り取りした箇所に
アンカーボルト打込
 - 3 下から2段目まで鉄板を
取り付け作業を行う
 - 4 下から2段目ぐらいまで
和紙をはる
 - 5 下から2段目ぐらいまで
ペニヤ板を入れる
 - 6 下から2段目ぐらいまで
綿わた・スポンジを入れる
 - 3~6までの一連の作業を
上段まで行った後
 - 7 角材を入れ上の亀裂
からのせん断を防ぐ
- 表面保護完了 (3日)



3. 表面保護完了後表土を剥ぎ取り、石材切断用カッター（レール式）にて上部より2重に
2,500×1,300及3,100×4,000mmに深さ40cmずつカッターを入れ、人力にて水平に（図3-11）
1→12段へと切下げてくる。

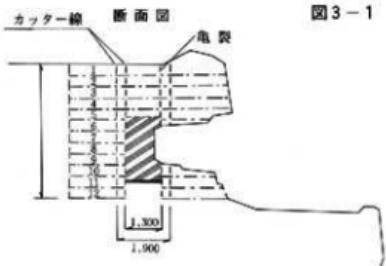
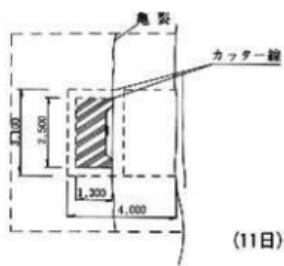


図3-1



4. 切下げた後、すみやかにウレタン⁹を吹きつけ表面を保護した後、水平ボーリングを行う前に鋼製の板（ $t = 3.2 \text{ mm}$ ）にて周囲を保護する作業を行う。（図 4-1）

⁹インサルパック #115; ウレタンは断熱効果が大きく外気に対処する。

5. 石窟仏を幅 $2,500 \times 1,300$ 、高さ $2,500 \text{ m}$ に残した後、地山と切り離すために水平ボーリングの作業を行い、ボーリング穴 $\phi 89.5\%$ 22ヶ所の位置に鋼管（ $\phi 76.3\% \cdot t = 4.0 \text{ mm} \cdot l = 2,000$ ）を入れ H型鋼（ $300 \times 300 \times 10 \times 15$ ）に溶接をし、吊り上げるまでの作業を行う。（図 5-1）

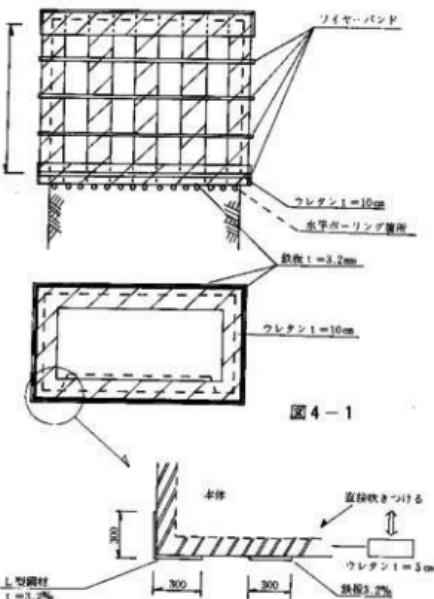


図 4-1

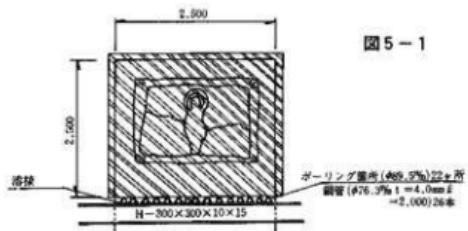
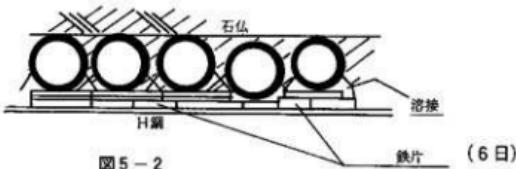


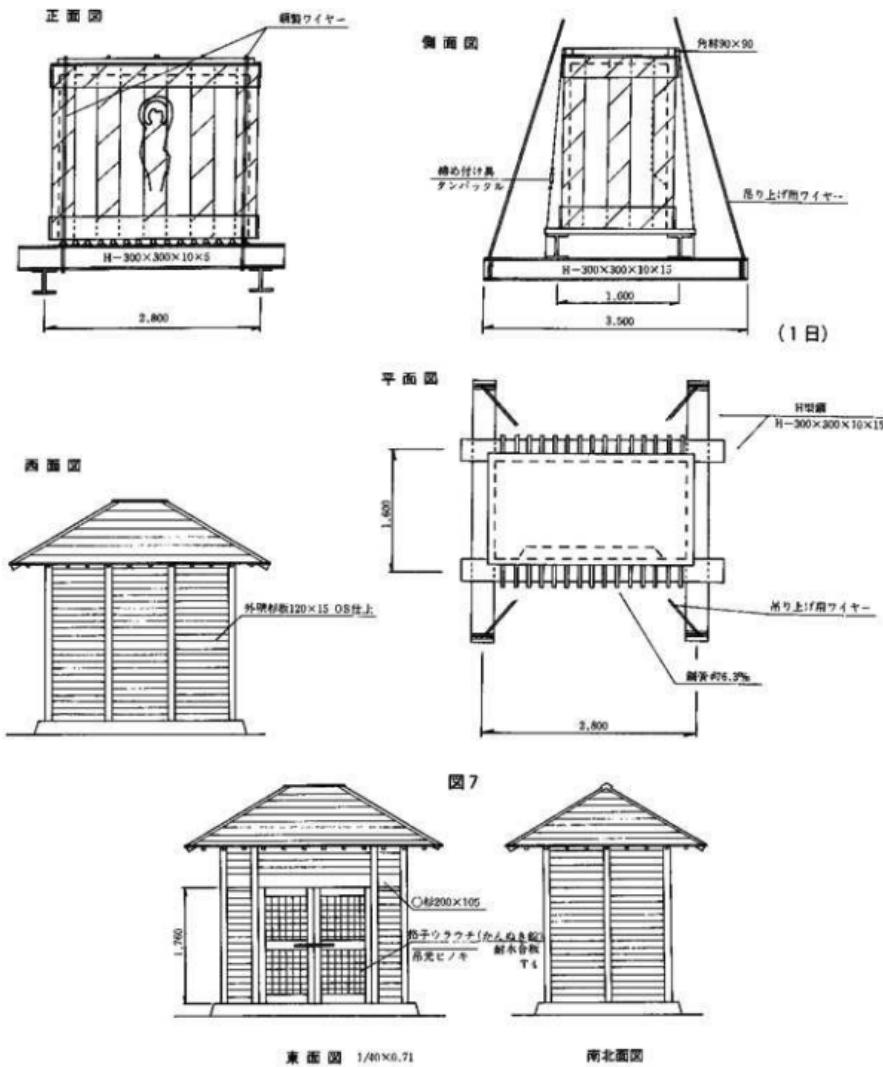
図 5-1

なお、22ヶ所に鋼管を入れた後、ボーリングマシンで切り離せなかった両端をノミ等のようないものを使用し人力にて切り離し鋼管を入れる。ボーリング穴の不陸は鋼管を鉄片で支え溶接して抑える。（図 5-2）



6. H型鋼を四方に組み、さらに石窓仏をH型鋼に鋼製のワイヤーにて包み固定し、下段のH型に吊り上げ用のワイヤーを掛け60t 吊トラッククレーンにて指定箇所へ移設する。下図に示す。

図6



計算資料

a) 単管の検討

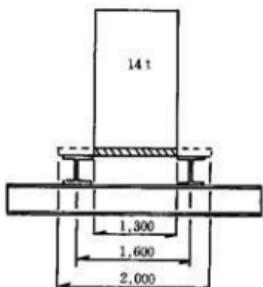
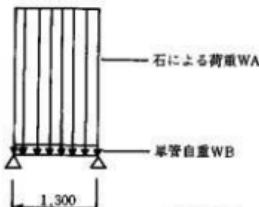


図8



単管外径76.3% 厚さ4.0%
断面積9,085cm²
断面係数15.6cm³

$$WA = \frac{14}{1.300} \times 15 = 0.718t/m$$

$$WB = 7.13kg/m \times 10^{-3} = 0.007t/m$$

$$WA + WB = 0.718 + 0.007 = 0.725t/m$$

$$S_{max} = \frac{1}{2}wl^2 = \frac{1}{2} \times 0.725t/m \times 1.3m = 0.471t$$

$$M_{max} = \frac{1}{8}wl^3 = \frac{1}{8} \times 0.725t/m \times (1.3)^2 = 0.153t \cdot m$$

$$T b = \frac{M_{max}}{w} = \frac{0.153 \times 10^6 kg \cdot cm}{15.6cm^3} = 981kg/cm^2 < 2100kg/cm^2$$

∴OK

$$Y c = \frac{5w^4}{384E I} = \frac{5 \times 0.727 \times 10 \times 1300^4}{384 \times 2.1 \times 10^6 \times 59.5} = 0.24cm = 2.4mm$$

但し、つぶれ防止のため、コンクリートを詰める。

b) 単管下のH鋼の検討 (H-300×300×10×15を用いる場合)

● 検討するH鋼が受け持つ荷重P

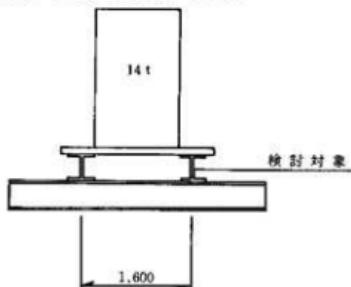
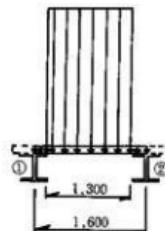


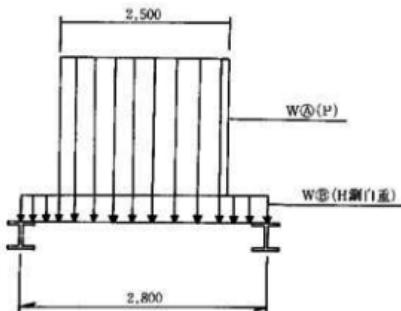
図9



$$P = \text{反力 } R \text{ ①} = R \text{ ②} = \frac{W_A \times 1.3}{2} + \frac{W_B - 1.6}{2} = \frac{0.718 \times 1.3}{2} + \frac{7.13 \times 10^4 \times 1.6}{2} = 0.472 t$$

● 荷重 P に対する H 鋼の検討

図10



$$W(A) = \frac{P \times 15}{2,500} = \frac{0.472 \times 15}{2,500} = 2.832 t$$

$$W(B) = 0.094 t/m \text{ (H鋼自重)}$$

$$S_{max} = \frac{1}{2} \times (W(A) \times 2.5m + W(B) \times 2.8m) = \frac{1}{2} \times (2.832t \times 2.5m + 0.094 \times 2.8m) = 3.672 t$$

$$\begin{aligned} M_{max} &= \frac{1}{8} \times W(B) \times (2.8)^2 + \frac{1}{2} \times W(A) \times 2.5 \times \frac{2.8}{2} - W(A) \times \left(\frac{2.5}{2}\right)^2 \times \frac{1}{2} \\ &= \frac{1}{8} \times 0.094 \times (2.8)^2 + \frac{1}{2} \times 2.832 \times 2.5 \times \frac{2.8}{2} - 2.832 \times \left(\frac{2.5}{2}\right)^2 \times \frac{1}{2} \\ &= 0.092 + 4.956 - 2.213 = 2.835 t \cdot m \end{aligned}$$

$$T b = \frac{2.835 \times 10^6}{1137} = 245 \text{ kg/cm}^2 < 2400 \text{ kg/cm}^2$$

$$I = \frac{3.672 \times 10^9}{27} = 136 \text{ kg/cm}^4 < 1400 \text{ kg/cm}^4$$

$$\begin{aligned} Y c &= \frac{5.5 \text{ MRC } I^2}{48 E I} + \frac{5 W(B) I^4}{384 E I} = \frac{5.5 \times 2.832 \times (2.8)^2 \times 10^9}{48 \times 2.1 \times 10^9 \times 17354} + \frac{5 \times 0.094 \times (2.8)^4 \times 10^9}{384 \times 2.1 \times 10^9 \times 17354} \\ &= \frac{1.221 \times 10^{11}}{1.749 \times 10^{12}} + \frac{2.868 \times 10^{10}}{1.399 \times 10^{12}} = 0.070 + 0.002 = 0.072 \text{ cm} = 0.72 \text{ mm} \end{aligned}$$

工事使用材料総括表

名 称	型 状 尺 法	単 位	使 用 数 量	製 造 会 社 名
アンカーバルト	$\phi 9 \text{ mm } l=140 \text{ mm}$	本	10	
鉄板	$t=3.2 \text{ mm } 0.20 \times 2.50$	枚	5	
船底板		m ²	0.54	
スパンジ		m ²	0.30	
インサルバーフ	#115	セット	9	株式会社
鉄板	$t=3.2$	kg	510	
鋼管	$\phi=76.3 \text{ mm } t=4 \text{ mm } l=2,000$	本	26	鉄道機械
H型鋼	H-300×300×10×15	本	4	三澤商事
砂利	80~0	m ³	4.0	仙台砂石販
レデミクストコンクリート	160-8-40	m ³	13.5	仙臺コンクリート(株)





11



12



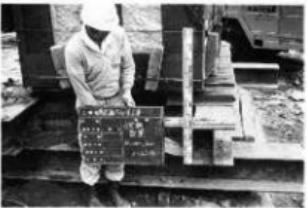
13



14



15



16



17



18



19



20



写 真 図 版

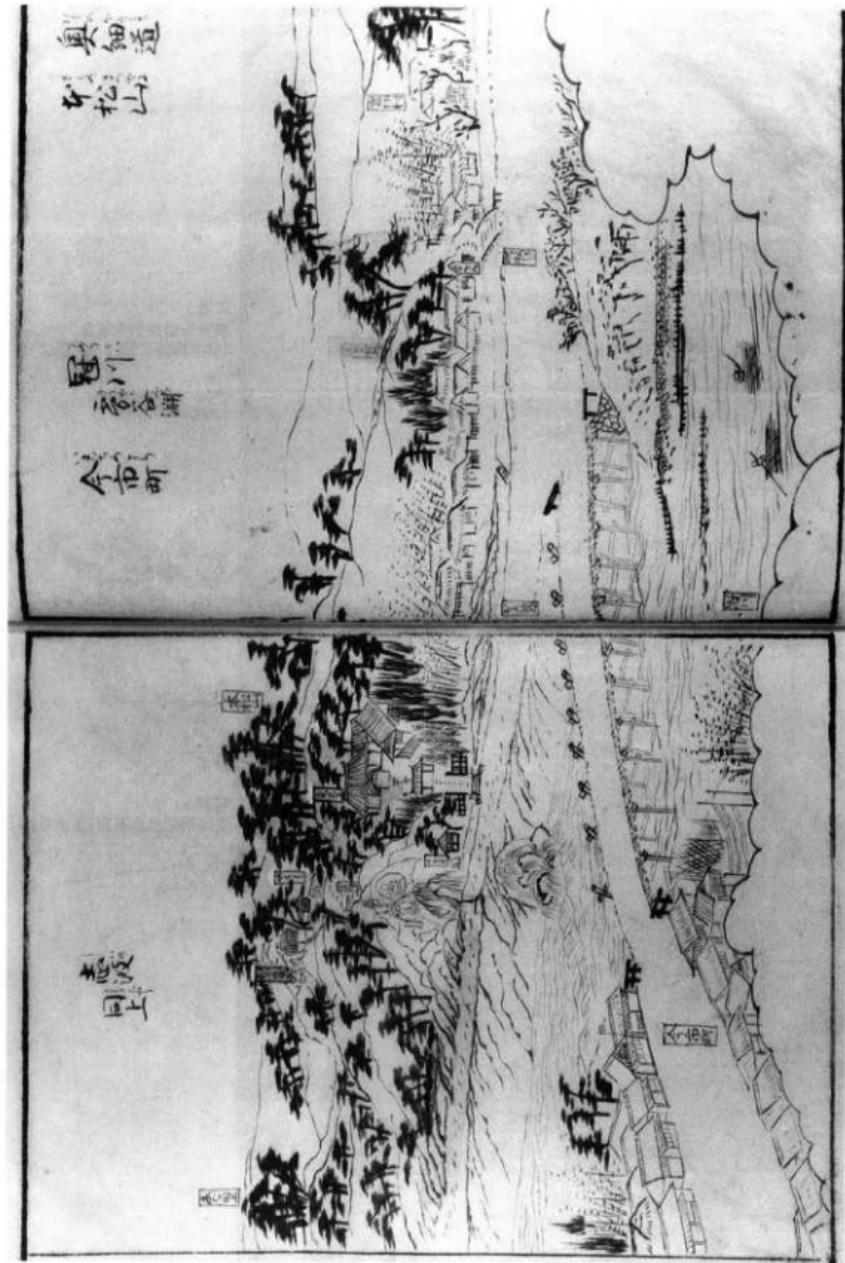


写真1 「奥州名所图绘」 東光寺周辺 (文化・文政年間、宮城県図書館蔵)



写真2
東光寺遺跡航空写真
(発掘調査区周辺・北西より)



写真3
遺跡周辺航空写真(西より)



写真4
旧今市橋橋脚跡(南より)



写真5 1・2・3号石窟(調査前・東より)



写真6 1号石窟(正面)

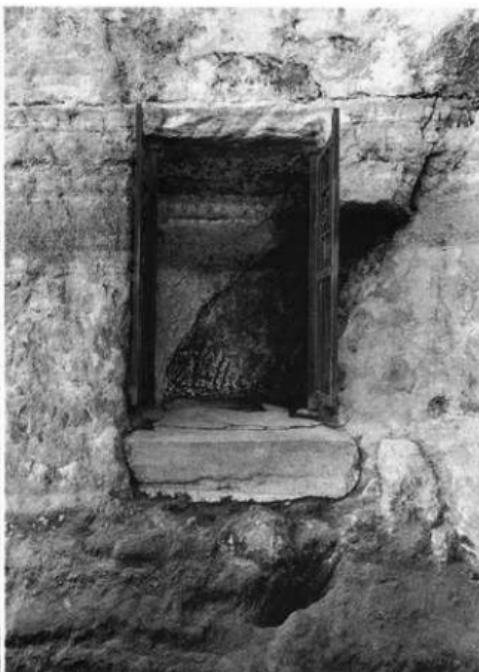


写真7 2号石窟(正面)



写真8
3号石窟(正面)



写真9
3号石窟右壁・床面
(壇・ピット)



写真10
3号石窟右壁基部・工具痕

写真11
2号土坑底面板碑出土状況
(西より)



写真12
第1トレーニ (西より)



写真13
4～8号石窟
(調査前・南東より)



写真14
4～8号石窟
(調査前・北西より)



写真15
4号土坑(南より)



写真16
4号土坑人骨出土状況
(南より)





写真17 第2トレンチ(南より)

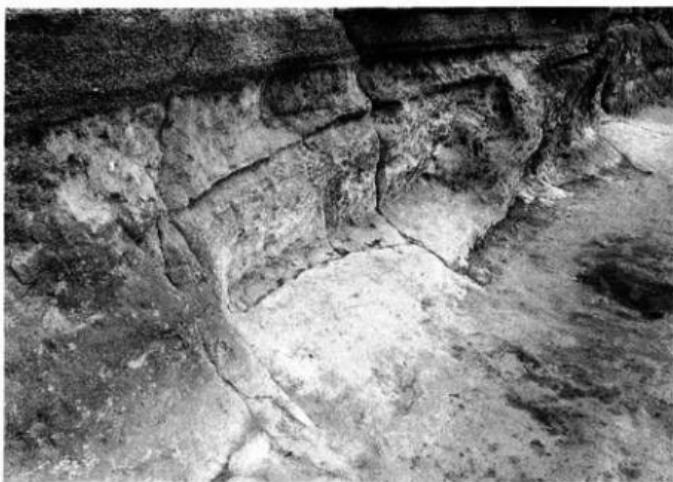


写真18 4号石窟(北より)



写真19 4号石窟(正面)



写真20 5号石窟(正面)

写真21
5号石窟奥壁



写真22
5号石窟開口部



写真23
5号石窟右壁





写真24 5号石窟左壁



写真25 6号石窟(正面)

写真26
6号石窟奥壁「あかぎれ地蔵」



写真27
6号石窟床面



写真28
6号石窟右壁





写真29 6号石窟左壁基部



写真30 6号石窟左壁奥



写真31 6号石窟右壁奥

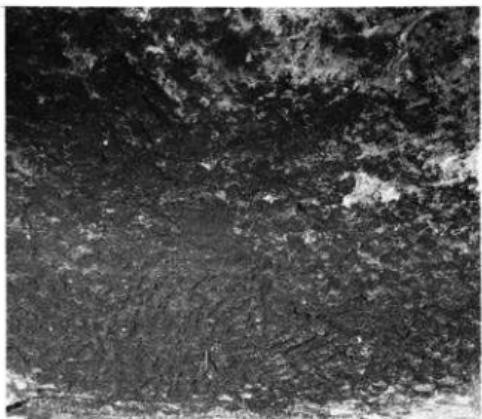


写真32 6号石窟天井部工具痕迹



写真33 6号石窟壁面工具痕迹



写真34 6号石窟奥壁仏像部分



写真35 7号石窟(全景)



写真36 7号石窟右壁



写真37 7号石窟(正面)



写真38 8号石窟(正面)



写真39 8号石窟奥壁



写真40 2号石段(正面)



写真41
2号石段積み石状況(側面)



写真42
2号石段積み石状況(俯瞰)



写真43
崖面(調査前)



写真44 6号トレンチ(西より)



写真45 6号トレンチ基部(北より)



写真46 6号トレンチ基部(南より)



写真47 9号石窟(全景・南より)



写真48 9号石窟堆积状況(南より)

写真49
9号石窟(正面)



写真50
10号石窟(正面)



写真51
崖上部平場(調査前・南より)





写真52 3号トレンチ(南より)



写真53 3号階段(南より)



写真54
3号階段堆積状況(南より)



写真55
崖縁辺部瓦出土状況



写真56
崖上部平場(調査前・北より)

写真57
第5トレーナー・豎穴造構
(北より)



写真58
井戸状造構(全景・南より)



写真59
井戸状造構(東より)



写真60
第5トレンチ南壁堆積状況
(北より)



写真61
SX-1「礎石」(東より)

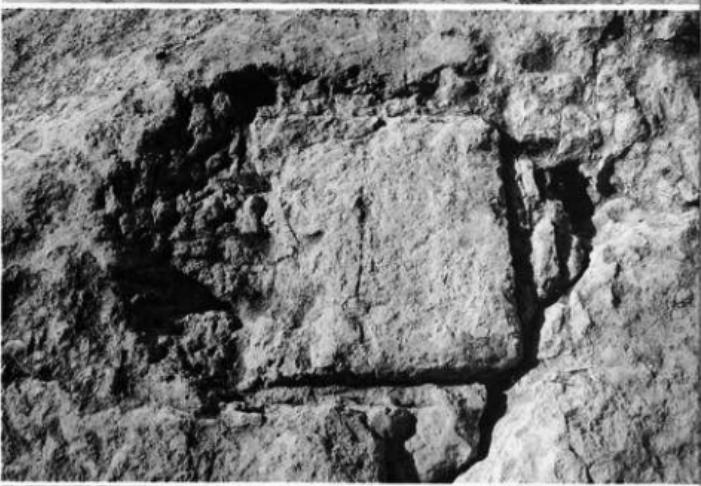


写真62
第7トレンチ(全景・南より)

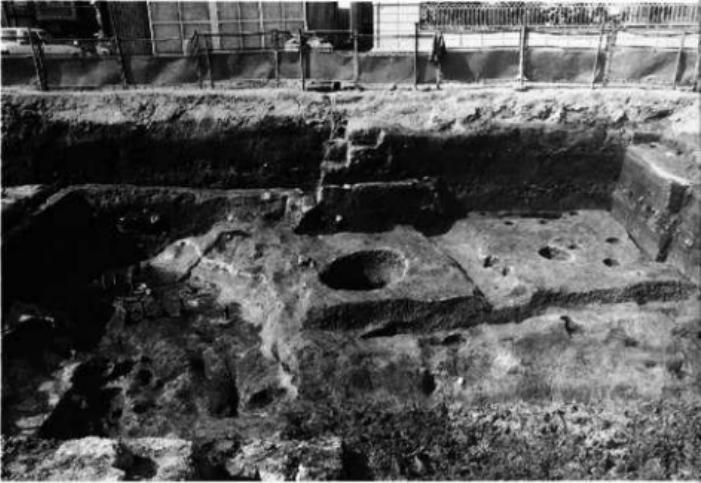




写真63 1号河川「洗い場」階段(西より)



写真64 1号河川遺物出土状況(東より)

写真65
1号河川土人形出土状況



写真66
1号河川杭列(東より)



写真67
1号河川杭列打ち込み状況
(南東より)

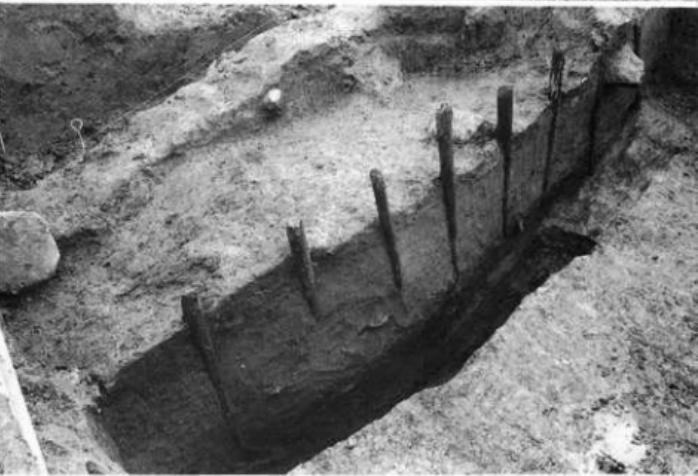




写真68
8号溝跡堆積状況(東より)



写真69
8号溝跡橋脚杭列・板碑出土
状況(東より)



写真70
第7トレンチ・井戸跡・溝跡
・土坑検出状況(南より)

写真71
1号井戸跡(北より)



写真72
第7トレンチ東壁堆積状況
(西より)



写真73
第7トレンチ中央部V層灰白
火山灰堆積状況
(南より)



写真74
移設板碑群全景
(東光寺裏山の墓地西端)



写真75
第1・2次調査出土板碑



写真76
東光寺石窟群(上段)



写真77
「薬師窟」(正面)



写真78
「阿弥陀窟」(正面)



写真79
「野狩初図」
(部分・宮城県図書館蔵)





1 : Ib-92



2 : Ib-101



3 : Ib-98



4 : Ib-110



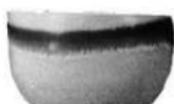
5 : Ib-186



6 : Ib-90



7 : Ib-93



8 : Ib-81



9 : Ib-33



10 : Ib-100



11 : Ib-32



12 : Ib-185



13 : Ib-84



14 : Ib-82



15 : Ib-96



16 : Ib-97



17 : Ib-94

遺物写真 I



1 : Ib-133



2 : Ib-87



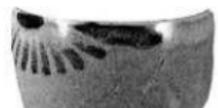
3 : Ib-59



4 : Ib-26



5 : Ib-75



6 : Ib-112



7 : Ib-106



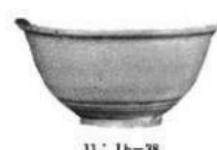
8 : Ib-135



9 : Ib-85



10 : Ib-95



11 : Ib-38



12 : Ib-144



13 : Ib-61



14 : Ib-86



15 : Ib-80



16 : Ib-6



17 : Ib-88

遺物写真 2



1 : Ib-89



2 : Ib-57



3 : Ib-121



4 : Ib-99



5 : Ib-37



6 : Ib-83



7 : Ib-107



8 : Ib-72



9 : Ib-67



10 : Ib-167



11 : Ib-69



12 : J-20



13 : Ib-30



14 : Ib-31

遺物写真3



1 : Ib-68



2 : Ib-64



3 : Ib-63



4 : Ib-62



5 : Ib-70



6 : Ib-65



7 : Ib-182



8 : Ib-48



9 : Ib-49



10 : Ib-14

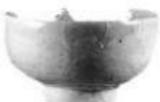


11 : Ib-53

遺物写真 4



1 : Ib-111



2 : Ib-108



3 : Ib-105



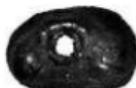
4 : Ib-58



5 : Ib-3



6 : Ib-179



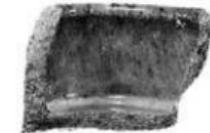
7 : Ib-44



8 : Ib-52



9 : Ib-19



10 : Ib-140



11 : Ib-41



12 : Ib-40



13 : Ib-102



14 : Ib-42



15 : Ib-103



16 : Ib-43



17 : Ib-131

遺物写真 5



1 : Ib-55



2 : Ib-168



3 : Ib-54



4 : Ib-7



5 : Ib-17



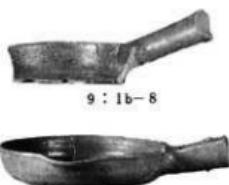
6 : Ib-16



7 : Ib-15



8 : Ib-47



9 : Ib-8



10 : Ib-10



11 : Ib-11

遺物写真 6



1 : Ib-115



2 : Ib-154



3 : Ib-132



4 : Ib-109



5 : Ia-2



6 : Ia-3



7 : Ia-42



10 : Ia-18



8 : Ia-11



9 : Ia-4



13 : Ia-1



11 : Ia-10



12 : Ia-41



14 : Ia-19



15 : Ib-13

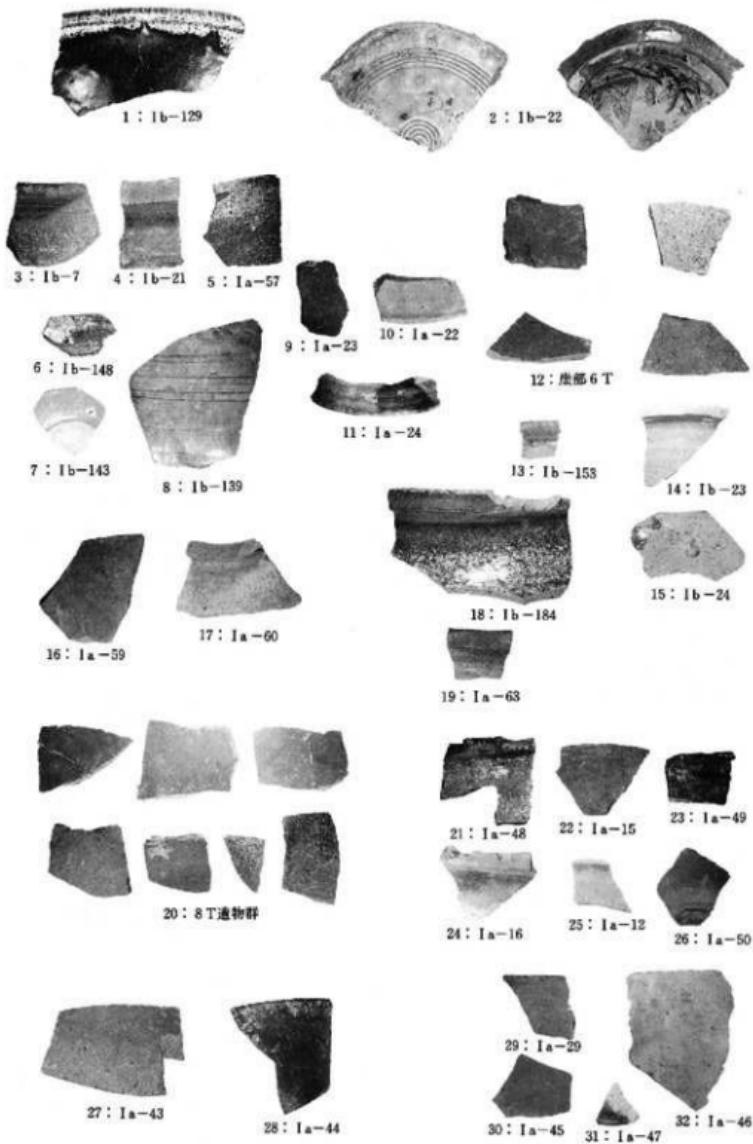


16 : Ib-20



17 : Ib-50

遺物写真 7



遺物写真 8



1 : J-21



5 : J-22



10 : J-10



6 : J-11



11 : J-60



2 : J-16



7 : J-25



12 : J-30



3 : J-12



8 : J-13



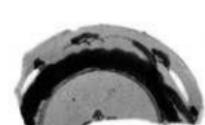
13 : J-23



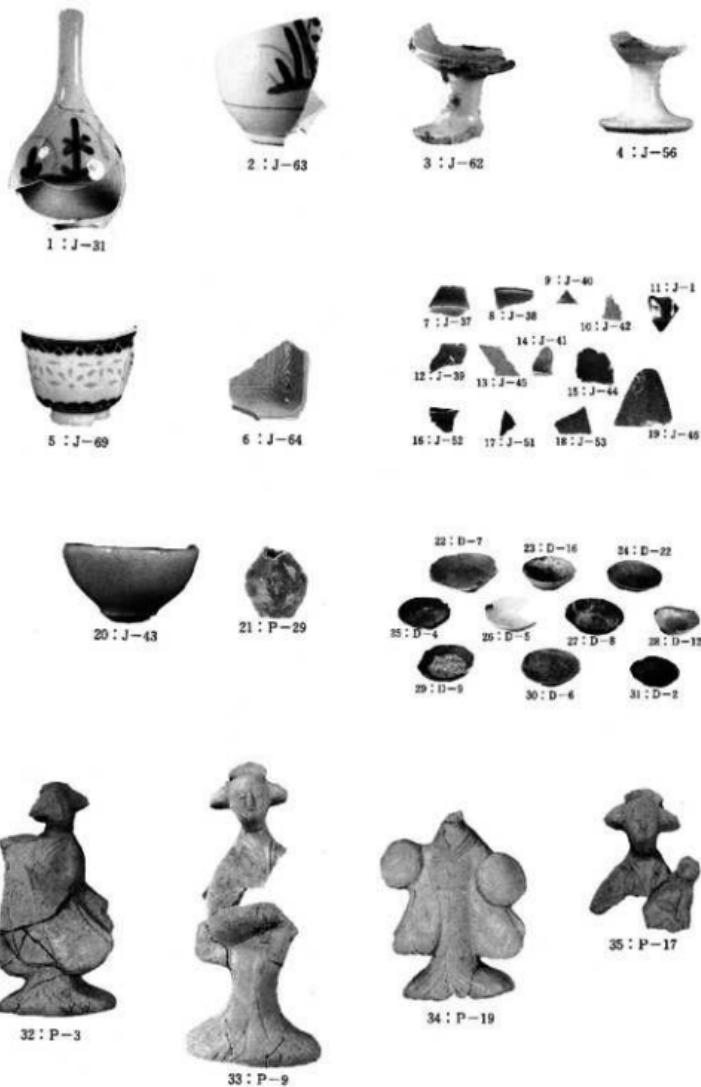
4 : J-32



9 : J-54



遺物写真 9



遺物写真10



1 : P-18



2 : P-20



3 : P-11



4 : P-10



5 : P-12



6 : P-13



7 : P-14



8 : P-25



9 : P-16



10 : P-5



11 : P-22



12 : P-21



13 : P-4



14 : P-15



15 : P-8



16 : P-7



17 : P-6

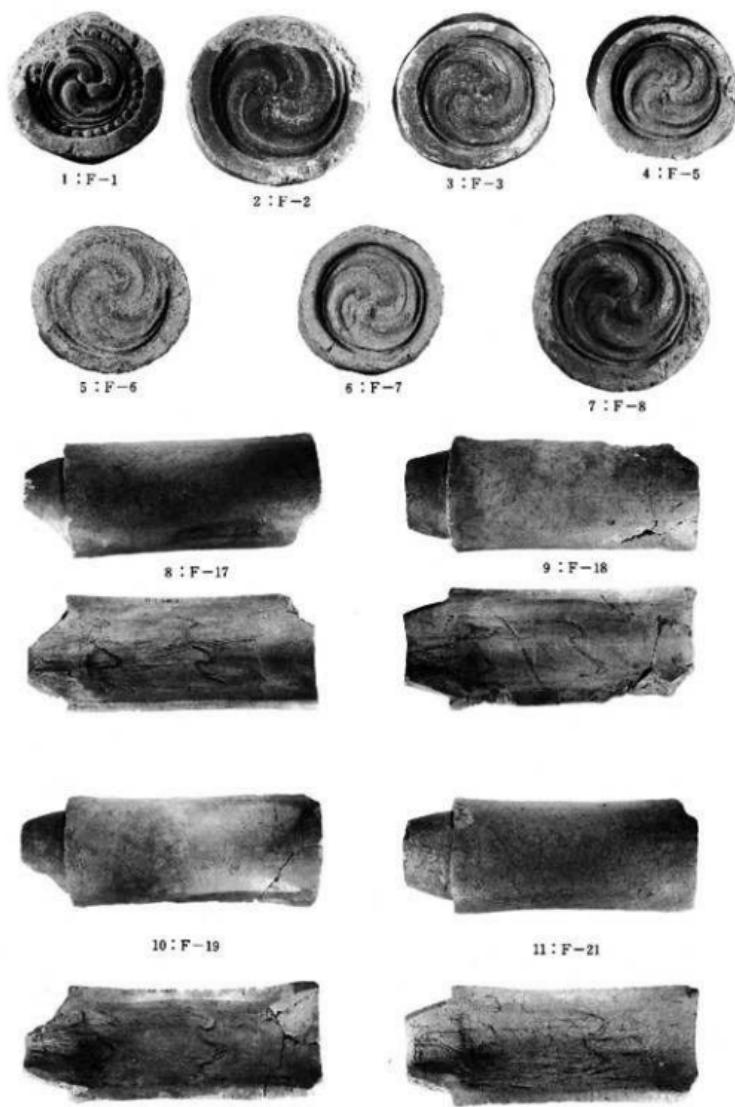


18 : P-23

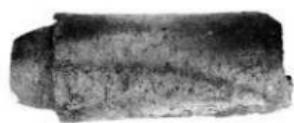


19 : P-26

遺物写真II



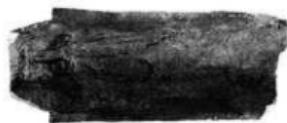
遺物写真12



1 : F - 22



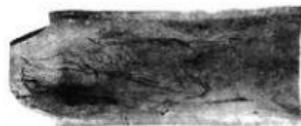
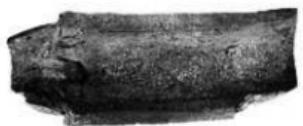
2 : F - 23



3 : F - 24

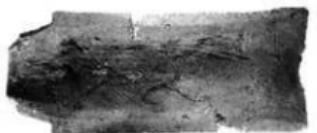


4 : F - 25



5 : F - 26

6 : F - 27



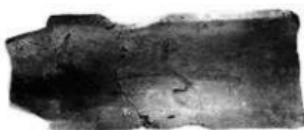
遺物写真13



1 : F - 28



2 : F - 29



4 : F - 31



5 : F - 33



6 : F - 34



遺物写真14



1 : F-47



2 : F-20



3 : F-57



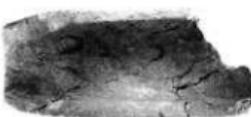
4 : F-58



5 : F-48



6 : G-2

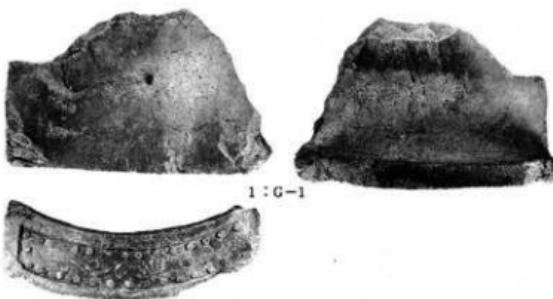


7 : G-3



8 : G-4

遺物写真15



1 : G - 1



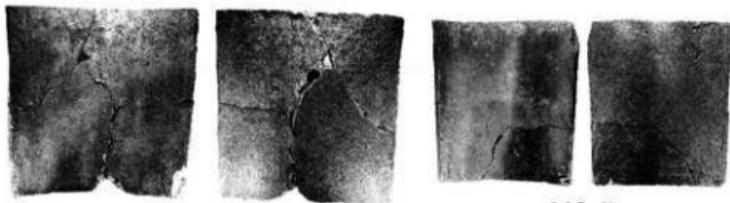
2 : G - 9



3 : G - 14

4 : G - 11

5 : G - 10



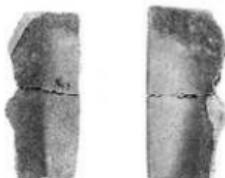
6 : G - 17

7 : G - 53

遺物写真16



1 : G-87



2 : G-59



3 : G-57

4 : G-98



5 : H-1



6 : H-2

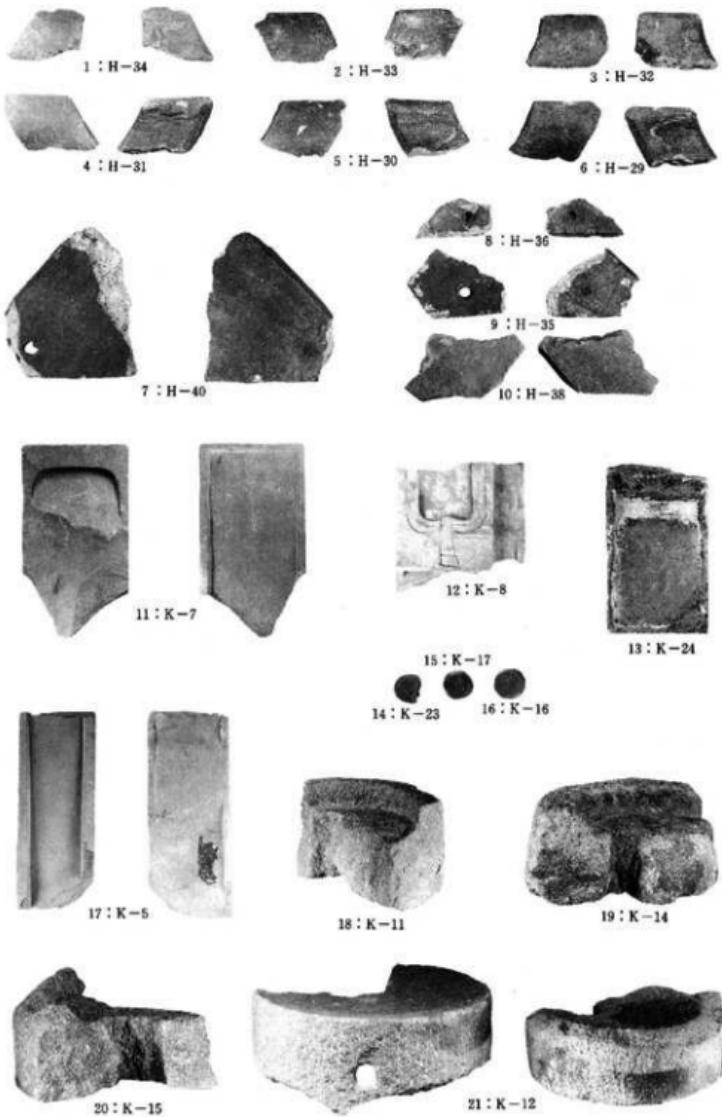


7 : H-3



8 : H-42

遺物写真17



造物厚真I8



1 : K-6



2 : K-40



3 : K-41



4 : N-62



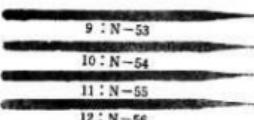
5 : N-36



6 : N-61



7 : N-64



8 : N-59

9 : N-53

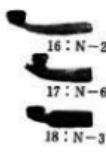
10 : N-54

11 : N-55

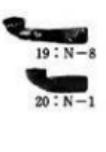
12 : N-56



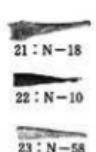
13 : N-25



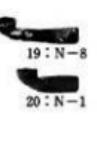
14 : N-19



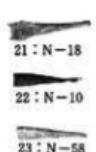
15 : N-20



16 : N-26



17 : N-63



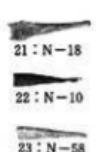
18 : N-3



19 : N-8



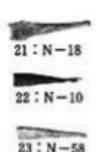
20 : N-1



21 : N-18



22 : N-10



23 : N-58



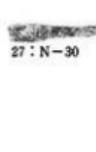
24 : N-47



25 : N-39



26 : N-93



27 : N-30



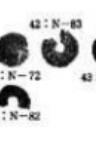
28 : N-75



29 : N-66



30 : N-88



31 : N-89



32 : N-81



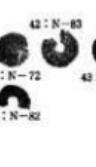
33 : N-76



34 : N-70



35 : N-86



36 : N-69



37 : N-83



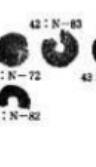
38 : N-72



39 : N-87



40 : N-81



41 : N-82



42 : N-83



43 : N-67



44 : N-73



45 : N-81



46 : N-79



47 : N-91



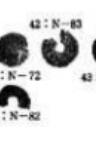
48 : N-80



49 : N-84



50 : N-85



51 : N-71



52 : N-77



53 : N-83



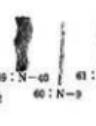
54 : N-74



55 : N-82



56 : N-42



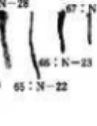
57 : N-37



58 : N-40



59 : N-17



60 : N-29

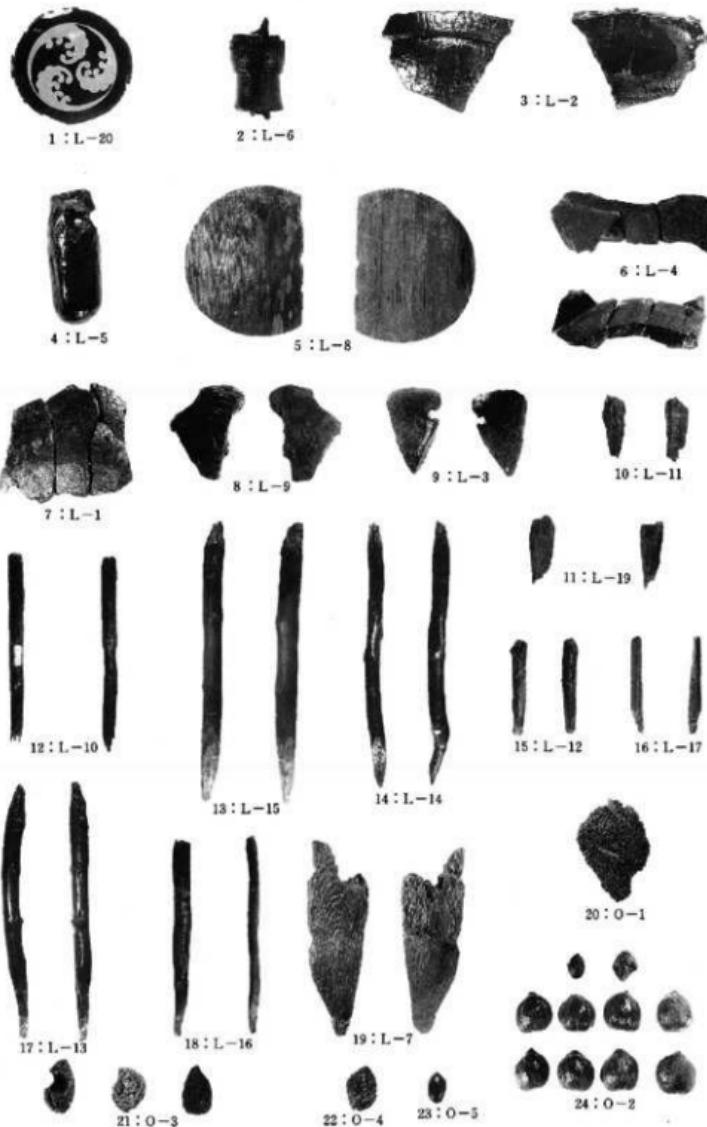


61 : N-22



62 : N-14

遺物写真19



遺物写真20

仙台市文化財調査報告書第112集

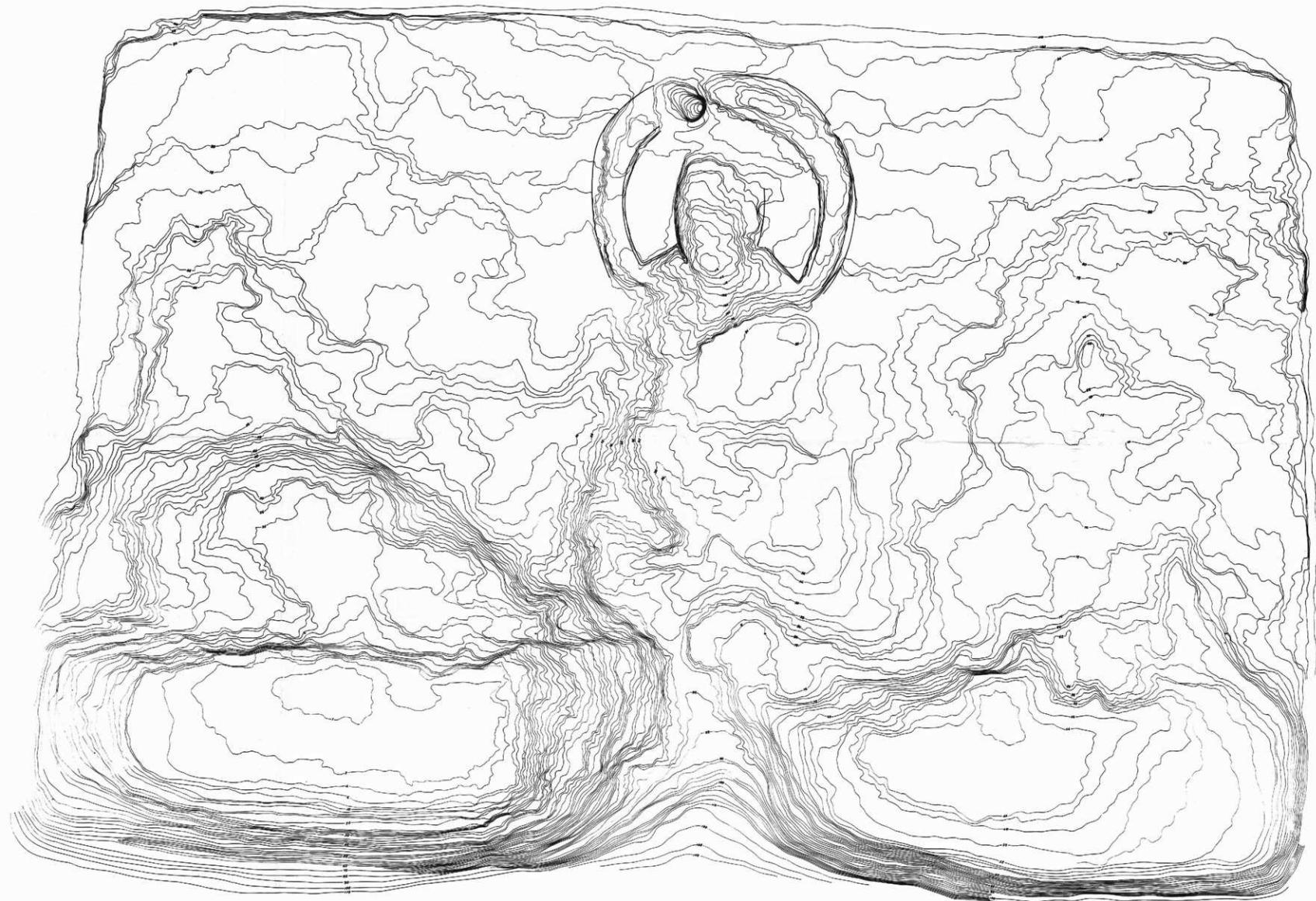
東光寺遺跡

第1・2次発掘調査報告書

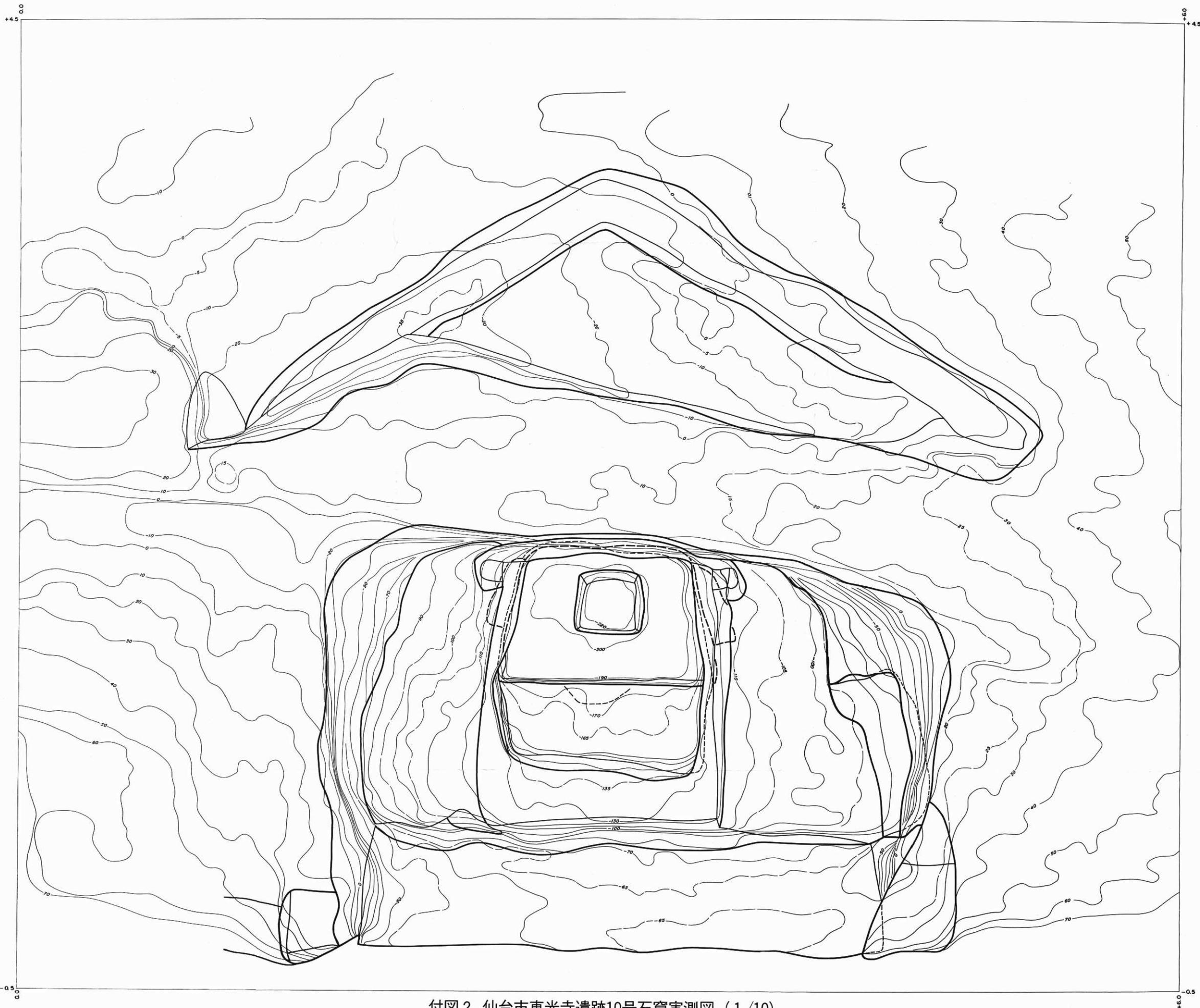
発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷 仙北プリント
仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

東光寺遺跡第1・2次発掘調査報告書
付 図



付図1 仙台市東光寺遺跡 6号石窟奥壁「地蔵菩薩坐像」実測図（1/4）



付図2 仙台市東光寺遺跡10号石窟実測図 (1/10)

